

---

# 「その者の名は」

mumu3173

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「その者の名は」

### 【Nコード】

N2765N

### 【作者名】

mumu3173

### 【あらすじ】

少年ロアーツは、エルズの街に住む元悪戯坊主。そんな彼が出会ったのは、さすらいの元旅人を名乗る少女だった。二人の出会いから一年、その少女の願うまま、ある誓いを交わした少年ロアーツだったが、少女の秘めていた謎が明るみになるにつれ、彼の思いは留まるどころか、増していく一方で……？ これは、少年のあだ名である『ロア』とは呼ばなくなった少女と、少女のそばにいるために『主』になることを決めた、少年ロアーツの物語。 第一部『一年目』終了。 第二部？開始。 キーワード変更しました。

## 「その者の名は」登場人物 - 等

### 登場人物

#### ロアーツ＝リーグル

本編主人公。本編開始時点：十二歳。第二部：十六歳。

本編開始の一年前、元旅人の少女であるラエルと出会う。

エルズの街の、『三邸宅』の一つ『リーグル』邸当主兼植物学者の母の子として生まれ、リーグルの名を名乗ることができる数少ない『邸宅』関係者の一人。

父と、母と、ラエルと共に住んでいる。

学術よりも武術体術が好きで、よく言えば行動派。

#### ラエル

リーグルの邸に居候している『自称：元旅人』の少女。

出自、年齢等、諸々の事柄の詳細が全て不明。

常に頭巾を身につけている。

書物好き。頭が良く、成績も上位。

#### ルレッセ＝リーグル

#### レフェルス＝リーグル

ロアーツの両親。ラエルの親代わりをそれぞれ自負していて、時々息子よりも少女の方を優先する。

母ルレッセは、リーグル家当主兼植物学者。ケインの母の姉。分家筋ながらシュバルツの家の血を引いている。

父レフェルスは、行商人兼物資運搬人を生業としている。街の幾人かの商人や自警団、学者達と手を組んでいる。

ケイン＝シュバルツ

ロアーツの友人の一人。邸宅シュバルツ家の第二子。

ロアーツの母とケインの母が姉妹であり、従兄弟同士。

書物好き。頭がいい、成績もトップクラスなど、ラエルと類似点がある。

コーラル

ロアーツの友人の一人。その中でも格別の悪友。

ラエルのことが好きで好きで仕方ない。話し上手。

設定など

『エルズの街』

ロアーツたちが住む街。

元城砦都市跡地に興った街。エルズの河という長大な河に抱え込まれるように存在している。

そのため、街の唯一の入口には、跳ね橋がかかっている。

普段、橋は上げられた状態で、その状態の上で街外門と呼ばれる大きな門が閉ざされており、その前方に自警団の詰め所がある。

河の反対側である山側には深い森が広がっていて、街に住んでいる者たち曰く、森の奥深くには『猛獣』が棲んでいるらしい。

『リーグル邸』

三邸宅の一つ。通称：緑のリーグル。

大昔、国の都の秀才たちを差し置いて、当時未知の病であった病の薬を発明し、その諸々の恩恵として興った家と邸。

現在にもその名残として、邸と共に数々の貴重な植物が残されている。

その植物を保持することこそが当主拝命の条件であるため、リーグルの家は世襲制ではない。

『シュバルツ邸』

三邸宅の一つ。通称：学問の家。

世に名高い学者や政治家に教えを授け、都へと送り出している。

その名を継ぐ血縁の者たちは決まって頭がいい。継承者は一族の中で一番優れている子女子息。

大昔のことだが、貴族の血までもが流れている。

『ヴァレンタイン邸』

三邸宅の一つ。通称：武術の家。

世に名高い武芸者、軍人の多くが、邸宅家の人間が師範である『ヴァレン流技』の出身。

国中の男たちの憧れで、名門。入門には厳しい審査が必要とされる。

その名を継ぐ血縁の者たちは、誰であろうと、何かしら武芸をこなしてしまおうと言っ。

大昔のことだが、貴族の血までもが流れている。

## 「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」 1

目覚めた途端に告げられた言葉は、まるでわけがわからなかった。

「おはようございます。ロア様。突然ですが、これより、あなたのことを主様しゅさまとお呼びしたいのです」

（彼女は、今、俺に何を言った？）

俺は、ゆっくりと体を起こす振りをしつつ、発言者である『その人』に視線を向けた。

いまや彼女だけの特徴トレードマークといっても過言ではないだろう頭巾を被り、黒に近い紺色の上衣と真っ白の下衣服姿クラシをしている少女も、俺の様子を窺うような目で見ていた。それは間違いなかった。……どうやら、人違いというわけではないらしい。そもそも、俺のあだ名である『ロア』と言う名前呼びかけられているばかりか、たった今まで眠っていた俺の部屋にいる人間だって俺と彼女しかいないのだから、彼女の言葉は俺以外の誰に向けて言ったというわけでもなかったようだった。

（ だとしても、……なんで今更？）

（大体、『主様』ってナニ？）

やがて、鈍く動き始めた頭から、ぐるぐると疑問が浮かんでは増えていく。答えが見えないまま、埋め尽くされていくようで……。俺がどう反応すべきか考えあぐねている間に、少女はその場を締めくくりかけようとしていた。

「 そういうわけですので、よろしくお願ひしますね。『主様』」

「？」

そのとき、俺は初めて、主と呼ばれた。

俺を主と呼ぶ少女は、まるでそれが当然であるかのごとくニコニコと笑っている。

ただ単に、彼女の呼ぶ『呼び名』が変わっただけ。……だとしても、俺には納得できなかった。

(これから、俺は、そんな風に呼ばれなきゃいけないのか?)

今更な話だった。彼女と出会ってから、もうじき一年が経とうとしているのに。ようやく、俺の名をあだ名の『ロア』の名で呼んでくれるようになっていたのに。

( そんなの、嫌に決まっている! )

「ちょっと待てよ! ラエル!」

俺は、明らかに否定の意を込めた声を出して、少女に意を決したつもりだった。

しかし、俺の予想に反して、少女の ラエルの微笑みは崩れなかった。むしろ、満面の笑顔のまま、ラエルは次の言葉を言っただけだ。

「えっと、……何をですか?」

「は?」

うるたえもしないその反応に、逆に俺が拍子抜けしてしまう。

「な、何をもって……」

あまりのことに言葉が続かなかった。

（とぼけているつもりなのか、それで！ 俺の不満たっぷり声色を聞いていただろうに、よくもぬけぬけと……！）

ふつつつとわきあがる怒りを、自らに感じる。

けれど俺は、今すぐにも怒鳴り声を上げたい気持ちを抑えるためにゆっくりと呼吸した。

熱くなつたほうが、負け。

俺は自分自身に言い聞かせると、さも冷静であるかのように装つてから、ラエルに問うた。

「……まずは理由を聞かせてくれ」

ラエルが眉根を寄せて、考える仕草を見せる。

「理由……ですか……」

俺は、辛抱強く彼女の言葉を待つ。

やがて、ラエルが言いにくそうにぼそぼそと言った。

「なんとなく、です」

俺は、心底ほっとしていた。

「却下だ。そんなもん！」

特別な理由なんて無いはずだと思っていたし、そうであってくれと、こっさり全力で祈っていた。まさにそんな曖昧な答えだけを待

ち望んでいたのだ。

「ラエル。頼むから、こんな朝っぱらから変なこと言い出すのはやめてくれよな？」

あの日の朝、きつぱりと宣言したからには、その問題は早々に終わりを告げるはずだった。

なのに、俺が何度文句を言っても、ラエルはその呼び名を一向に止めようとはしなかったのだ。

## 「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」2

ラエルが俺のことを変な呼び名で呼び始めるようになってから数日が経った、とある日のことだった。

件の少女が食卓の間から出て行くのを待っていたかのように、父が話を切り出した。

「ロアーツ。あれは一体何の冗談だ？ 何故おまえがラエルに『主様』などと呼ばれている」

(……ようやく、気付いたのか。もう一週間近く経っているのに)

俺はやるせない気持ちになった。

「あれは……俺にだってわけがわからないだよ、父さん。ラエルにしろ、俺にしろ、悪い夢でも見てるんじゃないかと疑ってるんだけど」

あわよくば父が取り成してくれるかもしれないと企み、父とこそぞ喋っていると、俺の背後に人が立った気配がした。ちらりと頭だけで後ろを振り返ると、食後の後片付けをしていた母が驚いたように俺を見ていた。

「あら？       じゃあ、あなたが悪趣味な理由とかで彼女にお願いしているわけじゃないのね？」

母の言葉が意味することに俺ははっと息を呑んだ。慌てて体勢を戻し、父と母とを見比べる。揃いも揃って目を丸くしているのを見て、俺は頭が痛くなった気がした。

「……冗談じゃない。どういう意味だ」

我知らず低い声が出た。

まさかとは思った。が、この二人ならば、俺に対して変な誤解をしてもおかしくはなかった。

何しろ、この二人にとつての優先順位は、ラエルが上位で俺が下位。悪いことと変なことは全て俺が企てていると考える二人のことだから、俺がラエルに言わせているとでも思ったのだろう。そんな誤解をされるのはものすごく腹が立った。

「まあ、それもそうよね。普通は名前で呼ばれたいものよね。『ロアーツ』とか。今までみたいに『ロア様』とかね」

母は俺の苛立ちに気付いているのかいないのか、どこ吹く風と言わんばかりにのほほんと呟いた。

「まあ、そうだろうな。元々彼女は物言いが丁寧で、わたし達にまで他人行儀が抜けないのは気になっていたが……、おまえのせいだったんだな。ロアーツ」

父が納得したかのように肩に手をかけてくる。俺はその腕ごと振り払って、睨みつけた。

「違うだろ！ 俺のせいじゃなくて、アイツがこだわりすぎなんだよ！ 大体俺は　！」

「あらあら。こだわっているというのなら、それはあなたもでしょ？ ロアーツ。名前でもあだ名でも呼ばれなくなったからって不機嫌になっちゃって」

「わたしたちに当たるのがいい証拠だな」

うんうんと頷きあっている両親は、絶対に俺の反応を見て面白がっているに違いなかった。ラエルのことを少しでも思うのなら、自分たちも行動すればいいのに、俺に対してはいつもこんな扱い。本当に、たちが悪い。

「うるさい！ 今に見てろよ！！」

両親達に馬鹿にされっぱなしなんて我慢ならなかった俺は、その夜、ラエルに挑むことを決めた。

あれこれ考えているうちにあつという間に夜になって、真夜中になつていた。俺がラエルの部屋に向かった時には、もう夜更けも大分過ぎた時間だった。

出直すことも一瞬考えたが、俺はあえてそれを選ばなかった。

部屋に入れてもらうのは流石の俺も躊躇ためらったので、止むを得ずラエルに部屋から出てきてもらって、廊下に立って、そのままの状態  
で話を切り出した。

改めて呼び名問題の撤回を求めた俺に対し、ラエルは嫌味なまでに完璧に不敵な笑みを浮かべている。

「主様？ このわたくしに、口喧嘩で勝とうとお思いなのですか？」

ラエルが自信満々なには理由があった。まさに、れっきとしたものが。

だが、今はそれとは関係ない。そのはずだった。

「あのな、ラエル。確かに俺はおまえに口喧嘩では勝てない。この間からずっと負けっぱなしだ。……だけどな、今の俺はおまえと口

喧嘩をしに来たわけじゃない。おまえに主様呼ばわりされる筋合いはないから、止めて欲しいって言いに来たんだよ」

ラエルに交渉すると決めてから、俺は今までの経験をもとに、直球作戦をすることに決めていた。

理想では、言質を取りたかった。けれど、頭の良くない俺が言質を取ろうなんて企めば、逆に彼女の手玉にされてしまう危険性が高く、今までにも何度かその苦しみを味わっているからだった。

「いいえ、そんなことはありません。わたしは、あなたにこそ感謝しているのです」

棒読みとは言わないが、余りにもすらすらと答えられると、本当にそう思っているのかどうか怪しいと、俺は思う。

( 大体、感謝しているのなら、俺の望むようにしてくれればいいのに )

「感謝しているからこそ、あなたを主とお呼びしたいのですよ」

続けざま、俺の思考を読み取ったかのようにラエルが言う。

問答が、幾度も繰り返されて、幾度も俺が押し負けた。

「……なあ、どうしてもか？」

「どうしても、です」

間の取りかた、にこりと微笑むタイミングまで、ラエルのそれは完璧に思えてならない。……そもそも、ラエルはどこでこんな技術を得たのだろうか。

(俺とラエルは一緒に住んでいて、一緒に学び舎に通って、一緒に友達連中と遊ぶ仲であるばかりか、それこそ、四六時中そばにいたのに？ ……やっぱり、成績の良さだろうか)

しかし、どれだけラエルの口が上手かろうと、俺にだって譲れないものがある。

だから、俺は、体中にある力という力を振り絞ってその思いを言葉に変えた。

「お、俺は……ロアって呼ばれるほうが……その……嬉しいんだけど、な？」

( い、言ってしまった！ )

あまりの恥ずかしさに、俺はまともに彼女の顔が見れなくて、顔を俯かせてばかりいた。

けれど、ラエルはすぐには何も言わず、声を上げるなどの反応を見せなかった。俯いたままにいる俺は、彼女の様子になって仕方なかった。

( 一体、ラエルはどんな反応をするのだろうか？ )

俺は恥じる気持ちを押しやって、恐る恐る顔を上げて様子を窺おうとして、彼女の申し訳なさそうな表情に気付いてしまった。

「あ、あの。ごめんなさい」

俺は、振られた。

完敗だった。

思いがけず、かなり落ち込んでいると、ラエルが部屋の入口近くから出て来て、廊下にいる俺のそばにまで歩み寄ってきた。

まさに目の前、手を伸ばせば届く距離まで近付いてきたラエルが言った。

「そんなに、嫌ですか」

「嫌」

即答してしまった。

してしまってから、気付く。まるで、駄々をこねる子供みたいだと。……だけど、それは俺にとって紛れもない本心だった。

気まずい思いのままラエルを見やると、窺いがちに見上げてくる眼が、ゆらゆらと揺れているのがわかった。ラエルも、迷っているのかもしれない。

チャンスだと、俺は負けん気を奮い立たせた。

「ほら！ おまえだって、急に　ラエルって呼ばれなくなったら嫌だって思うだろ？」

はっと息を呑むような気配がして、ラエルが押し黙った。そして、顔を俯かせてしまう。

妙な間があった。

その絶えず続く沈黙の間に、俺はラエルが考え直してくれることを信じていた。

（　ああ言えば、きつと、呼んでほしくないっていう俺の気持ち、わかってくれるはずだよな……）

そして、ふと黙ったままにいるラエルを見て、仰天した。ラエル

が、ぼろぼろと涙を流し、泣き出していた。

「ラ、ラエル！？　なんで泣いて　っ！」

涙した眼と目が合った途端、揺れる眼の原因に気づく。

原因は、今の今まで喋っていた、俺しかない。

「　ご、ごめん。ラエル。悪かった。　あ、あの、頼むから、泣くなよ？」

伸ばした手で涙を拭っていても、ラエルは一向に泣き止んではくれなかった。

どうしようもないまま俺が立ち尽くしていると、あっという間にラエルは部屋に戻ってしまって、ドアを閉められてしまった。ノックをしたところで開くはずもなかった。

「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」2（後書き）

どうしようもない矛盾を見つけてしまい、訂正させていただき  
ました。すみません。8・29

### 「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」3

ある種の喧嘩別れをした翌日、半ば予想していたとおりの事態が、居間で俺を待っていた。

現れた俺に対峙する母の姿と、その母の後ろに控えているラエルと、そんな俺たちを傍観する格好でいる父の姿があった。

俺はそれを見て、両親たち二人のそれぞれの仕事は良いのだろうかと、何故なのか比較的どうでもいいことに思い当たった。

あ、仮にそれを言い出せば、俺やラエルだっていつもどおり学舎に行かなければ行けなくなるので、あえて俺は何も言わなかった。カッコウ

今朝の俺は、誰にも眠りを妨げられなかったから、当然のごとく朝寝坊している。そのため、俺がひとりで起きる時間帯　いまやお昼に近い頃合であるというのに、誰にも戸惑った様子はないのだから驚きだった。

今日一日、我が家にいる人間の全員が、俺とラエルの呼び名問題に時間を割くつもりらしかった。

「遅かったわね、ロアーツ！　よくもまあたくしのラエルちゃんを泣かせましたね？」

先手は母だった。母の声は異様に冷たくて、やはり、どうしようもなく俺にとつて不利な一点をついてくる。

ラエルの目元は、誰がどう見ても赤く腫れ上がっていて痛々しかった。

(可哀想に……)

そう思うと同時に、誰がどう考えても俺のせいだということが、十分すぎるほどわかっていた。

「……ごめん。ラエル」

ラエルは俺の言葉に反応したようだったが、何も言わなかった。

「母は見損ないましたよ。この件に対し、決してあなたに味方しませんからね!」

母はじろりと俺を睨んだかと思うと、唐突に部屋を出て行ってしまった。

予想していたよりもやけに説教は短かった。

「ああ、母さんなら、おまえの朝食を用意しに行ってるんだろ  
う」

「はあ?」

母が出て行ったのを見送っていた俺は、父を見た。驚いたと言うより、拍子抜けしそうだった。

「朝食つて? しかも、俺の? ……味方しないって言うておいて  
?」

「それとこれとは話が別らしいな。本当に、母親とは複雑な生き物  
だよ」

感慨深げに呟いていた父が、ふと俺に視線を向けてくる。

「……それで、まだ話は終わっていないぞ。ロアーツ?」

にやにやと笑う父の眼が、俺を見定めるかのようにずっと細くな  
った。

「まず、父さんはどっちなんだ？ ラエル側なの？ ……それとも？」  
「わたしとしては、ラエルの涙の一件を聞いてみないと、なんとも言えないな」

やはり、父としても彼女の腫れた目元には見過ごせないものがあるらしい。逆の立場なら俺だって見過ごせないのだから、当然といえば当然なだけけれど。

「父さん。言つとくけど、俺はラエルを無理やり泣かせたわけじゃない。それに、口喧嘩してるつもりもない。ただ、ちよつとだけ意見の食い違いがあつただけだ」

「意見の食い違い？」

父は半信半疑に呟いている。

「そうだよな、ラエル」

「……はい」

ラエルが小さく頷いてくれたので、俺は少しだけ安心した。口を開いてくれたことが事の外嬉しかったのもあつたし、やっと話が進められそうだったからだ。

「それで、昨日の話の途中、ラエルが『感謝しているから』って言ったんだよ。俺に対してな。今朝になつて気付いたんだけど、もしかして、ラエルが『あのこと』を勘違いしてるんじゃないかって」「へえ。彼女が勘違いを？」

父があまりにもわざとらしい声と言葉で俺をあおる。父の飄々と

している態度に、俺はイライラした。

(知らん顔しやがって！)

「当たり前だろ！俺がラエルに感謝される理由なんて、一つしかない。それに関しては、父さんと母さんが一番に知ってるだろ！？」

「おいおい、怒鳴らなくてもいいだろう？」

今度は逆に取り成そうとしてくる父。が、そんな反応を見ても、苛立ちは引いてくれない。どうしようもなく、あの子の無力感を思い出してしまふ。

(あの子だつて、今だつて。俺には何も出来ない。俺自身の力では何も……っ！)

これ以上父を見ていたら間違いなくキレてしまいそうだったので、俺はラエルに向き直った。

「ラエル。聞いて欲しい。あの子、ラエルを助けたのは俺じゃないんだ。父さんと母さんで……俺じゃないんだ」

俺とラエルとの間には、血の繋がりなんてものはない。恐らく、父と母との間にも無いだろう。なのに、何故同居しているのかと言うと、元旅人の少女であるラエルが街に訪れたそのとき、たまたま出会ったのが俺だったからだ。

あの子、街の勇志で結成されている自警団の男たちに詰問されて、少女はただただ困りきっていた。

「ラエルは、あの子のごたごたで忘れてしまってるかもしれない。でも、俺は覚えている。俺がおまえを助けたんじゃない、俺が

『リーグル』の家の『ロアーツ』が、周りの大人たちに言い張ったからこそ、父さんと母さんが何とかしてくれたんだって……」

俺と父と母が名乗ることを許されている『リーグル』の名は、街に住む者ならば誰もが知っている、街の『三邸宅』を意味する家名の一つだった。三邸宅は、エルズの街にとって重要な役割りと使命を持つらしく、色々な力としがらみとを併せ持っている。

といっても、邸宅の当主はあくまで母のみだった。しかも、邸宅『リーグル』の継承は、世襲制ですらない。俺は、たまたま継承者として相応しい現当主の母の子だから、その名を名乗っているだけでしかない。

だから、あの日、初めて出会った少女が心底困り果てていても、俺には何も出来なかったのだ。俺自身には、何も。どうしようもできないまま、成り行きを見ていることしか出来なかったのだから。

いつの間にか、居間に戻ってきていた母が父の傍らに立っていて、二人して俺とラエルを見つめていた。当初はラエルの味方ばかりかと思っていたけれど、どうやら傍観者を決め込んでいるらしかった。ふと、ラエルの様子を見やる。視線をきよるきよると彷徨わせていたラエルは、俺と眼が合うと、居たたまれないかのように肩を竦ませるのだった。

「あの……」

ラエルの声が聞こえて、俺はてっきり『わたしの勘違いでした』とでも言ってくれるだろうと、樂觀した。

「わたし、そのことなら覚えています。　すべて知っていますよ

？」

「へ？」

ラエルの言葉に、思わず、間抜けな声が出た。

「ど、どういうことだ？」

「先日、レフェルス様にもルレッツセ様にも申し上げましたけれど、わたし、あのことのことを覚えていますよ？ 多分、あなたよりも正確に」

父と母それぞれに視線を向けてから、ラエルは俺に向き直り、薄く微笑んだ。

「行く当ても無くたどり着いたこの街で、わたしは門前払いされそうになっていました。わたしを取り囲む人々の視線。けれど、よく見れば、自警団の門守役の人たちも、周りで成り行きを見ていた人たちも、皆が困っていたようでした。……恐らく、規則としてわたしは追い出されようとしているのだと、いつしか、わたし自身にもわかっていました。同情的な視線、申し訳なさ、後ろめたさ。そんな感情がああ場を渦巻いていて。ある種の一触即発的な雰囲気、あなとき、あなただけが壊して下さったのですよ？」

おい、門守のオジサン、みんな！

こんな女の子一人に何やってるんだよ！！

ラエルの言葉を聞いて、俺は当時の記憶を思い出す。

あの日、たまたま通りがかっただけの俺は、野次馬連中を押しつけて、そうやって周りの大人たちに食って掛かったような、そんな気がしてきた。

「え、えーっと……。そうだったような、そうじゃなかったような……？」

思い出してしまったような気がする。

とはいえ、今更それを認めるのも忍びなかったので苦笑いしていると、父と母が大げさに肩をすくめて見せた。

「……どうやら、おまえの方が勘違いしていたみたいだな。ローア  
ッ」

父がにやにやと笑っている。

「我が息子のことだから、どうせ忘れていると思っていたわ」

母は「ごめんなさいね」と囁いてラエルを見やった。ラエルはラエルで「いいんです、わたしは別に……」とか呟いている。さっぱりわけがわからなかった。

「そもそも、わたしの質問に答えていないしな。で、ローアツ？ 結局、昨夜ラエルが泣いた原因は何だったんだ？」

俺があつと言う間もなかった。上手い言い訳を考え付くよりも先に、ラエルに真実を告げられてしまった。

その、子供じみた理由を。

「実は……嫌だと、言われてしまったただけなんです」

言葉が続かない。俺は居たたまれない思いで、二人を見た。父と母も固まっっていて、恐らく絶句していたようだった。

「……呆れた。どっちもどっちね」

母の呆然とした声は、すぐさま父の笑う声にかき消された。

「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」3（後書き）

若干言い回しを訂正させていただきました。すみません。 8・23

## 「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」4

「昨夜は、泣いてしまっでごめんなさい」

父と母が去り、冷めてしまった朝食を自棄食<sup>ヤケ</sup>いしていると、ラエルが言った。

朝食に向けていた視線を、ラエルへと向ける。父と母がいたときとは違う顔をして、ラエルは俺を見ていた。

「泣くつもりなんてなかったんです。だって、泣いてしまつたら、優しいあなたは何でも言うことを聞いてくれるから。……だから、そんな卑怯な真似したくなかったのに。わたしのこと、怒っていませんか？」

つらつらと語る声が、不安に駆られているように聞こえるなんて気のせいだと思いたかった。

「別に、いいよ。もう」

俺はぶつきらぼうに答えた。そして、視線をほぼ平らげてしまっていた朝食へと戻す。

「おまえは、頭いいからな。こうなるような気はしていたんだ。……だから、いいんだ。別に。おまえが、泣くほど嫌がるなら、主様でも何でも、呼び名なんか別に……」

「違うの！」

諦め気味に呟いていたら、ラエルが強く遮った。  
珍しいと俺は思った。

(俺なんかはともかく、ラエルがこんな風に強く自分の意を通すことは滅多に見たことが無かったのに)

「違っつて……何が？」

「わたしが、泣いてしまったのは、あなたに対する呼び名のことなんかじゃないの……」

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

謝り続ける彼女の様子を不思議に思いつつも、俺は聞かないわけにもいかなかった。

「じゃあ、何だっつて言うんだ？」

ラエルが、俺を真っ直ぐに見る。

「あなたが『俺の気持ちが変わったか』って言ったでしょう？ 初めてわかったの……すごく怖かった。すごく嫌だった……っ」

「ああ。あれか。もしもの話で俺が言った『ラエルって呼ばれなくなったら』って話のことか」

頷いたラエルの眼を見ると、少し潤んでいるように見えた。そのときのことを思い出して感情が高ぶっているのだろうか。 何にせよ、由々しき事態であるように俺は思えた。

「だから、泣くなって。あんなこともう言わないから  
「本当？」

ラエルは驚いたように目を見開いて俺を見ている。

「本当だつて。……えらく気にしていたんだな。あの言葉。俺にとつてはただの腹いせ紛れの台詞だったのに」  
「……ごめんなさい」

何とか笑わせようと思つて、明るい口調で話そうとするのに、ラエルは変わらず湿っぽい顔をして、おまけにくすつと鼻をすすらせるから、俺にとっては気が気ではない。

「いいつて！ もう、わかつたから……」

「……わ、わたし、どうしたらいいんでしょう……」

俺の密かな努力も空しく、とうとうラエルは泣き出してしまった。

「あー……。ラエルつてば、泣き止んでくれよ……」

俺の言葉に慌てたようにラエルが目をごすり、涙を拭おうとするけれど、その勢いは止まらないらしくった。後から後からこぼれてくるかのようで、可愛らしいしゃくり声まで上げ始めている。

どうしたらいいのかわからないけれど、泣いているラエルのために俺は何かしてやりたかった。慰めになるかわからないまま、俺はラエルに近付いて、彼女の身に着けている頭巾ごと頭を撫でた。

ラエルが驚いたように俺を見上げて、その拍子にラエルの目から頬へと一つ涙が落ちていった。

「でも……でも……。わたしは、違うのですよ？」

泣きながら、ラエルが言う。

俺は極力優しげな声になるように装って声を発した。

「何が違うんだよ？」

「わたしは……こんなにも異質な存在なのです。生まれにしろ、この髪色にしろ。どちらにせよ、わたしは……『ラエル』という名を持つものだから。……わたしは、違うのに。わたしは、ただの……、あなたの言う『ラエル』でいたいのに」

そういえば、彼女の髪色は、この街やこの地方では珍しい色合いだったかもしれないと、俺は思った。普段目にする機会が少ないせいか、ついつい忘れてしまいがちになるのだが。

頭巾を身につけた彼女の目から、また一滴涙が頬を伝っていく。

「わかることといえば、違うことだけだなんて。わたしはっ、どうしたらっ！……どうしたら、あなたのそばに……。ラエルでいられるんでしょう？」

意味深な言葉だった。俺は思わず聞き返していた。

「……ラエル？ おまえ、今何て言った……？」

俺は言葉の意味を何度か反復して、ある予感を胸に息を呑んだ。

「ラエル、おまえ、まさか……っ!？」

かつて、身寄りも無い、行く当ても無い、何もわからないと告げた『元旅人の少女』を、俺は今一度思い出していた。

(まさか、唯一名乗ったその名前も ？)

それが意味することを思い、俺は涙する彼女をただただ見つめてしまっ。

「……主様……」

彼女の、誰かを呼ぶ声がする。

俺にはそれが、救いを求めるような声に聞こえた。

「もしもわたしが、……わたしが、『ただのラエル』ですらいられなくなったら、わたし……っ！」

迷いも、ためらいも。決意も、本心も。その言葉を告げるまでの、たった一瞬のように俺に思えた。

「言うな」

俺は、彼女の言葉を遮るかのように呟いて、その身体を抱きしめていた。

思いがけないほど細くて華奢な身体だった。戸惑ったようなその身体が一度身じろいだから、俺に身をゆだねるように僅かな重みが加わって、俺の背にその手が触れた。

瞬間、壊したくないと、強い思いが胸を突く。我知らず、縋ってくる腕とは比べほどにもならない力で、抱きしめているのに。

「皆が知ってるよ。おまえのことを。街に来てまだ一年しか経っていないのに、頭が良くて、真面目で、気立てが良くて。……生まれながらずっと住んでいる俺なんかより街の人気者じゃねえか？」

彼女が求めている言葉なんて、俺にはわからない。けれど、安心して欲しくて、泣き止んで欲しくて、俺は言葉を紡ぐ。

何かの呪いまじないのように、言葉のわからぬ幼い子どもに、その都度言い聞かせるように。

「……主様っ」

泣き止もうとしてみてもなお、彼女はその呼び名を口にしている。だから、俺は、彼女に囁いた。彼女の泣き顔は、もう見たくなくなかったから。

「俺がおまえの言う主様になれば……おまえは俺のそばに……ラエルでいてくれるのか？」

「っ！」

しゃくりを上げかけた少女の声が、止まる。見上げてくる涙に溢れる目を、俺は見つめ返した。

「おまえが俺をそう呼びたいのなら、勝手に呼べばいい。けれど、絶対に忘れるなよ。俺の名は、ロアーツ＝リーグル。……いや、ただのロアーツなんだよ。ラエル」

やがて、いつの間にか泣き止んでいたはずの声が「ありがとう」と呟いた。それから、ちよっとだけ間が空いて、「ごめんなさい」と、小さく囁いてきた。そんな、たどたどしくてつつかえたような、湿りっ気交じりのその言葉たち。

俺は、それ以上の文句はもう言わなかった。言おうとする気にもなれなかった。

何かに不安がり、怯え、涙した少女のことを、俺は純粹に知りたかと思つた。何故なのかと、疑問にも思つた。話してはくれないのかと、期待して思うこともあつた。そう、決して、『記憶を失つた』とは言わないでいる、彼女に対して。

でも、無理強いはしなくなかった。だから、彼女が話してくれるまで待とうと思つて……、何も言えないまま、共に過ごした日々が増えていくばかりだった。

「 主様！」

他の誰でもない俺を呼ぶラエルの声に、俺は頷きはしないし、否定もしない。

いつもと同じ台詞を繰り返す彼女に、俺は笑う。苦々しい気持ちが、少しでも顔に出ないようにと、心の中に押し込めて。

「あんなあ、ラエル。 だから、俺は、ロアーツだって……そう言ってるだろう？」

望む答えが返るはず無いとわかっていても、俺はそう言わずにはいられなかった。

たった一年だけの間、ラエルは俺の名を呼んでくれた。思い返せば、どれほどの短い間であつただろう。どれほど、その頃に戻れたらと思つているのだろう。

あの頃のように、いつかまた、ラエルが俺の名を呼んでくれる。そんな日々が戻ることを、俺は信じていた。

「少年ロアーツと、主と呼ぶ少女」4（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ひとまず、「主と呼ぶ少女」一区切りです。

初めて物語を書きたいと思った時に思い浮かんだのが、二人の人物と、その人物が発した『主様』という言葉でした。

そのときから、紆余屈折しましたが、なんとか形としていきたいです。  
8・18

## 「街の朝市、迷子の少女」

朝市が催されている街の広場の片隅で、俺は駆けていた足を止める。いつの間にか、搜索を開始した出発点に戻ってきてしまっていた。

それなりの時間駆け回っていたからか、息が上がっている。呼吸を整えようとする合間にも、俺は周囲に気を配ることを止めなかった。

目まぐるしく移り変わる視界の中、俺は見知った人影を見つけることは出来ず、刻一刻と時が過ぎるばかりだった。

いつの間にか、呼吸の乱れとは違うやるせないため息を吐いていた。

(やっぱり、どこを探しても、見当たらない……)

脳裏に浮かぶのは特徴的な頭巾を身につけている一人の少女の姿だった。

思い浮かべようとしてすぐさま暢気そうに微笑んでいる彼女を思い出せてしまうあたり、きつと、今現在どこにいても知れない真正銘の本物の彼女自身だって、俺がこんなにも必死になっているの知らないのだろうなと、ぼんやりと思った。

そう思うと、無性に腹が立ってしまった。

(朝っぱらから人を叩き起こしておいて、一体何処行っただんだアイツは！)

ただいま目下搜索中の探し人である少女 朝一の催しの相棒であつた連れの少女は、今、俺のそばにはいない。

元旅人の少女 名をラエルと言う少女は、品行方正、成績優秀、

才色兼備などなど、良いイメージの四字熟語にぴったりな人物である。……あくまで、見た目と学舎ガッコウの成績等々では。

その少女の玉タマニキスに瑕なところが、ほんのり慇懃無礼なところと、多大なる方向音痴が原因の迷子騒動だった。

月に4回、週に1回。定められた日定められた時刻に行われている通例どおりの朝の市の場でさえ、例によつて例のごとく、ラエルは姿を消していた。今回もまた、その『持病』が発動してしまったに違いなかった。

目を離れたのは一瞬だつて言うのに、何故こんなにも見事に逸れてしまったのか。街に住み始めた頃ならばともかく、彼女がこの街に住み始めてから一年は経っているのに、未だに迷子になっているなんて……。

『……わたし一人きりじゃ、どうしても無理なんです。だから、お願いしたいのです』

ラエルは、早朝も早朝、まだ日が昇るか昇らないかの時分に俺の部屋に現れた。そして、俺に表向きの理由として、彼女が買い込んだ荷物を快適に持ち運んでくれる『ただの荷物持ちの役目』を頼もうとしてきた。

とはいえ、その言葉に含まれている実質的な役目はといえば、『前科』が多すぎる彼女の一人外出自体俺の両親たちに許可されないだろうことを彼女なりに予測していたらしく、彼女はこの俺を体のいい『お目付け役代わり』に据えようと企くわだてていたのだ。

だけど、それでも彼女は、俺のそばから忽然と消えてしまった。

(ただ単に逸れただけなのか？ それなら、せめて、わかりやすい場所にもいてくれたなら……)

何しろ、「街の人口ってこんなに人がいたのだろうか？」と思ってしまうほどに、目の前には人が溢れかえっている。

季節の節目の度に催される夜市ならばともかく、ごく一般的な日用品とかを扱う朝市なんか、俺には興味なんてこれっぽっちも無かった。七日に一度行われているだし、月に一回行けばいいほうだろうと俺は思う。そもそも、目新しいものがあるうがなかるうが、所詮日用品ばかり、俺自身個人的に必要なものなんて無い。だから、学舎もない休日に早起きする理由なんて俺には無かったのに。

(いや、そもそも、広場中見回しても見当たらなかったんだ。やっぱり、性質タチの悪い迷子癖があると思って間違いないよな……)

彼女に言われたから、仕方なく了承した。気が進まなかったけれど、こうして朝市にも出向いているし、彼女が買い求めた商品である荷物の数々も大事に抱えている。

なのに、ラエルは、俺のそばにいない。

頭巾をしていると言う時点で街中では少数派に入るだろう奇特な格好をしている彼女の姿が、懸命に探し回っている俺の視界にチラとでも入ってこないなんて……。

(ラエル。一人で、大丈夫だろうか)

きっと、人ごみに紛れて、ただ逸れてしまっただけ。

頭ではそう理解していても、俺は不安に駆られて仕方なかった。

「主様……っ」

陽が傾き始めるだろう頃合になってから、ようやく、ラエルが姿を見せた。

俺が必死になって探していたというのに、現れた彼女は気まずそうに小さく微笑んだかと思うと、すぐさまその視線を彷徨させた。まるで、俺の目から逃げるように。

「何処行つてたんだよ？」

見つかった安堵も、すぐさま何処かへと消えてしまった。

代わりに俺の感情を支配するのは苛立ちのみで、怒声を上げないようにと、自分自身で気を付けなければいけないほど苛立ってしまった。

「えっと……その、ちよっと？」

少しだけ俺を見たラエルはそれだけを言つと、すぐさま俺から視線を逸らしてきた。俺の問いかけから逃げたというよりは、頭巾から零れ落ちてしまった珍しい髪色の一房を、左側の耳に引っ掛けようと躍起になっているようだった。

そうやって動く拍子に、彼女が身につけている左腕の腕飾りがきらきらと光り輝いたように俺には見えた。

「『ちよっと』って？ ……一体何なんだよ？」

殊更ゆっくりと声を低めて言つた俺に、ラエルは何も言わなかった。乱れた頭巾と髪を直してしまった途端、顔を俯かせたままでいる。そんな彼女の態度は、散々探し回る羽目になった俺には少々納得の出来ないものだった。

ラエルの姿が見当たらないとわかってから、正確に数えてはいなかったが朝市の広場を三周くらいはしただろうし、道行く人に何度も声を掛けた。広場は勿論のこと、街中を巡回警備していただろう自警団の男たちにもそれぞれ尋ねていたし、終いには、気が進まな

い思いをしてまで、邸にも一度帰っていたほどだったのだから。

『そこまでやっておいて見つからない？ ロア坊、お前、案外人を探るのが下手だなあ？』

と、大人たちに笑われてしまったのは秘密である。

だから『ちよっと』などと一言で済まそうとするラエルのことを到底許しきれなかったのだ。

「まあた、だんまりかよ？ 俺が虱潰しみいしに探したって言うのに、おまえはいなかったし、姿すら垣間見えなかった。……かくれんぼでもしてたつもりだったのか？ 俺が必死になっているの見て、楽しんでたんじゃねえだろうなあ？」

ついつい恨み言を言いたくなった俺の声は自然とげとげしくなってしまうって、俺の言葉を聞いたラエルはむっと頬を膨らませてむくれてしまったようだった。

ラエルはその表情のまま、口を開いた。

「主様？ 何度も言いますが、わたし、決して道がわからなくて迷子になつたわけではないですからね！」

(……この台詞も何度聞いたことか)

両腕を曲げて拳を作って見せて彼女は意気込んでいるようだったが、よくよく見ればその眼は頼りなげに揺れているのがわかった。それは、涙に潤んではない。その誤魔化したい『嘘』を守りたくて必死なのだろうと、俺は遠慮無しに笑った。

「さあて、今日は久々に父さんと母さんがラエルに雷を落とすだろ

うな。楽しみだなあ」

「酷いです、主様……」

「だから、俺は、ロアーツだったの」

形ばかりの抗議をした俺は、手を伸ばして、頭巾を撫でた。

見上げてくる目が、驚きに見開かれる。

ふと思いついた言葉を言おうとしたけれど、俺は思い直し、それをやめた。

(『無事でよかった』なんて、大げさ過ぎるしな)

大体、それを言い出せば、何度も何度も言わなきゃいけないような気がした。こうして見つかってから思っても仕方がないことだが、もうこんなこと、二度と起こらなければいいのに。

(このどうしようもない不満も、何度味わったことだろうか)

「今度こそ、迷子になるなよ？」

「わ、わたしは、迷子になんて……！」

俺はラエルの言葉を強引に遮った。

「……」  
「そう言い張るなら、逸れるなよな。要らない心配させるなよ」

何かを言いかけていたラエルが、口を閉じた。いや、口を噤んだような、若干不服そうな顔をしている。

俺はそれに取り合わないで即座に彼女の言質を求めれば、不承不承ではあったものの、ラエルは「努力します」とだけ言った。

後味は少しだけ悪く感じたが、俺はラエルとの口喧嘩で見事勝利

することに成功したのだった。

「街の朝市、迷子の少女」(後書き)

加筆修正しました。すみません。9・10

「その偶然が齎へもたら」した祝福は」 1

「なあ、ラエルちゃん。どうしても駄目？ 俺、絶対『ロア坊』よりもお買い得だと思うけど？」

思いがけず耳にしまった『男』の声に、俺はすつと身を隠す。待ち合わせていた場所を盗み見える位置を探し出し、見つからないように気をつけながら、ラエルに言い寄ろうとしているその相手を怪しんだ。

（ 一体、誰だ、こんなこと言ってる男は！？ ）

果たしてその場所には、待ち合わせた相手である少女 ラエルが一人と、にやにやと笑う一人の男の姿があった。

名前こそ知らないが、武芸たぐいの類の授業で見かけたことがある男だった。俺のことを一方的に知っているからこそ、『ロア坊』などと言っているのだろうと、俺は思った。

学舎の中でも、生徒や先生の中に邸宅の名を名乗ることが出来る人間は幾人かいて、その中でも俺は劣っている方に分類されている…… 自称しているところもあるので仕方ないのだが。まあ、そういった理由もあるからなのか、学舎の中の一部の人間からは、『邸宅御三家のくせに』とか、『七光を使っているに違いない』と謎の言いがかり等を付けられて、『坊ちゃん』とバカにされることも常々だった。そんなことあるわけが無いのに。

と、いうわけで、授業が同じはずの俺ですらその男のことを知らないのだから、同じ授業を受けてすらいらないラエルだって、絶対に知らないはずだった。極度の人見知り体質であるラエルのことだから、俺の見ている場所からではその後姿しか見えないけれども、困惑しているだろう様子は手に取るようにわかった。

「なあ、俺と付き合ってよ」

ある種の決まり文句が男から放たれて、やはり、俺の予想道理の展開になった。

どこか得意そうな男の声に、すぐさま場に乱入してぶち壊してやるうかとも思ったが、ラエルが何と答えるのかも気になったので、俺はむかむかする衝動をぐっと我慢した。

「困ります。……そんなことを言われても……」

即答。……では無いが、その答えは早かった。

しかし、ラエルは迷う素振りこそ見せなかったが、キツパリと宣言したというわけではなかった。というより、始終その男の様子を伺いがちにしている、あえて明確な意思表示を避けたようだった。

（言ってしまったえばいいのに、ラエルもバカだなあ）

言われた男の顔が一瞬しかめられた後、にやりと笑うのが俺には見えた。

（気をつかったにしろ、そうでないにしろ、その『男』が付け上がる隙になるだけなのに……）

案の定、男が動いた。ラエルへと腕を伸ばし 嫌がるラエルに抱きつこうとした。

目の当たりにした光景に、俺はキレた。

（ あの野郎っ！ ）

「ラエル!!」

俺が慌てて飛び出したら、驚いたように動きを止めた二人が俺を見返してきた。そのどさくさに俺は二人に近付くと、まず男の腕を払い、次に俺の後ろの方へとラエルを追いやって、男の目から極力ラエルを隠そうとした。

見れば、俺よりも年上の男があからさまに不機嫌そうな顔をして舌打ちをした。睨みつけてこようが怖くも何とも無かった。

何故なら、ラエルは俺のそばにいる。逃げようともせず、拒もうともしない。

男の悔し顔を見るに、知らず口元が緩んでしまう。

「大丈夫か？」

男と対峙したまま、首だけを巡らせてラエルを見た。俺に対し、一つ頷いて見せたラエルだったが、そっと身を寄せてきた。

背に触れられてから気付く僅かな身の震えに、俺は興味本位で現場を盗み見ていたことを後悔した。

(ごめんな、ラエル……)

けれど、俺だって男だ。役得過ぎる場面を逃しはしない。ラエルがしおらしい様子でいることに俺は付け込むことにした。

彼女を『慰めるため』にと、大層な大義名分を思い浮かべながら腕を伸ばし、その身を包んでみる。あくまで、そっと、やんわりとである。そのとき、俺は片腕だけで事足りる事実にびっくりしてしまった。思っていたよりもラエルは小柄だったのだ。この間の名前呼び云々に関しての誓いのときにも、俺はどさくさ紛れに彼女を抱きしめていたが、そのときはもつと他のことに気を取られていたのだ。

ふと振り返ったとき、ラエルに言い寄っていた男の姿が消えていたことに気付く。

（ ははっ、ざまあみろ ）

満足感たっぷりの俺はラエルの様子が落ち着くのを待ってから、改めてあの男の話をすることにした。

「大丈夫だったか？ ラエル」

「 はい。取り乱してしまって、すみません。ありがとうございます、まず、ロア様」

俺はそのラエルの言葉を聴いて、ただただ驚いてしまった。

そして、たった今、ラエルの言った言葉の意味するところに驚愕した。

（ 今、ラエルは『ロア』って言った！ ）

思わずラエルを見ると、言ってしまったラエル当人も「あっ！」という顔をしていた。当然、俺も、開いてしまった口が塞がらないでいる。

（今のこれは……！ 何たる、偶然で……っ！）

「っあ、あの！ ま、間違えました。しゅ、主様？しゅさま あの、ありがとうございます」

慌てたように訂正し、改めて俺を主と呼ぶラエルを目にしても、俺はムカついたり腹が立たなかった。

目が覚めるような思いで、俺はラエルを見つめることしか出来なか

ったのだ。

（今のはラエルが本調子じゃなかったから、つい口に出た言葉のようだった。……ということは、つまり、ラエルにとつての認識の俺は『ロア』なんだ。『主』なんかじゃないんだ！）

何のために主などと世迷言を言っているのかは未だにさっぱりわけがわからなかったが、俺はそれ以上の安堵の気持ちで一杯だった。俺の望む『いつかの日』が、そう遠くない未来にあることを、目に見えて実感できたからこそだった。

有頂天になると同時に、思いがけない拍子に滅多なことを発言させてしまった彼女にほんの少しだけ、申し訳なさも感じてしまった。怖がらせてしまうような事態にまで放っておいたこと、先ほどの偶然の賜物とかの感謝の気持ちをない交ぜのままに、俺はラエルに謝った。

「怖い思いをさせて、ごめんな」

謝罪する俺の色々な理由も知らないだろうラエルは、一つ頭を振るだけだった。

「いいえ。謝らないで下さい。……主様は、わたしを助けてくれましたもの」

先ほどの男のこと、この俺のことをついあだ名で呼んでしまったこと。

未だ本調子でなく混乱しているだろうラエルが、無理やりに、気丈に振舞おうとしている。

（そんな風に振舞わなくてもいいのに）

俺がそう言おうとしたとき、ラエルが俺を「主様」と呼んだ。

「この感謝に、わたしからの『祝福』を受けて下さいますか？」

「えっ!？」

言葉だけを聞けば嬉しいはずの申し出に、俺は思わず否定的な声を上げてしまっていた。

「……ラエル。まさかとは思いが……、『ここ』でなのか？」

俺たちのいる場所は、学舎内部昇降口付近のとある廊下の片隅だった。最終授業がお互いの共通した授業科目ではなかったため、分かれて帰宅することを避けた俺が「この場所にいて欲しい」と、ラエルに待ち合わせを約束していたのだ。

俺の言葉に、ラエルが「まさか」と呟いて、笑った。

「勿論、帰宅してからのお話ですよ？ ……わたしだって、恥ずかしいですもの」

「ははっ。ま、まあ、そうだよな……」

ラエルが、俺に『祝福』をしてくれる。

その事実には、俺は舞い上がってしまった。ラエルとの話の受け答えもそこそこに、若干上の空のまま帰路に着いた。

鼻の下が伸びていなければいいと、願いつつ。

「その偶然が齎へもたらした祝福は」 2

逸る胸の鼓動が増していくかのようである。密かに手に汗握りつつ、俺はリーグルの家の門を潜った。

俺を待っていたのは、頭巾を被る少女 ではない。彼女は隣にいて、その待ち構えていた人物を驚いて見ている。俺とラエルの前に現れたのは、俺の気性に良く似た持ち主である親愛なる母の姿だった。

母は俺のそばにいるラエルの姿を確認してから、にっこりとした笑顔を俺に向けた。

「ロア、聞いたわよ？ あなた、ラエルちゃんに張り付いていた『虫』を退治したそうね？」

にこにここと機嫌よさそうに笑っているその姿に、つい俺は流されてしまいそうになった。

（ 待てよ？ 『たった今』学舎の片隅で起こった出来事を、何故、この母が知っているんだ？）

「……………たく、誰だよ、こんな人にそんなこと漏らしたバカは……………」

ぼそりと呟いた俺の言葉は途中で遮られた。

「 仕事の都合で、学舎近くに用事があったんだが……………そうしたら、皆が皆、ラエルのことを話していてね？ おまえの悪友連中はわたしも知っているし、興味本位に聞いてみたんだが、皆が皆ここぞばかりに素晴らしい情報をくれたんだよ。そう、確か……………その『玉碎男』とは違う『別の男』がラエルと抱き合っていたとかなん

だとか……？」

恐る恐る後ろへと振り返ったら、いつの間にか父が立っていた。父は、幾分暗い声で喋っていたかと思いきや、なんともいえない壮絶な笑顔を浮かべて、俺を見据えている。背に冷や汗が流れたような気がした。

「だ、誰だろうな、その『男』ってヤツ……」

(ラエルに言い寄っていた男は、俺より年上だった。……多分、男と称してもいい年齢だったかもしれない。恐らく、成人手前の十六くらいだろう)

( けれど、俺は、まだ十二。残念ながらまだ餓鬼<sup>がき</sup>だ。だから、俺には、睨まれる理由なんて無いはずなのになあ……？ )

素知らぬ顔を浮かべようとしたが、俺は、父や母やラエルほど、嘘や演戲や張ったりとかは上手くない。そんな俺の誤魔化しに通じないだろう父にとっては、娘同然に思っているだろうラエルの身の回りにいる俺だってそこら辺にいる悪い虫と同じなんだろう。

しかも俺はそれを否定できないばかりか、見破られているという気まずい思いがある以上、父の眼を見ることは勿論誰の眼を見ることも出来ず、明後日のほうを見やるしかなかった。

「レフェルス様」

俺にとっての気まずい沈黙が漂っている中で、ラエルが父の名を呼んだ。

「わたしの名誉のために、それ以上は、どうか」

そう言ったラエルが、俺のそばから飛び出して行って、父の方へと行ってしまった。父の腕を手にとったラエルは、まるで腕を組むかのように引っ付いて、父を見上げて甘い声で畳み掛けた。

「ね、レフェルス様？」

俺の中の、ほんの一部分しかない冷静な自分が、「やるなあ」と呟いた。

「まったく。当事者であるだろう君自身がそう言うのなら、わたしは強く出てはいけないのだろうか……？」

ラエルを見下ろす父が、至極不満そうな声で言う。ラエルのお願いに、不承不承手を引くと決めたようだった。

「だが、わたしは君の保護者。父とも思ってくれて良いのだよ？ 困った事態になったら、すぐさま、わたしに言うように。君を守るためなら、わたしはなんだってしてみせるからね？」

娘を甘やかそうとする『父代わり』の『父』が優しくラエルの頭巾を撫でつつも、ぎろりと俺を見据えている。

「どつやら、敵は身近にあり……のようね？」

いつの間にかそばにいた母が、愉快そうな声で言った。ぽんと俺の肩を叩く母に、俺は苦笑いを浮かべるしかない。

すると、母は先ほどとは違う表情をして、くすりと笑った。

「ふふ。わたしは評価してあげますからね、ロア？」

言った母が、俺の頭を撫でてきた。そして、俺の短くしている前髪の付け根辺りに、柔らかな感触がした。久方ぶりに受けた、母からの祝福だった。

流石の俺も十二歳である。抵抗するのも忍びなくてそれを受けたものの、気恥ずかしくて仕方がなかった。気のせいなのかもしれないが、どこか優しげに見つめてくる母の眼をまともに見ることが出来なくて、すぐさま逃げるように視線を逸らすと、「頑張りなさいよ?」と囁いてきた。

何を、と、母は言わなかった。

俺も、聞き返したりはしなかった。

夕食後、俺の部屋を訪ねてきたラエルは、先ほどからにこにここと笑っているばかりだった。対する俺はというと、帰宅してからずっと父の監視するかのような視線にうんざりしていて、疲れ果ててしまっていた。

「びつくりしましたね? 皆さんが知っているなんて……」

「……おまえはそうでもないようだったけど?」

知られていたという事実には驚くばかりだった俺に対し、臨機応変に父を取り成せてしまうラエルの実力はすごいというよりも、未恐ろしいといえるだろう。

ラエルの年齢だって、きっと俺とそんなに変わらないだろうに。真相は彼女のみが知っているんだろうが。

「ふふ」

にこりと笑ったラエルが「さて」と立ち上がる。俺と向かい合う

ように座っていたカウチから、俺の座っていた側のカウチへと移ってきた。

ちなみに、先ほどラエルが座っていた方が二人掛け用で、俺側の方が三人掛けである。隣り合っただけでもその間にちよつとした空間はあるのだと、俺は誰とも言えない人に向かつて心の中でそう主張した。父にたいして言い張ったところでいい顔はしないだろう些細なことだったけれど。

そのちよつとした空間をあわや埋めてしまうかのように、ラエルが座っていた場所から身を乗り出すかのようにして俺に囁いた。

「祝福のこと、お忘れで無いですよね？」

心臓が飛び跳ねたかと、俺は思った。

「まさか」

即答するものの、はつきり言って俺は忘れていた。それもこれも予想外の行動を取り捲る父と母のせいだった。

ラエルの言葉を聞いた瞬間に変則的な乱れが起きていて、俺には逸る胸をどうすることも出来ない。

(落ち着けよ、俺！ さつきも素知らぬ顔で母から受けたじゃないか！ あれと一緒に、あれと一緒に……)

念仏のように唱えても、効果はまるで無い。

俺の葛藤も知らない少女が、笑う。

「目を閉じて？」

言われるまま素直に目を閉じたものの、俺はたまたまらずにくくりと

生唾を飲んだ。

祝福とは、要するに、自分から他者への感謝とか愛情とか、そういった気持ちをこめて行う親愛の接吻キスだった。一般的には、親から子へ、その逆も然りであり、他にも友と友が、師と生徒が、恋人同士とかが、それぞれの相手に贈るものだという。

（ 眼なんか閉じたら、余計ヤバイ。何処に気を張っていたらいいかわかんなくなるって！ ああ、もう！ 落ち着け、俺、落ち着け…… ）

やがて、ラエルが動く気配がした。目を閉じていてわからないものの、ラエルの手が俺の肩へと置かれたようだった。その動いた拍子に揺れただるう腕飾りの摩擦音が僅かに聞こえた。

瞬間、ふわりと漂う何かの匂い。何だろうと思っていたら、頬に触れた何かの感触があった。思わず目を見開いてそちらを向いたら、まともにラエルと目が合ってしまった。

ラエルの眼は元から円らで愛らしい眼をしているが、それが、更にまん丸になる。

「 やだ。そんな風に見ないで下さい 」

呟いて、ラエルが真っ赤になった。慌てたように俺から身を離し、カウチにどさりと座って、その勢いそのまま沈み込むように全身を預けたようだった。

そんな様子のラエルを見てしまった俺は、母のとき以上に気恥ずかしい思いになっているのに、何故かラエルから目を逸らそうとは思わなかった。

もつと、そんな姿が見たい。

我知らず手を伸ばし、ラエルの腕を掴む。いつの間にか身体も動

いていて、今度は俺がラエルに身を乗り出していた。

「……なあ、ラエル」

声が掠れてしまったような気がして、もう一度唾を飲んだ。見上げてくるラエルの眼を、俺は見据えた。

「今度は、別の場所にしてくれよ？」

「別の場所、ですか？」

不思議そうに問いかけるラエルに、俺は言った。『いいこと』を思いついてしまった。

「たとえば、の話しだけだよ？」

呟いてから俺が笑ったそのとき、ラエルがふとあらぬ方へと視線を逸らす。次いで、俺が捕らえた腕に反対側の手を近づけたようだったから、俺の手から取り戻そうとしたのかと思っただが、その手はただ単に腕の飾りに触れただけのようだった。

身を引こうとするラエルの行動を、俺は許さなかった。その動きを利用して、掴んでいる彼女の腕を折りたためるほどに近付いた俺は、ラエルとの距離をぐつと詰めた。

ラエルは、驚いたように声を上げた。

「あ、あの、ロア……じゃない。しゅ、主様？」

その、切羽詰ったかのようなラエルの発言は、ラエル自身の心境を十二分に表していると言えただろう。

つまるところ、混乱。夕刻のときと同様、また俺のあだ名を呼んでしまっている。

思わず、俺はふと微笑んでしまっていた。

(……主様、か)

ラエルが俺のことを『主』としか考えていなかったなら、この状況自体ですら、俺を『主』として考える彼女にとって『逃げられない場面』だったんだろう。

だけど、今の俺はそうは思わなかった。偶然にも知り得ていた学舎での出来事が、俺自身への力となっていた。

俺は、空いていた方の手でラエルの頭巾を無理やり後ろにずらし、現れた額にそつと祝福を返した。

捕らえていた腕を解放してやると、慌てたように頭巾を直しているラエルの表情が、みるみるうちにまた真っ赤になっていった。

それは、怒っているためなのか、俺からの祝福に戸惑っているためなのか、一見しただけでは判別は出来なかった。

「しゅ、主様つてば……っ！」

ラエルの上げた声は、羞恥によるもののように聞こえたが、それでもどちらなのかわからなかった。

「そんなに驚くことか？」

「だ、だって……。しゅ、主様がわたしに、なんて」

「たまには、いいだろ？」

俺がラエルに祝福を返したのは、今このときが初めてだった。

「でも……何故ですか？」

「それは……その……おまえにはいつも迷惑かけてばかりだしな」

咄嗟に、何とか言葉をひねり出して答えると、ラエルは「ふうん」と呟いて、深くは追求してこなかった。

俺は内心でホッと息を吐いた。

(さっきの……ラエルが可愛かったからしたくなつたなんて、言えないっての)

(しかも、俺は、本当は……)

俺の思惑など何も知らないで笑うラエルの姿を横目でちらりと盗み見て、俺は何とも言えないため息を吐いた。

( 本当は、その唇に……なんて、絶対に言えないよな )

## 「頭巾の秘密」 1

元旅人の少女であるラエルが、俺と出会ってから、ようやく一年が過ぎようとしている現在イマ、学舎に通っている月日自体そう長くは無いのに、学舎にいる見知らぬ男から告白されることは、実は多々ある。

それは彼女の街入門の際に、俺が我がままを通した『リーグル』の名とともに街の住人たちの格好の嗜好の嗜好になっちゃったことも理由だったけれど、一番の理由は、彼女の容貌にあった。

現れた当初、少女は街に住む者たちとは明らかに違う出で立ちでいた。

寒いか温かいかのどちらかで言えば温かいほうの部類に入るイライブ地方エルズの街には、長い外套姿はまだしも、地に引き摺るほどの長い身の丈の着物は滅多にお目にかかるものではない。着物を羽織り、小さな体には十分すぎるほど長い外套をはためかせ、頭巾を身につけていた少女は、街に住む誰もがどう見ても自分たちとは違う異邦人と言えただろう。

街に住むようになって、長い着物を羽織ることを止めたラエルは、頭巾を身につけることは止めなかった。外出する時は勿論邸の中にいる間ですらきちんと頭巾を身につけていて、自身の髪を一切人目にさらさないように生活をしている。

だからなんだと言われたらそれまでなのだが、やっぱり、平和で穏やかで退屈で詰まらない生活を送っている者たちの目から見れば、突然に現れた少女が謎めいているというだけで魅力的に見えるのかもしれなかった。

そして、ぶつちやけて言えば、彼女は可愛いのだ。目も大きく、円らで、睫も長い。鼻も高すぎず低すぎず形もいい。薄桃色の唇が弧を描くかのようににっこりと微笑んでくれれば、それだけで嬉しくなってしまうほど、どこからどう見ても可愛いのである。……誰

しも、男なら、それで十分だと思う。

(学舎に通っているって言う時点で餓鬼<sup>ガキ</sup>だしな)

俺はふとため息を吐いて、俺を取り囲んでいる悪友連中を見やる。「重大任務を与えるから参加しろ」と言われ、暇だったので話を聞いてみたものの、途中から聞く気も失ってしまったので俺はぼうっとしていた。

いつもならこのタイミングで『早くラエルが来ないかな』と思うのだが、今このときばかりは『変なタイミングで出てくるなよ』と、祈ることしか出来なかった。

「だから、おまえも気にならないわけ？ 彼女の頭巾の中身」

「ラエルちゃんのことだから、おまえが頼めば絶対見せてくれるって」

「な？ いいだろ？」

畳み掛けるように告げられてから、俺がこれ見よがしにため息を吐くと、何を勘違いしたのか悪友連中から歓声が上がった。

「お!？」

「やった!」

「協力してくれるのか! さっすがロア坊!」

「誰が、ロア坊だ、誰が」

苛々と答えたが、相手方がそんなことで勢いを落とすはずも無い。

「なんだよ、独り占めする気かよ? そうはさせねえぞ!」

「大体おまえずるいんだよ。リーグル邸生まれなのはともかく、あのラエルちゃんと一つ屋根の下に住んでるとか!」

「……おまえたちが想像してることなんて、たかが知れてるよな」

思わず、友人たちには聞こえない声音でぼそりと呟いてしまった。俺とラエルは同じ家に住んで生活を共にしているが、それが『一つ屋根の下』なのだと言つても、彼女との接触なんて、食事時の前後だけ。だから、どうサバをよんだとしても数時間程度しか無かつたりする。……学舎でしか会うことが出来ないのなら、その数時間があるかないかでは貴重かもしれないが。

大体、俺の家はリーゲルの『邸』なのだ。俺はリーゲルの家は他の邸宅二つに比べて名ばかりのものだと思つているから、家柄とかそういう問題では無いが、ともかく『邸』の名を名乗るに相応しい馬鹿でかい家なのである。それぞれの生活空間を広く保てるのだから、たとえば、風呂上りの彼女に出くわすなんてこと、そういうことが起こることを期待するのが間違つているのである。

「俺は協力しないからな」

諦めの悪い友人たちをどうにかなだめすかし、いなして、帰らせることに成功すると、俺は直ぐ近くの講義室のドアを開く。

そこには、ひっそりと何かの本を読み進めている少女が一人。彼女の手をしている本はたった今読み始めたというわけではないように、見開かれている頁を見るに、読み進み具合は中ほどといったところだろうか。それなりに待たせてしまつていたようだった。

けれど、この場所にいたのなら、その話の内容はともかく、俺と俺の悪友たちが喋つていたことを知っていただろう。なのに彼女は、一人本を読むことを選び、ひっそりと気配を隠すようにして本を読み進めていた。

それが意味することなんて、一つしかない。

(彼女自身は、まだ、周りの奴等には慣れていないんだよな……)

今でこそ、俺に対して『主様』などと変な呼び名で俺のことを呼ぶようになってしまったラエルだったけれど、こんなふうに俺以外の第三者、学舎で顔を合わせたことのある学友たちに対する対応を見てしまえば、遙かにマシなのだと思います。

無口で、無表情で、無関心。ラエルは、決して自分自身からはこれっぽっちも他人に接しようとしないのである。

そんなことでは、色々と成り立たない。それがわからないはずもないだろうに、彼女は決して態度を改めようとせず、何でもかんでも俺を間に立てて、事を成そうとする。だから、決して俺から離れようとしないので。

正直、面倒臭さは半端ではない。けれど、彼女が馴染めないでいるのは可哀想だったし、馴染めないだろう理由も恐らく元旅人であることが関係していそうだっただけに、放っておくことなんてできなかった。何より、彼女が頼ってくれるのはすごく誇らしかった。

それに、ラエルから目を離してしまうと、すぐに迷子になる。彼女に近付きたいと野心を持つ男たちが押し寄せてくるわ、連れ出して告白しようとする野郎だっているし、後々俺が処理しなければいけない面倒ごとが押し寄せてきてしまうのである。それを未然に防ごうと思ったら、何かとそばにいたほうが都合よかった。

そして、言葉遊びの延長線上とはいえ『主様』と呼ばれ始めた以上、守ってやらねばならないと俺は思うのだ。何と云うか、強迫観念にも似た思いが在る気がする。

決して、俺の近くにいなければ落ち着かないからだとか、他の奴らと話しているのが嫌だからだとか、そういう理由ではない。

「ごめんな、待たせて」

「いいえ。遅れたのはわたしのほうが先ですから。……この間はこの間で、ご迷惑をおかけしてしまいましたし……」

ひとまず申し訳なさそうに謝ってみた俺だったが、ラエルの言った哀れな先輩学生のことを思い出して、俺はつい笑ってしまった。ラエルが本を閉じて立ち上がった。見るともなしにちらりとその本を見たが、少し見ただけではそれが何の本なのかはわからなかった。

「それ、何？」

「ええと……薬学書らしいですよ？」

「ぱらぱらと頁をめぐって、ラエルが笑う。

俺は少し不思議に思った。

「わざわざ学舎で借りたのか？ 薬学系の本なら家にいっぱいあるんじゃないのか？ 母さんの部屋とかに」

リーグルの家の祖は、植物学者だった。なんでも、国の都の秀才たちを差し置いて、当時未知の病であった病気を治す薬を発明したとかで、その功績に様々な恩恵とともにあの邸を与えられたらしい。以後、国を悲劇に襲うような流行病は発現していないが、エルズの街は今でも植物学者を拝命したものに『ある特定の条件』を与えて、リーグルの邸を守らせるのだと言う。

現代にも残されている、貴重な植物たち。それを維持することこそが、リーグルの家を継ぐべきものに課せられる条件の一つだった。

世襲制ではなく、『当主』の存在の意義すら問われないのはそれが理由だった。維持ではなく世話だけならば、少し知識を持っているものならば、出来ないことは無いという考えかららしい。それでも、扱いに難しい植物を失ってしまいかねないが、結局のところリーグルの家のそれが失われるだけであって、国の都の然るべき機関には十分にあるはずだった。だから、それほど重要視されていないというべきか、俺の母も十数年前に拝命する前は、邸宅リーグルの

当主自体は二十年以上不在状態だったらしい。

まあそんなわけで、俺の家には薬学の本がそれなりにはある。勿論、薬草を主に使用する本に限定されるのだが。

「ルレッツ様にはもう見せて頂きましたから、無理を言ってケインにお願いしたんです」

「ケインって……つまり、シュバルツの家にか？」

「『知識の宝庫』と名高いあそこならと思い、いくつか面白い本を選んでもらったんです」

シュバルツの家はリーゲルと同じ邸宅の名を持つ家の一つであるが、学者とか政治家とかを輩出している家としてリーゲルの家とは比べ物にならないほど超有名なのである。

その家の子であるケインは、シュバルツは、俺の友人の一人であり、邸宅シュバルツの名に相応しく、大変頭が良く学術試験ではいつも首位を独占している。多分、俺なんかとは頭の使い方が違うのだと思う。

ちなみに、残り一つの邸宅ヴァレンタインは、武芸に秀でていて、街の自警団の総締めは勿論、都に上り国に仕える名高い騎士を世に送り出している。こちらも、シュバルツ家以上に超々有名である。ヴァレンタインの血を引くもの、その教えを受けるものも同様に人々に高く評価され、尊敬されるのだ。

そして、シュバルツ並びにヴァレンタインの邸宅は、古くは国の都の貴族の血が入っていると云うのだから、すごい。名ばかりのリーゲルとはワケが違うのである。

「なるほどね。で、収穫は？」

「上々。……と、言いたいところですが」

そう言ったラエルが、続きに何かを言いかけたようだったのに、

結局言葉を濁して黙ってしまった。

「ま、いいけどよ」

俺は既に俺なりに納得していたので、深くは追求するつもりはなかった。

「何調べてるのか知らないけど、俺にでも扱えそうな簡単なことから是非教えてくれよ?」

「はい、勿論ですよ。主様」

お決まりの決まり文句を聞いた俺は、苦笑しつつ、ラエルと共に帰宅した。

ラエルの言いよどんだ言葉の続きを知ったのは、その翌日の夜のことだった。

「頭巾の秘密」1（後書き）

加筆修正しました。すみません。9・06

再び加筆修正しました。すみません。9・10

## 「頭巾の秘密」 2

呼び出されるままに、母の部屋の戸を開けた瞬間、俺は信じられないものを見た。

「な　っ！」

驚きに声を漏らすものの、その後が続かずに絶句してしまったのだって、俺が想像することも出来なかった事態に出くわしてしまったからに他ならない。

母の部屋にいたのはラエルだった。そして、湯を浴びたばかりなのか、薄着姿だった。いつも身につけている頭巾の代わりであるかのように、タオルを一枚手に抱えていて、頭を覆うようにごしごしと水分を拭っている。街に住んでいる女性たちに比べれば短すぎる髪が、その手から、タオルのすそから零れ、水滴がぼたぼたと床に落ちていった。

二滴、三滴と雫が落ちていくさまを無意識に目で追ってしまったから、俺は慌てて戸を閉めた。

（今のはなんだ？）

（ラエル、だよな。だって母さんにしては小柄だし、髪が短すぎるし、色も違うし……）

この俺が見違えるはずが無い。けれど、目にした光景が衝撃的過ぎた。まともに頭が働かないでいる。

（ラエルが、どうして？）

立ち入ることも出来ず、かといって立ち去ることも出来ないまま

身動きが取れないでいると、いつの間にか不思議そうな顔をした母が俺を見ていた。

「あら、ロアーツ。早かったのね？ ラエルちゃんはもう来たの？」

俺が何を見てしまったのか知らぬ母はのほほんと俺に問う。

とりあえず、俺は頷いて見せた。

すると、母が、満足そうな表情をして微笑んだ。

「ふふふ。おまえを主と慕うラエルだもの。利用するようで悪いけれど、悪い思いはさせないわ？ わたくしに協力しなさいね」

「……利用って」

(一体何をさせる気なんだ、この母は)

俺の複雑な胸中……と言うより何処かへと行ってしまった平常心を取り戻すよりも先に、母は自らの手でその部屋の戸を勢い良く開け放つ。何しろ母の部屋なのだから、母にとっては躊躇<sup>ためら</sup>う理由などありはしないのだろう。

俺は我知らずはらはらした。多分、そんなに時間が経っていない。

「ラエルちゃん」

母は確認するかのようにな彼女に呼びかけた。

「わたくしが渡した『薬』をちゃんと使いましたね？」

「……はい」

言葉少なに答えたラエルは、先ほどのようにタオルを頭に被った状態で薄着でいた。威力は減っているとは思うものの、ちよつと俺

が見ていてもいい姿なのかどうか、俺には判断がつかない。

ラエルに気付かれたのかどうかはわからなかったが、先ほど垣間見てしまっている以上、バツが悪い。役得とか思うよりも前に、母が同席している以上、これは目に毒としかいえない状況だろう。

何故母は俺を呼び、俺を利用しようとするのだろうか。

疑問に思った俺がそれを尋ねようとしたとき、母が動いた。ラエルに向けていた体ごと振り返って俺を見る。 壮絶な笑みだった。

俺は何も悪いことをしていないのに、背筋を伸ばさずにはいられなくなった。

「ロアーツ」

「な、なんだよ」

「ラエルちゃんにお願いして欲しいことがあるの。おまえから、ね」

思わずラエルを見ると、困った顔をして俺を見ていた。

「ルレッツ様、もうご容赦くださいな。わたしとて、いい加減潮時とは思っていたんです……」

「いいえ、ラエルちゃん。わたくしは騙されないわよ？ 潮時と称しつつ、あなたは最低でも三度、この地に来て染色をしているわね？」

母の言い分に、うっと、ラエルが呻いた。凶星、だったのだろうか。唇を引き結んで、顔を俯かせてしまう。

母は母で「まったくもう」と呟いて、額に手を当てて途方に暮れたようだった。

（待てよ、染色？）

置いてけぼりを食らっていた俺は、はっとしてもう一度ラエルを

見た。濡れたラエルの髪色は、今も色鮮やかに珍しい色合いをしている。

(……まさか、染める術を満足に知らないでいるのに、無理やりに染色を繰り返していたから?)

「どついうことなんだ？」

俺が呟けば、ラエルが観念したように口を開いた。

「主様。先日の本を覚えていますか」

「ケインに借りたって言うてたっけ？」

そういえば、見覚えの無い本を持っていたような気がする。

「ケイン……？ あー、あのシュバルツの子ね？」

俺の友人の一人だと説明すると、母は「そうだったの」と呟いて目を細める。俺は母にとつて快くないことに協力してしまった形の友人にひどく同情したくなった。出し抜かれたと言う面では俺も母と同感の思いなので、ざまあみろとも思ったのだが。

「街に来る前は、その辺に自生している植物を用いて何とか形にしていたのですが無理があつたのは自分でも承知していたんです。ますます人に見せられるような髪ではなくなつたから、書物と言う書物を読んで、調べていたんです。ケインさんはわたしが何を調べていたかは知らないはずですよ。ただ、わたしは彼の善意をありがたく思つて『本を貸して欲しい』とお願ひしていたから……」

言外にケインを責めないで欲しいと訴えるラエルに、俺は言った。

「ラエル。なんでおまえは髪を染めたんだ？」

「っそ、それは」

目を見開いたラエルが、やがて申し訳なさそうに顔を俯かせた。

「ごめんなさい」

ラエルは、答えることを拒否したらしかった。

無理強いをするつもりは無かった俺はため息をついた。同時に母もため息を吐いたようだった。

呼吸を合わせたわけでもないのに重なったその行動に、俺は内心笑ってしまった。

俺と母はお互いの顔を見て同意の色を確認して、俺は再びラエルを見やる。

「頭巾を身につけるんなら、人目にも触れないだろ？ もう染めるのは止めたらどうだ？」

ラエルはただただ頷いた。

もとより俺の提案に見せた要求を否と言わせるつもりは無かった。こっちはあえて聞かないでいるんだから、それくらいの我侭だっていいだろう。

「あなたの髪が短いのも、染色をする上で楽だったからでしょう？ 女の子なんだから、そろそろ髪を伸ばしてみてはどうかしら？」

ラエルの従順な姿に何を思ったのか、母が言った。

その瞬間、俺の脳裏に浮かんだのは、満面の笑みで笑うラエルが恥ずかしそうに長い髪を風になびかせている姿だった。

目にしたことなんて無い想像と言つよりも妄想と言つに相応しい行為なのに、俺にとつてその光景は鮮やか過ぎた。違和感が無さすぎたのだ。まるで、未来を予知夢してしまったかのように、俺は、そんな彼女の姿が自然に思い浮かべることが出来てしまったのだ。

(……見たいな)

それを現実のものにしたいと言う俺の欲求は、その瞬間に生まれたのに、計り知れないほどの大きさとなつて俺を支配する。

「ラエル」

呼べば、ラエルが浮かかないような顔をしていた気がしていたけれど、俺は構うつもりはなかった。

「俺からも、お願い。邪魔にならない程度でいいから、髪、伸ばしてるところ、見せてくれよ?」

「……わかりました」

不服そうではあつたけれどラエルは頷いてくれた。

しかし、そんなラエルの言葉を待っていたのは決して俺だけではなかった。

「さて。用件は終了ね?」

母は、用済みとばかりに俺を追い出しにかかった。

「ちよ! 母さん、ひどいじゃねえか!」

「あらあら、母は協力してくれるあなたに多大なる感謝はあるけれど、それ以上は無いの。それに、十分サービスはしてあげたでしょ

う?」

何のことを言われたかはわからなかったが、やはりこの場の同席は母なりに止むを得ないと言う考えがあったようだった。

「今から本格的に彼女に処置を施します。大人しく、あなたは待っていてください」

母はぴしゃりと行って、戸を閉めてしまった。

仕方無しに俺は、その場を離れ、部屋へと戻ることにした。

いつかの楽しみがまた増えたなど、そう思いつつ。

### 「頭巾の秘密」 3

あの夜の思いがけない出来事があってから、俺は見ることが叶わないだろうと思っていた彼女の二つの姿を目にすることができた。

一つは、風呂上り姿の彼女である。

母が言ったサービス云々の言葉から見ると、やっぱり普通なら見ることが出来ない姿だったのだと思う。今まで一年も同じ家で生活しているのに目にしたことなんて無かったのだから、父や母なりにお互いがその姿を目にしないようにどうにかしていたんだろう。…そう、よく考えてみれば、俺も、ラエルに風呂上り姿を晒した覚えはないのだ。

こんなにかい家なのに、風呂は一つしかないし、部屋に個々備えているわけでもない。そう、だからこそその配慮があつて、あの日の母の言葉に繋がっているとしか思えなかった。

（全ては承知の上で、か。あの夜の口約束は仕込まれていたってことだ。…俺ばかりか、ラエルまでもが両親たちの掌の上で転がされているなんて）

腹立たしくて仕方なかったが、乗せられてしまった以上何も言えるはずも無い。俺は、「もう一つのアレを見たじゃないか」と、自らに言い聞かせるように内心で呟いた。

それこそ、まさに、あの学友たちが邪な思いのまま策を企てていた『彼女の頭巾の中身』だったのだけれど。

（実際、濡れ髪に気を取られて、あんまり正視出来なかったんだよな）

惜しいことをしてしまったものと、我ながら思う。短すぎるよ

うに感じたことしか、今では思い出せない。

(そう、それが濡れていたせいで、頬とか頤うなじとかにぺったりと張り付いていて……)

我知らず、思考が怪しい部分に突入しようとして止めた。はつきり言ってその先は、思い描かないほうがよさ過ぎる。本当に目にしたものだけを思い浮かべようとしても、それ以外のものになってしまいそうなのだ。

(俺にある『そんな知識』なんてちっぽけで、下らなくて、大したものじゃないけど、それでもなあ……)

母に呼び出された夜から二週間がたった。今夜の俺は、なんとラエルに呼び出されている。

俺は、あの日母に言われるまま母の部屋に向かったように、今度はラエルに言われるまま彼女の部屋の前でぼうつと佇んでいた。夕餉も済ませ、風呂も浴び、少し肌寒さを感じ始めている今、俺はどうつしたものと、取り留めの無いままに思考を巡らせていたのだ。

(大方他の奴らは、そんなことまるつきり考えてないんだろうな。思うまま、願うままにってか？ 嫌だ嫌だ。男って悲しい生き物だよな、まったく……)

嫌悪したいと思うくせに、俺は、紛れもない男だった。ただ他の奴らと違ってしていることなんて、幸運にも同じ家に住んでいるだけなのだ。この間から、主様と呼ばれるような変な間柄にはなったものの、他の誰よりも近い位置にいて、ラエルのそばにすることができていても。

(それも、ただの結果だよな。一年前、彼女と出会うまでには『今なんて想像もつかなかった。彼女は、『元旅人の少女』だったんだから……])

彼女と出会ってから一年が経って、『そばにいること』が当たり前となつた今、いかにしてその『当たり前』を守り続けることが出来るのか。それが、俺の、俺にとっての難題で、頭の痛い障害と言えた。

嫌われたくないと思われ、疑問を口に出すことも出来ない臆病者。

それこそが俺の本当の姿、ロアーツ＝リーグルなのだ。

呼び名のことなんか、気にしている場合じゃないと本当はそう思うのに。

「主様？」

ラエルの、『俺』を呼ぶ声がある。

そう考えてしまっただけからは、もう、俺は俺自身を嘲ることしか出来ない。

(ほら、彼女がオマエを呼んでいるぞ。ロアーツ。オマエが黙っているせいで)

俺は、既に、彼女の主としてあろうと自分自身で認識してしまつたのだ。俺を主と呼ぶ彼女に伝えようとするあまり。彼女が俺をロアーツと呼ぼうがロアーツと呼ぼうが、一緒であるかのように。

出し抜けて主様と呼ばれても、俺は、反応できちゃうのだ。…まるで、名に縛られてしまったかのように。

唯一の救いは、彼女の呼ぼう主が、役目ではない俺自身にあるのではないかという、ぎりぎりの希望があるからかもしれない。混乱した彼女が口走った、たった二度の発言。それが俺の救いとな

っているなんて、彼女は思いもしないのだろう。

暗い思考を打ち破ろうと、俺はきつく目を閉じる。目を開けたそのときになって、彼女が俺を呼んでいたはずなのにその姿は見当たらなかったことに気付く。俺は、とうとう幻聴を聞いたのかと愕然とした。

愕然としてしまつてから、くすくすと笑う声が、俺の上の方から聞こえていることに後から思い当たった。

「お気付きですか？ わたしのいる場所」

声の聞こえるまま、上を向く。邸の二階部分にいる俺の手が届くか届かないかの高さの位置にある天井裏から、ラエルがひょっこりと顔を覗かせていた。

俺は、驚きに目を瞠った。

( どうして )

「 どうして、そんなところにいるんだ？ 」

愕然とした思いを今度は啞然とした思いに代え、俺は疑問を口走った。

ラエルが得意気に「ふふふ」と微笑んだ。

「探検いたしましたの。ずっと前に。月が一番綺麗に見える場所を見つけたくて」

「月だつて？」

「闇夜に浮かぶ、唯一の導きの光ですよ、主様？」

旅の間、ずっと、わたしを支えてくれましたから。

そう言ったラエルが、止めと言わんばかりに、その唇に人差し指を立てた。

「もちろん、レフェルス様とルレッセ様には、内緒にして下さいね？」

出会った頃に俺が教えた仕草の一つを忠実に再現したラエルは、啞然とする俺を置いて、天井裏に消えてしまった。

## 「頭巾の秘密」 4

天井裏に上がり、そこが屋根裏だと気付いてから、換気口兼明り取りのために設けられている斜めに付けられた天窓の前に座り込む彼女を見つげ出した俺は、いの一番に言いたいことがあった。

「どうやってこんな場所に上がりこんだ！」

肌寒さからは難を逃れたものの、風呂上りですつきりしていた体がすっかり埃だらけだった。

「あれ」

ラエルが不思議そうに首をかしげた。

「主様こそ、何処しよを通ってこられたんですか。泥だらけじゃないですか」

「何処しよつて、そんなの、あそこからに決まってるだろ！ オマエが覗いてた、ラエルの部屋の近くの廊下の……」

文句を言う俺を見ていたラエルが、「しまった」と言わんばかりに口に手を当てる。

「つつかえ棒がありましたでしょう？ 先が少し曲がってて引っかけやすくなっている、鉄の棒が」

「……そんなのあったか？」

「アレで、仕掛け階段を下ろしたんです。それで上がった後に隙間から棒を落としておいたんですけど……」

「何処にだよ？」

少なくとも、俺が知っている限り、ラエルの部屋の前には無かった。

「あー……わたしの部屋？」

合点がいったと言わんばかりに、ラエルが言う。俺はため息を吐いた。

どしどしと音を立てて歩み、ラエルの隣に勢い任せに座り込む。音なのか衝撃なのか、びくりと彼女が震えたのを、俺は無視した。ラエルの方を見て、じろりと睨みつける。

「おまえ、俺が無断で部屋に押し入るようなヤツだっと思ってたんだ？」

突発的な怒りが沸いて、声がそれを纏う。それが手に取るようにわかったけれど、俺は構わなかった。

心外だった、ひどく心外だった。

どさくさに紛れて、俺は、多々色々と彼女には不快な真似を働いてしまったかもしれないし、発言に気をつけるのはまだしも、俺の思考は俺のもの、何を考えようと自由だろうと思ったから、俺の頭の中に限ってはあるが、彼女は酷い目に合いかけていると言えるだろう。……それを、俺は否定しない。

けれど、俺は決してそれを匂わせるような行動も言動もとっていないのに。すべては俺の精神安静上のためとはいえ、年頃を迎えるだろう少女に対してマナー違反と思える行動は何一つしていないと誓って言えるのに。

少なくとも、臆病者でいる今の俺は、何も。何も出来やしないのだから。

「ち、違います！ そんなつもりじゃないんです！ 主様なら、つきりご存知だったんだろうと思って……」

「主様なら、って……。何で俺が知ってると思ったんだよ!？」

「だって、わたしの今使っている部屋って、元は主様の部屋だったんでしょ?？」

ラエルの言葉に、俺の暴走しかけた苛立ちは止まった。

「……そういえば、そうだな。あの部屋は元俺の部屋で、ラエルがやってきて、ラエルがあ部屋に執着を見せるから、俺が部屋を譲ったんだっけ?？」

おぼろげに思い出した記憶に、ラエルが「そうですよ」と呟いた。

「カウチで転寝うつたねしているときに気付いたんです。引っ張りやすいように穴が開いている、扉のような戸。硬くて重くて、昔は動かすのが大変だったんですよ?？」

「へえー」

あの部屋にそんなものがあるなんて知らなかった俺には想像し難いものがあったが、ラエルが何処と無く嬉しそうに喋っていたので、それに任せた。

「う、誤解は解けましたよね?？」

「多分、な。他にも聞きたいことは山ほどあるけど」

(こんな場所を一人で探し出してしまったのか?)

(何のために?)

(昔からって、どれくらい前から?)

(今日ここに俺を呼んだ理由は、一体……)

山ほどあると言っても、俺が聞ける話なんて、ラエルが素直に話してくれることだけだ。それ以外は、聞いたところで意味が無い。彼女を困らせるだけなんてこと、俺はもう十分に知っている。

「父さんや母さんにも秘密にする場所で、俺に、何を話してくれるって言うんだ？ ラエル？」

ぱちりと一瞬いて、ラエルがふと笑った。微笑むというよりも、口元だけで刻むかのような笑み。緩く描かれていた弧が、ゆっくりと割れて、唇が開いた。

「証<sup>アカシ</sup>しをお見せしたかったの」

「証し？」

「はい。わたしは、結果として、たくさんのことをあなたに偽っている。何も話そうとせず、わたしにとって都合にいいことだけを黙っているから。……だから、お話しできること、お見せできるだろうこととか、お伝えできることをお伝えしたい。わたしはそう思っているんです。すごく、身勝手ですけどね」

ラエルの眼が俺を真っ直ぐに見る。どことなく困ったような顔をして、彼女の手が、身につけている頭巾の紐へと伸びていた。何をしようとしているのかは、その瞬間、感覚でわかった。

「あ、おい　っ！」

何故止めようとしたのかはわからないが、俺は、そのとき、静止の声を上げかけていた。

けれど、遅すぎた。その手は頭巾を取り去って、別の手が、乱れた髪を一度整え直すかのように、肩先までずり落ちてきた髪を払う。

さらり、と。まるで、そんな音がしたかのように、俺の目の前で、その髪が、手の動きに逆らわずに靡いた。<sup>なび</sup>

「本当は、大した理由じゃなかったんです」

靡いた髪が、すんと元に戻る。髪は肩先までの真っ直ぐな性質のようだった。天窓から指す僅かな月光を後方から受けているようで、俺の眼からは仄かに光を纏っているように見えた。

ラエルが、自らの手で、無造作にくしゃりと髪を掴んだ。月の色とも似つかわしい白金とも言えるだろう髪を。

## 「頭巾の秘密」 5

「あの、驚かれました？」

「……なるほどな。今までの変な茶色は、色々な意味で見せ掛けだったってことか」

ラエルの髪色を珍しいと認識していたのは、他でもない見たことの無い色をしていたからではある。だが、それはあくまでも、旅人の髪質に起こりやすい髪の痛みとか変質とかによる斑まだらな色にあった。茶色という色自体は珍しいわけではなく、むしろその色はこの国に生まれついた者たちにとって一番馴染みのある色であり一般的な人間が持つ色に他ならなかった。

俺だつて、父さんだつて母さんだつて、例外なく茶色であり、それ以外の色の持ち主なんて、早々いないのだ。

「そのほうがこの国では動きやすいことを知っていましたから。何とかして、その色にしていたんです。何度も何度も、たくさんの素材を使って染めたのに、まさかたつた一種類の薬草でこんなにも綺麗に落とせるとは思いませんでした」

「腐つてもリーグルの名を継いだ植物学者の母さんにしてみれば、間違つた方法で髪を傷めているお前を見過ごせなかつたんだろうな」  
「ええ。疑いをかけられ、見つかつてからは再三注意されて、主様しゅさままで説得の手に使われてしまった以上、わたしには成す術はありませんでした」

「……まあ、利用されたというよりは、利害が一致したつてトコロなんだろうけど」

（俺だつて、見たことも無かつたとは言え、ラエルの髪が痛んでいくのを知ってしまえば耐えられなかつただろうし、今となっては明

確な理由を知らぬ以上、もうして欲しくないし……)

ぼそりと呟いた声はラエルに届かなかっただけらしい。

「主様？」

不思議そうに聞き返してくるラエルに、俺はなんでもないとだけ言って、話しの続きを促した。

「わたしの髪色が戻るまでの監視の間、ルレッツ様はわたしの髪を調べて下さいました。思っていたとおり、この髪の色は疾患からくるもの。加齢とともに無くなるものらしく、わたしの体質的に自然と茶色になっていくからと説得されてしまいました」

「そうなのか？」

「恐らく、そうなのだと思います。前々から、色が変わってきているなとは思っていたんです。拙い方法でも染まりやすくなったというか、元々の髪が茶色に似てきたというか。てっきり、染色の影響で色が染み付いてくれたんだと、このまま永遠に染まってしまえと思っていたんですが」

「へえ。それで頭巾をしても染色を続けていたんだな」

「はい。お分かり頂けました？」

「まあな」

「そうですか」

ふつと、ラエルが息を吐く。そして、用件は済んだとばかりに、ラエルが手にしていた頭巾を再び身につけようとしていたので、俺は慌てて腕を伸ばしてそれを止めた。

「今だけでいいから、もうちょっとそのまま置いてくれよ？」

「このままで、ですか」

「うん。駄目か？」

ラエルが再び困った顔をした。

「あの、その……こんな髪、見せられるようなものでは」

ラエルの言いかけた言葉に、俺は反射的に答えた。

「そんなわけない！ いや、少なくとも俺にはそう思えないから、おまえさえ良ければいいんだ。この通り頼むよ？」

「主様のお願いなら……わかりました」

渋々ではあったものの承諾してくれた彼女に、俺はほっと息を吐いた。

せっかく目にする事ができたラエルの秘密を、俺だけが知るだろうそれを、もう少し満喫していたかった。

ラエルが何故『見せられるものじゃない』と卑下しているのか、隠そうとしているのか、頭のどこかで考えを巡らせながら、俺は話を少しでも変えることにした。

「おまえ、やっぱり髪短かったんだな」

「そのほうが何かと都合良かったですから」

「旅する上で、か？ ただ単に染めやすいから？」

「うーん、どうでしょう。両方でしょうか。あ。でも、主様に伸ばすと約束しましたから、心配して下さらなくても大丈夫ですよ？」

「あつ……そう？」

俺が話を振った理由を見通されてしまい、二の句の告げないまま俺は押し黙った。

「主様？ わたし、あなただからこの頭巾を取ったんですよ？ あなただから、わたしは約束をしたんです。それを、忘れないで下さい。これからのわたしは、今まで以上に頭巾をすることを止めないし、この髪を極力人目に触れないようにしてしまっけれど。…でも、覚えていて欲しい。わたしも約束を忘れないし、あなたのためだけにこの髪を伸ばすから……」

にっこりと微笑んでくれたラエルの笑顔が眩しくて、俺はどうしてだか、居たたまれない思いのまま頭を掻いた。

「……ああ、わかった。ラエル、見せてくれてありがとう。せっかく綺麗な髪してるのに、頭巾で隠しちゃうなんてこと、正直勿体無いとも思っけど。俺だけが知っていればいいことだしな？」

偉そうな口で言えば、ラエルがぷつと吹き出した。

「ええ、そうですよ。わたしのことは、わたしだけの主であるあなただけが知って下さっていれば十分ですもの」

「っ」

ラエルの言う『主』と言う言葉に反論を仕掛けたものの、俺はそれを止めた。よくよく聞けば、それは俺の中の邪な独占欲ヒトリノカミを満たすかのような言葉でしかないのだ。

（ラエルだけの主と言うのも悪くないよな。それに、俺だけが知っているって言うのも……）

俺は、一人悦に入って忍び笑いしてしまった。

## 「学び舎の友人へライバル」たち

「ラエルちゃん！」

いつものように学舎へと繰り出した俺とラエルの二人を迎えるは、俺とそう背丈の変わらない少年だった。

「うわ、こっちに来やがった。　　ったく、コーラルのやつ、朝っぱらからうるせえったら……」

その少年の登場に俺が思わず顔をしかめると、それに反するようにラエルは微笑んだ。

「昔からの幼馴染相手に、そのように言わなくても。　　あ、おはようございます。コーラル」

「おはよー！　ラエルちゃん、今日も可愛いね」

一目散に掛けてきた少年は、ニコニコと笑ってラエルを見つめている。

少年　コーラルは、俺の数少なく無い幼馴染の一人である。幼馴染と呼べる友人の中でも、特にコーラルとは『親同士の付き合い』もある関係で、生まれてすぐの頃からそばにいたらしく、共に遊び呆けない日は無かったほどだったらしい。

だからこそ、友人たちの中でもコーラルだけは唯一『悪友』とも言えるべき存在でもあり、気兼ねない言葉の掛け合いも出来るのだが、とある時期から、厄介な喧嘩へ発展しかねない間柄にもなってしまうていた。

つまりは、コーラルが、ラエルを好きで好きで仕方が無いことが原因で。

「あ、あの！ それじゃ、失礼しますね」

俺がなんだかんだ考えているうちに、ラエルがすたころと行ってしまっていた。

そのことに別段困ったわけでもなく驚いたわけでもなかったが、俺はふとため息を吐いた。

ちらりと、コーラルを見やる。思ったとおり、俺の悪友殿は意気消沈しているようだった。

「あー、何でかなあ？ ……また、逃げられちゃったよ」

「だな」

あえて、何も答えないでいるのに、コーラルは俺を睨みつけてきた。

「なんだよ、なんだよ！ 自分はラエルちゃんと仲良いからって、余裕取りやがってえ！」

「俺のことはどうだっていいだろうが！ コーラル、頼むから、初めの頃を思い出せ。おまえの姿を一目見れば走り去っていたアイツのこと。……あと、おまえが絡まなかったときの対応とかをさ？」

思い当たるところがありすぎるだろうコーラルが、うつと口ごもる。俺は追い討ちを掛けて見せた。

「おまえがラエルに対して過剰に自己主張アヒールしやがるから、それに怯えて逃げてるってことくらい……わからないわけ、ないよな？」

「っけー！」

何らかの反論を企てたらしいコーラルだったが、言い捨てるよう

に舌打ちをしたかと思うと俺の肩に腕を廻してくる。

面倒臭かったものの、そのままの状態俺はよろよろと歩いた。  
俺は諭すようにコーラルに言った。

「なあ、いつそのこと諦めるよ？ おまえが思い余って告白なんかしたら、俺、どっちもいなくなつちまいそつで嫌なんだけど……」

「僕も彼女も失いたくないのなら、君は僕に協力すべきだよ、ロアーツ。ラエルも幸せで、僕も幸せで、君も幸せ。……ヤベ、これ、一石三鳥じゃないか？！ なあ！」

「ああ、おまえの超前向きな性格は嫌いじゃないぞ、コーラル。だがな、弊害がありすぎ」

何を言っても聞いてくれない。絶対にいつか厄介なことになるとが目に見えているだけに、確実に巻き込まれて振り回されるだろう俺自身を思い、俺はまたため息をついた。

コーラルと共に講義室に入ってからそれぞれの座席についてからものの数秒で、俺の前にまたしても友人の一人が現れた。

「酷い目に合ったよ、本当。『抜け駆け』なんてするもんじゃないね」

俺と同じ授業を受けることは数少ないケイン「シユバルツが、なにやら暗い顔をして俺を見ていた。

同じ講義室であるはずも無いケインが俺にわざわざ会いに来た理由とか、ケインの言葉からして、俺には理由がありありとわかってしまった。

恐らく、先日のラエルが漏らした『共犯』として、あの母に懲らしめられたに違いなかった。

「……悪いな。うちの母さんが」  
「いや、まさかラエルちゃんが『あの伯母様』に溺愛されているとは夢にも思わなくてね。僕としたことが、迂闊うかつだったよ。せつかくロアにイイ顔できると目論もくろんだのに」  
「おい」

ケインの言葉に俺が反射的に睨めば、従兄弟ケイン殿は、おどけたように笑って見せた。

実を言うと、俺とケインには血の繋がりがあある。お互いの母が姉妹なため、俺たちは従兄弟どうしなのだ。

ちなみに俺の母が姉側で、ケインの母が妹側である。そして、その姉妹の血筋はあのシュバルツの家の分家筋。俺の母も今ではリーグルの家の当主であるが、一応シュバルツの家の人間の一人であったのだ。

父の血で薄まっているとはいえ、ケインとも母とも似通っているはずの秀才の血は、俺には多分作用していない気がするけれども。

「なになに、何の話？」

ケインと俺とが話し込んでいることに何かを嗅ぎ付けたのか、コーラルが飛んできた。俺とケインは揃っていやな顔をして、お互いの表情に噴出してしまった。

「騒々しいのが来たな。じゃ、ロア。ラエルちゃんに『力になれなくてごめん』って言つといて。あと、よろしく伝えといてよ」

手を上げてひらひら揺らせて、ケインがそそくさと去っていく。

短い返事を返し、なにやら喚いているコーラルを無視しつつ、俺は頭が痛くなった。

(あのケインが、『抜け駆け』しようとした、なんてな)  
(まさか、ケインまで、ラエルのことを?)

その瞬間、思いついた共通点のいくつかに、俺ははっとした。

ケインとラエルは、お互いに頭が良い。物静かで、体を動かすと  
言うよりは、読書に励む方が好きなこと。

そういえば、この間の染色に関する借りた本のことだって、ラエルが独自に行動して、ケインに働きかけたからこそ、起こったこと  
だった。

俺抜きで、ラエルがケインに話しかけたから、出来たこと。

(あの、極度の人見知りのラエルが、ケインにだけは、心を許  
しているかもしれない……?)

「っは。冗談じゃない」

いつのまにやら講義は始まっていて、俺のそばにコーラルはいな  
かった。

けれど、俺は、師の声だけが響く講義室の誰一人にも聞こえない  
ような小声で呟いて、掌を握り締めていた。

「なあ、ラエル? ぶっちゃけて言えば、ケインのことどう思  
ってる?」

聞こうか聞くまいか考え抜いた後、覚悟して聞いたその質問に、  
ラエルは不思議そうに俺を見返してきた。

「どう、とは? わたしの望みに協力してくれた心優しい人、とし

か思えません」

としか、思えない。

そんなの、ただの表現の一つだろうとは思ったけれど、それが気になる相手に対して使うだろう表現ではないと思った俺は、ほっと安堵のため息を吐いた。

「主様？」

説明を求めてくるかのような声に、俺は、我知らず口元に手を当てて、明後日を見るようにして、ラエルから視線を逸らす。

（ ケインめ、ざまあみろ！ ）

密かに劣等感を感じる相手だけに、俺はニヤけてしまう自分自身を抑えきれずにいた。

「いやー、その。俺の勝手な都合で聞いたコトだから。絶対にケインには言つなよ？」  
「……わかりました」

ラエルは俺の望むままに頷いてから、ふと思いついたように、俺を呼んだ。

「主様？」

「ん？ どうした？」

「わたしからも、質問して宜しいですか？」

「珍しいな？      なんだよ？」

「主様は、気になる女性、いるんですか？」

俺の耳にしてきたラエルの発言の中でも、一際でかい爆弾発言だった。

「っ」

二の句が告げない。

「主様？」

俺を促す声があるけれど、何と答えていいものか。

「……おまえ、俺にそれを聞くなら、おまえも俺に言うんだろっな？」

「え、わたしですか？ そんなの決まってるじゃないですか。主様ですよ？」

そう言ったラエルが、無垢すぎる笑顔を俺に向けてくる。屈託無く言われてしまっっては、その言葉に俺の期待する『感情』が無いことも同然だった。

目の当たりにしてしまった失望感に、俺は「はあ」とため息を吐くしかできなかった。

「そつだよな。俺も、おまえが言うように、おまえにしか興味は無いよ……」

ぶつぶつとやけくそ気味に呟いたら、妙な沈黙があった。そつとラエルの様子を盗み見ると、彼女はまるで驚いたように目を見開いていた。

その表情が、段々と綻ほびていく。

「あ、ありがとうございます」

頬を赤らめて、嬉しそうに微笑んでくれた。  
少しだけ、心が晴れた。

「嘘じゃないぞ？」

「あ、あの、わたしもですよ？」

言い募るラエルの言葉に、俺は思わず笑ってしまった。

「いや、悪いけど、おまえの言葉はあてにはしない。俺と同じかどうかなんて……」

続けざま、「冗談でもありえない」と言おうとして、ラエルがやけにムキになって俺に反論してきた。

「そんな。主様こそ、皆さんに人気があるのに。イワンとか、エミリとか、スーザンとか、サラとか」

「え、あいつらが？ ……いやいや、まさか。それこそ冗談だな。おまえこそ、あのと時の先輩学生を筆頭に、結構な男に言い寄られてる癖に」

「……それは、多分、違いますよ？ 主様」

「多分じゃなくて、現にあったんだから、絶対だろ」

「そうじゃなくて！ 何と言ったら良いか……」

うつんと悩んだ様子のラエルが、ぶつぶつと呟く。

「あの方々はわたしの本質など知らぬ方々ばかりでしょう？ 無口で無関心で無表情を装うわたしに、違う何かを求めている人たち。」

そんな方々、きつとわたしでなくともいいはずなのです」

やけに説得力のある反論だったけれど、俺はその反論自体にはなく、反論理由に使っただろう彼女本人が認めた『事実』に対し、突っ込みたくて仕方がなかった。

（ やっぱり、あの『無口・無関心・無感情』はわざと装ってるんだな…… ）

## 「紫の御仁」 1

「そういえば、聞いたか。ロアーツ。ラエル。近々この街に『紫の御仁』が来るらしいぞ」

父の言葉に、俺は「げーっ」と呻き、ラエルが驚いたように「えっ?」と呟いた。

「紫の御仁?」

「ああ。もしかして、ラエルは旅をしていたから知らないのかな?

紫の御仁。『審査の儀』を行われる王宮の使いだよ」

「『王宮』の?」

呆然と呟いたラエルに、父がわかりやすいようにと言葉を柔らかくして伝えようとしているのを、俺は気だるい思いで見つめていた。

このエルズの街には、三邸宅なんていう大層なものがあるにはあるが、決して国の都なんかではなく、その都と交流が深い腰巾着的な都市ですらない。どちらかといえば、偏狭な土地にある街である。古くからの住人たちが曰く、『この地で暮らしこの地で生きるのなら、国とか王とか貴族とか、そのような知識すら学ぶ必要性すら無い』らしい。

街に生まれ、外に出ることはなく育った俺にとってみれば、エルズの街の中だけが、俺にとっての世界であり、それですべてだった。そもそも、国とか王とか、そういう名詞ですら本の中の物語の世界のように思えてならないのだから。

しかし、曲がりなりにも街は領地の一つだった。他ならぬ人々や街が王の下に属している以上、決して無関係でいられるわけがない。この辺境のイライブ地方エルズの街にも、王とか国とかに関わらざ

るを得ない取り決めごとが、ただ一つだけあった。

それが、『審査の儀』と呼ばれる仕来り。国王陛下の名の下に、『紫の御仁』によって行われる一種の試験だった。

（　　）　　つち。面倒臭いよな。もう『前』の審査から三年が経つちま  
つたなんて……）

俺の記憶が正しければ、約三年ごとにその面倒臭い仕来りを無事にやり過ごさねばならなかった。

そう、丁度三年前の審査の対象は、料理人だった。あときは街一番の宿屋の主人が一種の『白羽の矢』に立たされて、王都に向かう羽目になったのだった。

審査に受かった者は、王の名の下に王宮へと召し上げられるらしく、任期は当人にすら不明で、宿屋の主人は半年後くらいに帰ってきた。洗練された王都の文化に触れてしまった宿屋の主人は「王都はすごい」とだけ一月程言い続けていたような気がする。

「審査人は誰が見てもわかるように、紫の布を身につけているらしい。その当人が、今、決まりとして詰め所で身分証明を行っている。明日にでも街に入って、今回の審査対象者を選びすぎるんだろっね」

「……父さん、そんなこと言って、父さんが対象者に選ばれたらどうするんだよ？」

まるで他人事のように楽しんでいる父に、俺は突込みを入れた。

父は、俺の言い分に、にやりと笑って見せた。

「わたしが選ばれるはずが無い。わたしはこの地の物資運送を一手に率いる男だからね。イライブの血が貧窮することを王とて望まぬだろう？」

「その商人魂のおかげで、全然家に居付いて下さらないようですよどね。あなた？」

母は複雑そうな顔をして父を見ていた。

「王も何を思っつてこんな儀を始めたのでしょうか。以前の宿場のポールドさんがいなくなったときも、奥さん困つてらしたものは、誰が王都に攫われてしまつのかしら」

「母さん、その言い方……やばくないか？」

俺も内心では同じようなことを思っていたが、とてもじゃないが口にする勇氣は無い。

「あら、こんなの誰が聞いても同じように思うに決まっているわ。召し上げられると言うことは、言い逃れも許されない強制的な命令なんだもの。無事に終わると良いのだけれど」

憂う母が、黙っているラエルに気付いたらしく、慌てたように近づいていつて、ラエルを腕に抱いた。

「大丈夫よ、ラエルちゃん。わたしもレフェルスも決して選ばれないわ？ それに、審査は生業をする大人しか選ばれないとされているから、心配しなくても、大丈夫よ？」

母の腕の中からラエルが頷く声はしたものの、なんとも弱弱しい声音だった。

「あの話を聞いてからずっと何か考え込んでいると思ったら……ま

さか、おまえがそんな行動に出るなんて、夢にも思わなかったよ」「そうですね？」

ふふふとラエルが微笑んで、天窓の下から外を見る。

「何処にいらつしやってるんでしょね、紫のお人は」

「人だかりと常にあるからな、審査人は。この家の近くには来ないとは思うぞ？」

あえて「来たらず来たで困るけど」と、俺は口にせずには置いた。

俺とラエルの利害の一致、つまり『紫の御仁』になんて会いたくないという理由で、俺たちは両親達にばれないように、ラエルの秘密基地である屋根裏部屋に引き込んでいた。

ようやくとその部屋への正しい行き方を知った俺は、この部屋を簡単にラエルに開け放してしまったことを軽く後悔してしまっただけ。それくらいこの大きな天窓から見える景色は魅力的で、秘密の場所であること自体、俺を惹きつけるものだった。

「今日、確か、試験ありましたよね。学舎」

ラエルが思い出したようにぼつりと言った。

授業を初めてサボろうとした彼女だから、罪悪感に苛さいまれてでもいるのだろうか。

「いつもやってる、発破ハッパ掛けの学力審査だろ？俺たちは父さんから知らせがあったからこそこうして休もうと企めたけど、他の奴らは悲惨だよな。学舎の審査に、本物の審査人。対象者ですらないつてのに、こんなに気分が滅入るんだもんね。俺たちが大人になる前に、こんな審査速く終わって欲しいもんだぜ」

「そうですね……でも……」

ラエルが、ふと、俺を見た。

「遠い地にまで目を向けて、優秀な能力を持つ人を見出す。その思い自体は、王は、間違っていないなかつたと思うのです」

「まあ、そうか。確かに、そうじゃないと王都に住むお貴族様たちばかりが偉そうにするばかりなんだろうな」

言われてみればそうだと思って俺が頷くと、ラエルがはっとしたように口に手を当てた。

「す、すみません、主様<sup>しゅさま</sup>。わたし、すごく偉そうなことを」

「いや？ そうじゃないだろ。至極当然と言うか、そういう見方もできると言うか……別に気にしてないから、そんな風に恐縮するなつて」

「す、すみません……」

「態度までそんな殷勤無礼なのはやめろつて。俺は呼び名だけしか認めていないんだからな？」

「気をつけます」

ラエルは、俺と秘密基地に隠れている間中、ずっと元気が無かつた。

いや、というか、紫の御仁の話が出ていてから、ずっとだった。

審査は、審査人が満足しきつてしまつまで、行われる。

きつと、明日も明後日も、だ。

ラエルがどんな思いでいようと、明日こそは外に出ねばならんだらうなど、俺は柄にも無く現実的に思うのだった。

## 「紫の御仁」 2

しぶしぶとした足取りでいるラエルを従えて俺が学舎にたどり着けば、俺のいやな予感的中してしまっただらしく、これでもかと言うほど学舎の建物中に人が溢れていた。

邸から学舎へと出向く途中も、同じ方向へと向かう人しかいなかったのだ、予想できない方がおかしかった。

(あーあ、やっぱり、後三日は粘ればよかったかな)

既に2日休んでいた。俺の成績はともかく、ラエルの輝かしい成績をこんな理由で失くしてしまうのは、俺としても残念だった。

とはいえ、儀式の対象が学舎の何かであるのなら、授業は平常道理に行われるはずもない。現に、俺たちのいる学舎門付近にまで生徒達はたむろしていて、半ばお開き状態にも見えた。

まあ、師の中には真面目に授業をやるうとする師もいるだろうから、皆が皆、師と審査人の様子をここから窺っているようだった。

「あ、ロア。やっと来たんだ？」

俺の姿を捉えただろうケインは、その直ぐ後でラエルに気付いたようだった。

「ラエルちゃん？ ……なんか元気ないようだけど、どうしたの？」

「こんにちは、ケイン。わたし、ちょっと、いやな胸騒ぎがして…」

…

「紫の御仁の話をしてから、ラエルってばずっとこんな感じなんだよ。まあ、俺は来ても良かったんだけど、ラエルを一人にして

おけなくってさ」

ずっとそばにいたのだと匂わせれば、頭の良いケインはその意図に気付いたらしく、俺をじろりと睨んできた。

「なるほど、ね。ラエルちゃん、心配しなくても大丈夫だよ。昨日大体の審査は終わつたらしい。今回は、『師』が対象だったみたいだから」

「学舎の『師』がか？　なんでまた？」

俺が思わず口を挟むと、ケインは肩を竦めてみせた。

「さあね？　頭の良さだけで言うのなら、僕の親戚筋の方がよっぽど頭良い奴多いと思うんだけど。　あ、これ、嫌味じゃなくて客観的事実だからね？　この前の『料理人』だって妙とは思ってたけど、辺境の地の学舎の師なんかよっぽどじゃないと望む人材なんていないと思うんだよね。……どうせ、王族の誰かの世話係でも探してるんじゃないか？」

「だろうな」

ケインの見解はあながち間違っていないだろうと思って頷いてみると、コーラルがラエルを見つけて飛んできた。いつも思うが、勘のいいやつである。

「ラエルちゃん、この人混みに酔っちゃったのか？　なんかまるで初めてあったときみたいだけど」

コーラルの開口一番の台詞に、俺は頭を殴られたような思いがした。

(……そうだ、そうだった！　何故、この俺が、それに気付いてや

れないんだ！)

あの日、俺は、仲間たちと遊びに明け暮れた帰り道で、ラエルに出会った。ケインも、コーラルもその場にいた。ただ俺だけが飛び出して行って、ラエルの前に立ったのだけれど、出会い自体は三人共に一緒だった。

俺があのととき無我夢中でいたがために忘れていたことを、コーラルとケインは覚えていてもおかしくはなかった。

でも、俺が彼女に気を配れなかったことを他のヤツラに思い知らされるのは、なんだか癪だった。

( って、そんなこと気にしている場合じゃない！ )

「ロア、おまえ、ちょっとラエルちゃんつれてこっちにいろよ！」

「なあなあ、あいつら、こっちに来そうだぜ？」

「 けど、今更隠れるところなんて……」

もたもたしていると、本当に、人混みを従えるかのように審査人は、俺たちの直ぐそばに来た。

三年前、俺は九歳だった。相手の顔なんて完璧に覚えているつもりは無かったが、ちらと見てみたところ、前に現れた審査人もあんな顔をしていたような気がする。

人混みがあることをいいことに合間合間からそつと覗いていると、紫の御仁その人の眼がぎよろりと動いて俺を見たような気がした。

( げっ )

逸らすに逸らせずに俺がたじろいでいると、やがて、その人は俺の目の前にやって来た。

紫の御仁は、外套のフードを頭に被ったままの状態ミシルンで御徴である

紫の布を面布のように扱って、目先だけを晒しているようだった。目とそのまわりの少しだけしか見えないだけに、ぎよろりとした薄い茶色の眼が、俺を見据えるように見下ろしている。

いつの間にか俺の後ろ背にしがみついているだろう少女の手が、俺の背をぎゅっと掴んでいた。

「おまえ……」

審査人は、俺を見下ろして何を思ったのか、厳かに言い放った。

「剣をやれ。良い目をしている。きっと、おまえの役に立つ」

「剣を？」

後ろにいるラエルの手の力が、更に増したような気がした。

「……俺に出来るでしょうか」

思わず俺がそれを尋ねれば、審査人が、目だけで笑ったような気がした。

「おまえには、出来ぬのか？」

試す目に、俺は何も言えず、ただ見つめ返した。

紫の御仁が人ごみを引き連れて去っていくと、ようやく緊張を解くことが出来た。

「おい、ロアーツ。何でおまえ、審査人に将来アドバイスされてん

の？」

「ある意味次の勧誘スカウトだったりして」

ケインがそれらしいことを言うので、当の俺は気が気じゃなかった。

「やっぱ、そうなのかな。正直、俺、将来のことなんて何も考えてなかったけど、植物学にリーグルはなれない継げないもんな。どうせなら、武芸で身を立てて、自警団とか入りたいな」

俺の言葉に、二人が「おっ！」と反応を見せる。

「いいかもな、それ！」

「ロアに似合うって言うか、体技武芸はお手の物だよな？」

「……まあ、ケインよりは成績いいけど？」

「はいはい。俺はおまえに学術で勝ってるからいいの！」

茶化す俺の声を冷静に流してくれるケインだったけれど、コンプレックス案外、俺とは違う部分に劣等感を抱いてるのかもしれないと思って、俺は笑った。

笑う俺たち三人に対し、俺の背から手を離れたラエルは押し黙っていた。

「ラエルちゃん？ 心配しなくても、審査は終了したと思うよ？」

あの人、多分、キリル師を呼びに来たっばかったから」

「キリルって、あのキリル＝ヴァレン？ ヴァレンタイン邸宅の次期当主様じゃん！ 王命に従って召し上げられたらそのまま騎士とかになっちゃうんじゃない？」

「だから、それを予期したヴァレンの当主がキリルさんに雲隠れを命じてたって、言う噂だよ」

「あー……なるほどね」

「そう。　ね？　だから、大丈夫だよ？　ラエルちゃん？　明日から楽しい授業だよ？」

勉強馬鹿のケインの言葉に、思わず「楽しくは無い」と突っ込みたかったが、大人しいラエルの様子が気になったので俺は口を挟まなかった。

「実質目にするまで、まさかとは思いましたが……あの紫のお人を選ばただけで、王都に行かねばならないんですね？」

「まあ、そうだね。一応は名誉あることとして歓迎されるのかな。当人にしろ、その身内にしろ、迎え入れる王都側も」

ケインがその疑問に優しく答えれば、ラエルは更に表情を曇らせた。

「じゃあ、わたし、大人になんて　なりたくないです」

ケインとコーラルはラエルの言葉に笑ったけれど、俺には笑えなかった。

紫の御仁が俺に指し示してくれた一つの未来。

もしもそれを願えば、俺は、かけがえのないこの時間を失うことになるのだと、頭の何処かでわかっていた。

「行方不明？」 1

長引いた学舎での用事を終わらせて、俺はリーグルの家へと向かう道を急いでいた。

自分に学が無いことを、これほどまでに悔いた日は無い。しかも今日は講義の補修を一人きりで受けるはめになって、俺は師に出題された問題を己一人で解読する以外に学舎を脱出する術は無かったのだ。

丁度、街外門の前に鎮座する詰め所前に差し掛かってから、意外な男たちの喧騒を目にし、俺は歩みを止めた。

「あれ？」

視線の先、自警団の男たちと、父の姿が見えていた。

父は仕事の関係上、他の街の人間に比べればあの跳ね橋を渡ることが多く、出入りを繰り返しているからには街の防衛を一手に引き受けている自警団側の人間とも話をする方だった。

だから、別に、そうしていること自体は良く見る光景だということに、揃いも揃ってでかい図体を並べて深刻そうに話しているさまは、何やら異様に思えた。

「何故だ！？ まだ、見つからんのか！」

耳をすまさずとも聞こえてくるのは罵声ばかりで、そんな我が父らしくない姿を見過ごさせるはずもなく、俺は声を掛けることにした。

「父さん？ 何してんだよ、こんなところで……」

振り向いた男たちの顔は、強面の大人ばかりで、揃いも揃って強

烈な形相をしていた。

「ロアーツ!?」

中でも父の顔は凄まじく、思わず、俺は体を丸めて縮み上がりかけた。

「いつまでほつつき歩いてたこの馬鹿息子! 肝心なときにおまえが役に立たんとは! ラエルは、何処だ!? 見つけたのか?!」

「え?」

言われた言葉の意味が、俺にはわからなかった。

「ラエルは……家にいるだろ? こんな時間まであいつが歩いてるわけが……」

既に夕暮れを迎えている時間帯だった。

今日は一緒に帰れなかったとはいえ、品行方正という言葉はまさに彼女のためにあるかのような言葉で、日頃優等生として過ごしているラエルが、今の時間まで外にいるなんて俺には思いつきもなかったのである。

「この馬鹿者!! 家にいない、街で見かけない、誰も見ていない! だから、このような事態だと言つのに!!」

一瞬、何かを聞き違えたかと思った。

「……えっ? ちょっと待てよ、父さん。見かけないって……?俺が学舎に残る羽目になったから、コーラルがラエルを送っていい

たはずだ。だから」  
「それが、最後だ！ 昼過ぎの目撃情報だぞ？ それ以後、行方が  
知れないなどと、冗談ではないっ！！」

話についていけない俺を無視して、父は男たちに向き直り、懇願  
した。

「手分けして、一刻も早く、ラエルを保護して下さい！ お願いし  
ます！」

父の声が、暮れてしまった暗い街中に響き渡った。

街は大まかに分けて、南北東西の四方部と、特に住宅街の多い西  
部と南部の間の区画だけを南西区、市が開かれる中央広場地区、商  
人や、自警団の施設、そしてリーグル邸のある街入口に近い東南区  
の、全部で七つの区域がある。

区域ごとに分担され散っていた自警団の男たちの連絡網の結果、  
わかったことは、橋の門番の証言による、『未だ街は出ていない』  
という事実だけだった。

「くそっ」

苛立ちのまま、俺は拳を握り締める。

父に話を聞いて、ひとまず邸に帰った俺は、邸中を虱潰しに探し  
た。

薬草園がある中庭も、居間も、食卓も、彼女の部屋にだって入っ  
て、あの屋根裏部屋まで調べたのに、ラエルは何処にもいなかった  
のだ。

「 ロアーツ。おまえ、心当たりは無いのか？  
「心当たりって……？」

それは、父に叱り飛ばされた後、すぐさまに聞かれた言葉だった。藁にも縋るような思いでいるのだろうか、父はこれまでに見たこと無いほど、切羽詰ったような焦りの表情をしていた。

「家出にしろなんにしろ……、今は何でもいいから情報が欲しいのだ！ ここ最近、彼女に変わったところは無かったか？      ロア、おまえはラエルから、何も聞いてはいないのか？」

父の言葉に、俺は冷水を浴びせられたような気がした。  
何も、言葉が浮かんでこなかったのだ。

（俺は、彼女のことを、何も知らない。何も聞けずにいるまま、ただ満足してただけで……）

悔しさのあまり、俺は、強く唇を噛み締めた。

「父さん、ごめん。俺が思いつく限りは、何も……」  
「そうか」

父は、それ以上は何も聞かず、俺の頭にぽんと手を置いた。

「……その、先ほどは取り乱してすまなかった。今までに、こういっただけが無いわげじゃないのにな。大丈夫、父さんが必ずあの子を見つけてあげるから……」

傷心の思いで思考が鈍っていたとはいえ、俺は父の言葉の意味深さを聞き逃しはしなかった。

「父さん、今の……どういう意味だよ!?  
それじゃ、まるで  
!」

俺の反応を予測していたのか、父はそう慌てるわけでもなく「母さんには黙っておけ」とだけ言っただけで俺に背を向けた。

「その話は後で幾らでも聞かせてやる。……わたしとて、確信があるわけではない。だが、だからこそ、彼女は旅人だったのではないかと、わたしはそう思っているだけだ」

父は「母さんを頼むぞ」とだけ言って、邸から出てしまった。

俺は呆然とするまま、邸に取り残されたのだ。

父に、役立たずと言われても仕方なかった。

「行方不明？」 2

母は、不安で不安で仕方ないだろうに、俺には笑顔を向けてきた。

「無事を祈りましょう、ロアーツ。わたし、この間に、お夜食作ってくるから……」

先ほど、母を頼むと、父は言った。

仮にも俺は父から母を頼まれた立場だというのに、その母が俺を支えようとしているなんて……。

( そう思われてるってのは、情けないけど…… )

正直、その心遣いありがたいと思いつつ、俺はゆっくりと立ち上がった。

ちらりと、周囲を見渡してみる。打って変わって静かな庭先が、そこにはあった。

誰も、いない。

先ほどまで報告に現れていた自警団の連中は、再び持ち場を手分けて駆け出して行ったし、父は父で、仕事関係の伝ツテをあらっているんだろう。そして、いくら夜食を作りに行った母だとて、そんなに早くに戻ってくるはずも無い。自分たちの分のみならず、この捜索を手がける全ての者たちの食糧を仕込みに行ったのだから。

俺は、その瞬間、大人たちの暗黙の言いつけを破り去った。

消沈していたのも、悔しい思いをしていたのも、大人たちが居並ぶ前では、何も出来なかったから。 全てはこの、一時のチャンスを掴むためだった。

俺は、自らの手でラエルを探すべく、街の大通りを駆け抜ける。実を言えば、ラエルが向かうだろう場所の、大体的見当はついていた。俺とラエルの秘密の場所。初めての約束を交わした場所である街を見渡せる裏手の丘へ行く方法は、俺たち二人だけが知っている。

だから、中央へと続くその道を通ろうとしていて、ふと視界に入ったある通りの場所に、俺は目が釘付けになった。

街に位置する、不良とかなんとかが出没する柄の悪い通りが、ぼんやりと見えた。そこは日が沈み始めていることとは別の意味で薄暗く、建物の外観もどこか小汚い。何より、そこを漂う空気が違っていた。冷たい、人を人とは見えないような、ぴりぴりとした刺すような空気が、そこにはあるのだ。

それなのにも関わらず、何故だかその場所には、子供にしか知られていないある抜け道があった。『近付くんじやない』と、口うるさく言う大人たちは知らないだろう、人知れぬ場所へと続く、古い抜け道の奥の奥。

俺は、その抜け道の前まで来ていた。

きらりと光った道端の見覚えのあるきらめきを放っておけなかったのだ。

「っ!?!? ……これ!」

抜け道は、目の前に広がる垣根をすり抜けなければならない。一見、大きめに見えるはする穴があるけれど、実際にはそれも小さい子供でしか通れない。何も知らない誰かがその隙間を強引に通ろうとすれば、何かが犠牲になる。

たとえば、着ていた衣服が小さな枝に裂かれるだとか、持ち物である何かだとかを取り落とすとか……。

視線の先、飛び出た枝に引っかかって落ちただろう、鈍く光る腕輪。ラエルが左手首に身に付けていた彼女の持ち品だった。

しゃがみこんで、それを拾う。手にとって、くるりと回したりして、隅々まで観察する。宵闇のわずかな光に、きらりとそれが光った。思ったとおり、それは彼女の持ち物に違いなかった。

「この先、か」

意を決して、俺は垣根の中に身を進めた。  
迷う暇なんて、俺には必要なかった。

思っていたよりも、進み易くは感じたものの、行く手は中々厳しかった。小枝とか、窪地とかで足を捕られたり、身を裂かれ、全くの無傷とはいえなかった。

どこまで続くかと思われた抜け道の、空けた場所に出たとき、一人の男の姿と、見覚えのある少女の姿をようやく目に見ることが出来た。

「てめえ！ ラエルを離せっ！！」

男は俺の言葉に気付いて振り向いたが、その表情を変えなかった。

「なんだ、ただの……ガキか」

呟いた男が、薄く笑う。

ちらりとラエルを見て、俺を見たかと思うと、またにやりと笑ってから、引っ張ったままだった彼女の腕を離す。視線を彼女に向けたまま、男は懐を探り、鈍く光る小刀を取り出した。

歯痒い思いで俺は唇を噛んだ。向けられている刃物の先にいるのが自分だとて、その近くにいるのは他ならない彼女だった。

自由になったはずの彼女は何も言わず、動こうとせず、男の持つナイフと俺とを呆然と見返しているようだった。

「悪いことは言わん、小僧。道を、引き返せ」

男の声は冷たく、ただ低かった。俺が否定すれば、男は面倒臭そうにため息をついた。

「なあ、小僧？ お前だって命が惜しいだろう？」

嘲笑う男の声を聞きながら、俺は男の手元と彼女とを見比べる。

男の言葉の意味がわかったのだろうか、ラエルも懸命に頭を振って頷いていた。

俺が頭を振りなくなる気持ちは違う意味合いなのだろうなと俺は思い、暢気にも苦笑いを浮かべてしまった。  
涙を浮かべるその眼はまるで、逃げろとも言っているようだった。

（逃げられるかよっ！）

俺は彼女を、男を、強く睨みつけた。

「そいつ、俺の友達だからさ……。返してくれない？ オジサン？」

精一杯の皮肉に、男は間を置いてまた笑った。

「へえ。おじさん、ね。なんだ、いい度胸してるじゃねえか。嫌いじゃないぜ？」

にやりと男が口元に弧を刻む。彼女の体の震えが、目に見えてあ

からさまになった。

「小僧。お前さんに免じて、チャンスをやろうじゃないか」

「チャンス？　何？」

口では興味心身気に聞くフリをすると、男はまた機嫌良く笑う。

「お前だって、男だろう？　この俺に、勝ってみるよ？　この嬢ちゃんにいいとこ見せてやればいい」

男は、道端に転がっていた木の棒を投げてきた。

「へへ。俺が敵で、コイツが囚われの姫さんで、……んで、お前が勇者　と。ま、立派な剣じゃなくて悪いけど、獲物が無いよりはマシだろうしなあ」

「　だ、駄目！　やめて、主様！　わたしはいいから、早く！」

今まで何も言わず黙っていたラエルが、ここにきて悲鳴を上げた。

「おーおー、嬢ちゃんも可愛いこと言うじゃないか。どうすんだ、小僧？　俺はどっちでも構わねえんだぜ……？」

ちらと、足元に転がる木を見やる。何処にでもある木の棒だった。強いて言うなら、ちよっぴり太めの。

俺の力では、たやすく折れそうにもないそれ。多分、男が持つあの小刀を受け止めるくらいは出来るだろう。　けれど。

（　これで今、目の前にいる男に勝てるのだろうか？）

自分自身に問いかけてみたところで、答えを出すのは他でも無い、自分一人。

男と、彼女が、俺の答えを待っていた。

（俺はっ、何のためにここにいる？）

「……やるよ。俺が勝てばいいんだよな？」

「そんな、主様っ！」

ロアーツの決意を非難するような声が出た。自分に発破をかけているとは知られたくはなくて、俺はにやりと笑ってみせた。

（わかってる。わかってるんだ、ラエル。でも、俺は……っ！）

俺にだって、それが何を意味するのかわかっているし、わかっていた。

これが、昔仲間内でやったお遊びではないこと。目の前で剣を持って構えているこの男が、授業をしてくれる師でもないこと。

そう、相手は俺を阻む敵であり、これは実戦なのだ。

勝たなければ、負ける。死ぬ。

それで、すべてが終わる。

「ロア様っ！」

少女の呼ぶ声が懐かしい呼び名のように聞こえた気がしたが、そんなことに気をかけている暇は、今の俺には無い。

俺は、ひたと男だけを見た。

挑んだからには、片時も逸らしてはいけないのだから。

「おいおい、今生の別れでもあるまいに。 いや、やっぱりそんな  
つちまうかな……」

笑う男は騒ぐ彼女をあしらって、腕を掃った。悲鳴を上げた彼女  
に、俺は内心で呟いていた。

（ごめん）

その、たった一言だけ。

「じゃあねえな。遊んでやるよっ！」

言葉とともに笑う男が、ゆっくりと俺に歩み寄ってきた。

「行方不明？」 3

この一瞬が数十分だったのか、一時が数分間だったのかすら、俺にはわからなかった。

怪我を負うにつれ、身を庇う俺の集中力が衰えることに、新たに走る身体の熱と痛みがあった。

いつしか俺はうつ伏せになって倒れていて、体に力を入れて立ち上がろうとしても、中々立ち上がることが出来なくて。体に力を入れた拍子に、わき腹あたりにぴしりと痛みが走った。

「うつうつ……！！！」

呻いてしまったと同時に、腹の底から何かがこみ上げてくるのを感じた。むせ返ってくる嫌悪感に、溜まらずにそれを吐き出す。

「っ！？ げぼっ……う、ぐ……っ！」

血を吐く俺の前に、男の足が見えた。息を整えて男を見れば、男はただ俺を見下ろしているようだった。

男の足が、動く。

咄嗟に頭を庇おうとして、俺は、ぐつと歯を食いしばった。

身を走る衝撃は、決して斬撃ではない。そう、いつまでたっても、男はその小刀を使おうとはしなかった。

俺には、それが悔しくて仕方なかった。

「くっ！ くそお……！ っらああっ！」

振りかぶって、俺は男に立ち向かうけれど、それが男のもとにそれが届く間もなく、男の手に阻まれる。

「ぐっ!?!」

簡単にあしらわれたかと思うと、すぐさま衝撃が身を襲う。今度はもろに腹に食らってしまったらしい。次いで、俺の動きが止まるのを待っていたかのように、足蹴にされる。体の節々がガクガクと震え、痛んだ。

先ほどから少女の泣く声と、嘲笑う男の言葉が耳に入らない。

「主様あ!」

駆け出そうとしてくる彼女の姿が見えたが、男の手に阻まれたらしかつた。

「お姫さんはあっちで大人しくしとけて」

男が言って、足を掃われた彼女はまた転ばされてしまっていた。見れば、彼女も俺も砂埃にどろどろだった。おまけに俺は自分の吐いた血で血糊もついているし、最悪なのだろうけど。

（ああ、本当に最悪だ。だけど……）

「お願い、もうやめて! これ以上はもう　っ!」

彼女の悲鳴のような懇願する声が上がったのを、俺も、男も無視した。

「ラエル、お前は下がってるよっ!」

（勝つ。絶対に! 勝って、目の前の男を打ち負かせさえすれ

ば　　！！)

(きつと、ラエルは、どこにも行かずにすむ……)

その思いがある限り、俺は何にでも耐えられるような気がした。  
例え勝ち目の無い、こんな茶番劇にだって。

「もうそろそろか。時間がおしてるし……これで最後にするか」

やがて男が、呟いた。

そして、ようやくそれを逆手に持ち替えた。斬るためではなく、  
その短剣の特性に相応しく、突き刺すために。

「小僧、悪く思つなよ？」

振り下ろされようとしている刃。その刃がこの身を襲おうとして  
いるのに、俺は、動くことも出来ない自分の体を知る。

(　　駄目だ。よけられない……！)

刹那、為す術も無く死への恐れを感じて目を閉じた俺は、無意識  
に彼女の名を呟いていた。

「あつ　　！？」

声が出た。それは、少女の声だった。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

ラエルが自分の前にいて、腕に傷を負って。そして、勢いのまま  
地を滑り、転がってしまった。

それを、俺は呆然と見ていた。

「げっ！ 嬢ちゃん、やりやがったな……?! あーあー、おい、  
大丈夫かよ」

俺よりも、男の方が衝撃から覚めるのが早かったらしい。男は、  
片手にあの小刀を持ったまま、慌てたように彼女に近付いていく。  
うずくまる彼女が、腕の傷に手を伸ばしていた。けれど、血は止  
まらずに、その小さな手を汚し始めている。

少女のその手を掴んだ男は、完全に俺に背を向けてしまった。

「あーあー、もう。こちら雇われの身なんだから大人しくしてて  
くれねえと困るってさっきから言ってるのに……」

びりつと服を破る音と、ぶつぶつ愚痴っている男の声が聞こえる。  
俺は、わけもわからぬまま、そろりと体を浮かせて、起こしにか  
かった。腕を突っ張って、ゆっくり伸ばす。握りこんだ手で、そば  
にあっただしっかりとした堅い感触を確かめた。

「　　ったく。俺がどやされるじゃねえかよ。ホラ、立てるか？  
うん？」

地に伏した彼女は答えない。

そのとき、彼女の様子を窺っていた俺にはその眼が見えていた。  
彼女と俺とを隔てる男の体では、隠しきれていなかった空間を使い、  
俺たちの視線がぴたりと合わさった。そんな気がした。

俺は、何とか立ち上がる。

「うっっ……」

対して、身を起こしかけたラエルが、声を上げて苦しそうにうづくまったように見えた。

「おい、嬢ちゃん？ まだ痛むのか？ おいおい、勘弁してくれって。ほら、起してやるから手を――」

言う男が、その手を伸ばす。

その瞬間を、ずっと待っていた。だから、ただの一度も、失敗は許されなかった。

振り下ろした木の棒はいわゆる棍棒並には威力があつたらしく、ぴくりとも男は動かないし、起き上がらなかつた。ぐったりとしてはいたが、息も一応ある。背後から頭を狙つたのだ、油断した男にとってはひとたまりも無かつたんだろう。

俺は、ばたりと倒れた男が完全に気絶していることを確かめてから、ラエルのもとに駆け寄つた。既に彼女はむくりと起き上がって俺に背を向けるように両膝を地につけてしゃがみこんでいた。

その右腕は、負傷した左腕を庇うかのように抑えられている。

激しい痛みのためなのか、ラエルが気絶してしまったのは、その直ぐ後だった。

「行方不明？」 4

無事に、家にたどり着いた。

俺たちは大人たちに迎え入れられたが、状態が常とは違っていただけに、大人たちは慌てふためいた。

お互いに泥だらけで、血のりがついているものの殴打の跡ばかりの俺と、ラエルは応急処置が済まされているとはいえ明らかに怪我をしていた二の腕を庇っていたからだ。

ラエルに比べれば見た目軽傷とはいえ、俺のダメージは半端無いと言つのに、大人たちは、俺の行いを許そうとは思わなかったらしい。

「この馬鹿者っ！ 不審な男に一人で立ち向かっただど！？ 何故そんな無謀なことを！！ おまえ、こんなにはるぼろになって……そのうえ、ラエルは腕を負傷して……っ！ まったく、命があるのが不思議なくらいだぞ！」

「でも、父さん！ ……俺は……！」

俺はラエルを取り返したんだと言いたかったが、その思いはまたもや言葉にはならなかった。

飛んで来た父の手を避けられなかった俺は、黙って口の中にたまった血を吐いた。

「ああ……。ああ、すべてはわたしが悪いだろうさ！ 悪餓鬼口ア坊とはこの街で有名なお前の名で、そのお前と共にいる彼女が攫われて。それでお前が大人しくしてられるはずも無いと、どうしてわたしは考え付かなかったのだろうっか！！」

（ ……んなの、ラエルが消えたと知っただけで狼狽してる親父が悪

いんじゃないのか？)

思いつつも、俺はそれを口には出さなかった。我ながら賢明な判断であるだろう。何しろ、ひりひりするほど頬を打たれているから、意見するがために喋るのですら億劫でもあった。

このとき、俺は計三発ほど、父の制裁を頂戴していた。既に、他の大人たちからも何発かある。おかげで、顔とか腹がどこもかしこも腫れ上がってひりひりとしている。

ただでさえ、あの　　今では謎でしかない男からも喰らっていたのだから、これ以上は本当に勘弁して欲しかった。

大人たちが言うことなんて信用ならないが、ラエルを攫ったあの謎の男は消えてしまったらしかった。

結局、あの男は、現れた俺に対しては剣を向けたものの、決してラエルにその刃を向けようとはしなかった。事実、彼女の左腕の怪我は、絶体絶命の俺の前に身を投げ出した彼女自身が起こした怪我とも言える。それに対し、男は驚き、その彼女の傷を手当てして、少なくとも応急処置を済ませようとしていた。

俺には、それが何故なのかわからなかった。

俺がラエルを保護して邸へと帰る間に消え失せた男は、攫った彼女を何処へ連れようと思っていたのだろうか。

最も、第一発見者である俺の見解を聞いた大人たちは、『今はまだ早い』と言って教えてはくれなかったから、大人達には予想がつか話なのだろうか。

まさか、と、勝手な予想をしている部分はある。無傷であることを条件に雇われた男の台詞を察するに。もしかして、大人の男が大人の女に求めるような何かなのだろうか。そして、もしそれが本当なら、俺はそれを阻んだ者として自分自身を褒めたくて仕方なかった。

「聞いているのか、ロア！」

「……あ。ごめん、父さん。 そんな怖い顔するなよ、ちゃんと要点は、聞いてるって」

「今の反応はあからさまに聞いていなかったただろうがっ！？ 今日という今日は、子供だからって容赦はせんぞ！ お前に危機感というものをしつかりとだな ！」

激昂する父の様子に、横槍に入れるようなツワモノなんて一人しかいなかった。

その人は、「はいはい」と父をいなし、いきり立つ父の肩をなだめるように叩いている。

「貴方。 もうよしなさいよ。 貴方が心配しているとおり、この子だって疲れてぼろぼろなんだし」

存外にも心配してくれている様子な母の言葉に、俺はほっと息をついた。

「しかしだな、ルレッセ！」

父は、至極不満そうな顔をした。

まさかまだ言い足りないのだろうか。

そんな父を、母は無視した。

「はいはい、もうわかったから。 ロアーツ？ お前も休みなさい。 けれど、わたくしとて説教をしないつもりじゃありませんよ。

明日、覚悟しておきなさい」

「わ、わかった。 二人とも、お休み」

一瞥をくれた母の眼の鋭さに怯みつつも、俺はそそくさと退散し

た。

翌朝、予想以上に長かった説教を耐えた後、目覚めたラエルが傷の手当てを受けている様子を、俺は見ていた。

手当てした薬医者が消え、甲斐甲斐しくラエルを世話していた母がいなくなっても、俺はずっと見ていた。

「あ、あの……」

ラエルが居たたまれなさそうに言葉を上げたのを聞いて、俺は口を開いた。

「何か、言うことねーか？」

自然、声が、顔が強張ってしまった。無事な彼女を確認した途端、怒りだけでは無い感情を、俺はどう扱っていいかわからず持て余し、面倒臭くなってそのままにする。

目の前にいるラエルが、俺の怒りを前に、怯えている。

そんなことはわかっていているけれど、どうすることもできなくて。

どう言葉を掛けていいかわからなかった。

「……も、申し訳ありません」

震える声、不安そうな表情。そして、こんなときまで、馬鹿みに丁寧な物言いで、俺は心底腹が立った。

上半身を起こしたままの状態にいるラエルの寝具のそばにより、目の前に立つ。

「ラエルっ！！ お前は馬鹿だ！ この、大馬鹿野郎っ！！」

とびきり大声で一喝して、その勢いそのまま腕を伸ばし、俺はラエルをぎゅっと抱きしめた。ラエルが抵抗するような素振りを感じたけれど、俺はそれを無視した。

文句など聞く耳すら持たないつもりだった。今、確かに俺のそばにいるのだと、感じたかった。

俺はラエルの怪我をしていない方の肩を掴んで、じっと見つめた。

「おまえっ、まさか死ぬ気だったのか！？ 刃物持った男の前に飛び出すなんて……！ 怪我までして！！ なんて、こんな」  
「で、でも！ 主様しゅさまだって、あなただって……」

反論したそうな口振りをしたラエルを、俺はひととき危険く睨みつけて黙らせた。

「あのなあ！ 俺だって、そりゃ、人のこと言えないかもしれないけど……。少なくとも、おまえみたく自分から無謀な真似はしていない！ 武器持った相手の目の前に飛び出すなんて っ！」  
「で、でも……わたしは……っ！」

顔を俯かせて黙り込んだラエルに、俺は、今度はゆっくりとその体を引き寄せて抱きしめた。労わるように、慰めるように。

「頼むから、もう、こんなことしてくれるなよ。俺、本当に……別の意味で、心臓が止まるかと思った」

「……すみません」  
「そういう時は、俺を見捨てていいから！ だから、もう……絶対に……」

俺の腕の中で、ラエルがぼつりと呟いた。

「大丈夫だと……思ったんです」

彼女の声は、いつしか湿り気を帯びている。俺と同じように、鼻をすすめるような音がした。

「……つく、主様が、絶対に助けしてくれるって、そう思ったから」

ラエルの腕が俺の背に回って、ぎゅっと掴まれたような感触がした。

「ごめんなさい。……ごめんなさい、主様」

ラエルを腕におさめて、涙ながらの謝罪を聞いているうち、俺は思った。

これで、なんだかんだいって、今回のラエル失踪騒動は、終わつたに違いないと。

ラエルが無事だったということに安堵しきっていた俺は、ぎゅっと彼女を抱く腕に力を込めて、その安心感を更に味わおうとしていた。

そのときだった。

「邪魔をするよ、ラエル」

声とともに、父が部屋に入ってきたのだった。

「行方不明？」 4 (後書き)

加筆修正しました。 10・4

「行方不明？」5

突然すぎる、父の登場だった。

いや、ただだんに俺が予期していなかっただけなのか。

どちらにせよ、ラエルと抱き合っていたとしかいえない状況だった俺は、飛び退くような勢いでラエルから身を離れた。

ラエルも、慌てふためいたように取り乱していた。

「……え？ レフェルス様？」

いや、ラエルが驚いて声を上げたのはそれだけが理由ではなかった。父は、俺の腕の中から解放されたばかりのラエルに近付いたかと思うと、いきなりその肩を掴んだからだ。

勢いと剣幕はなかったものの、怪我をしていない方の腕が、父に捕らわれてしまった。先ほどの俺のときと同じように。

「父さん！ 一体何を!？」

自分のことを棚にあげ、俺は思わず父を睨み、その手を引っぺがす。そんな俺に、父は一瞥をくれてから、これ見よがしにため息を吐いたようだった。

「ああ、おまえもいたのか、ロア。まあ、良い機会だ。二人に……特にラエル、君に聞いておきたいことがある」

「っえ？」

「げ……!」

ラエルが驚いたように声を上げると、俺が思わずしかめっ面をしたのとは、ほぼ同時だった。

「なんだよ、それ。昨夜の件なら、俺が今朝に話したのとどう変わるっていうんだよ？」

「本当に……おまえは、何もわかっていないな、ロア。事の顛末てんまつによつては全てが変わる可能性だつてあるんだぞ？」

「へ？ どういう意味だよ、父さん？」

父が纏う不穏な気配に、俺は知らず知らずのうちにラエルを庇おうと前のめりになっていた。

「あ、あの……」

ラエルは困つたように戸惑いの声を上げて、俺の後ろ背を掴んだようだった。

俺は俄然やる気を出してその父を見返す風になったが、ラエルのそんな様子を、父が見逃すはずもなかった。

「ラエル。君はあくまでも、わたしにあの男のことを喋ろうとはしないんだね？」

「……わたしは、知りません」

「知らないのも当然だろ！ 何で知ってるヤツなんか攫われなきやならないんだ」

「ロアーツ。おまえは黙つていなさい。……ラエル？ その男自体を知らずとも、他に知っていることはないのかい」

父は、俺の言葉を無視して再度問いかける。俺の後ろから聞こえるラエルの声は不安に揺れていたようだった。

「他に、とは？」

「目撃情報によると、既に一緒にいたと聞いていたが、どうして一

緒にいたんだい？」

「それは……道を、聞かれたので」

「はあ？ おまえ、知らないやつに声掛けられたからって律儀に構うなよな！」

思わず、父から庇っているはずなのに、俺も責める側に立ってしまった。ラエルの間抜けともいえる行動に、突っ込まずにはいられなかったのだ。

そもそも、常日頃から迷子になりやすいラエルには、毎度毎度気をつけるよう言っていることの一つなのに。

「さ、最初は、わたしも断ったんですけど、その人が、しつこくて……。それで、わたし……」

「そのまま、あの空き地に連れて行かれたと？」

「……ええ」

「まあいい。男は、君に何か言っていなかったかい？」

「特に変なことは……」

優しげに問いかけているようには見えないけれど、それはしつかりとした事情聴取のような詰問のようで、常とは違う歯切れの悪いラエルの声は、父の容赦ない追撃のせいだと思えなかった。

「あー！ もう！ 父さんの話はまだるっこしいんだよ！ ねちね

ちねちねちと！ ラエルはもう必要なことは十分応えただろう？」

「勿論。わたしが聞いたことに、彼女は、彼女なりの答えをだし、わたしに話してくれたんだらうね。……『わからない』、そして、『知らない』のだと……」

間を置くように「しかし」と呟いてから、父は真っ直ぐにラエルを見て言った。

「君が言った言葉を、わたしはちゃんと覚えている。あの日、わたしと初めて会った日も、君はそう言っていたね？」

「なっ　！？」

驚いた声を上げたラエルの手が震えたのが、俺にはわかった。

「何も知らない？　聡い君が本当にわからないままでいるのか？　何かを知っていても、話そうとしていないだけなんだろう？」

真実を知らずとも、自ずと、わかってしまったことだってあるんだろっ？」

「父さん！」

これ以上は我慢ならなかった。俺は父を止めようと思い、父を呼ぶけれど、父は俺を睨みつけてきた。

「止めるな、ロアーツ。おまえだつて知らないとは言わせない。この子は嘘をつかない子だから、黙秘しないばかりか、こういった質問のとき、曖昧な言葉しか返さない。わたしたちに情報を与えてくれないんだよ」

「そ。それは……」

父の言ったことには、認めざるを得なかった。

冷静に淡々と言葉を告げる父に、俺は「じゃあ、まさか疑っているのか」と、文句を言うくらいしかできなかった。

「彼女の身の上をそういう意味で疑っているわけじゃない。わたしは、親として心配しているんだ」

「だったら、ラエルの言った言葉を信じるこそが、親だろう！」

「……ロアーツ。彼女の言う言葉だけを信じて、見守っていて、ま

た今回のように何らかの事件が起きてしまったてはどうするといふんだ。攫われてしまつてからでは遅いし、何か起きてしまつてからは遅いと言つことが、何故わからない」

「 だけど！」

「彼女とて、自分の身に何が起こつてゐるか、まるつきりわからなはずがないだろう！ 頭が悪いわけではない。むしろ、良すぎるのだ。何か要らぬ配慮とか、思惑で動いてしまつほどにね。黙秘こそ、その証しじゃないか。『疑わしきは罰せず』？ だからつて、彼女にとつて利点になることなど何一つ無い。だからこそ、話して欲しいんだ！ 一人で抱え込まずに、わたしたちに！」

「レフェルス様……」

ラエルが俺の後ろから出てきて、寝具から降りて立ち上がった。

そして、ラエルはじつと父を見つめた。

父は、その眼差しを受けて、ラエルを見返した。

「わたしには、話せないことなのか」

静かに、そう問つたのだつた。

「行方不明？」 6

落胆した様子の父がラエルの部屋を出て行ってから、俺は宣言した。

「お、俺は、父さんとは違って無理強いはいしないからな！ そりゃ、気にならないって言ったら嘘になる。だけど、俺は……約束は守る。あのとき、おまえが望むから、俺はおまえの主様呼びを甘んじて受けた。だけどそれは、本当に主従関係になるつもりで受けたいわけじゃない。俺がおまえをラエルと呼ぶ代わり、おまえが俺を主と呼ぶ代わりの、そういう取り決めだったと思ってる。だから、仮におまえの主様気取りができるかもしれないからって　俺は、おまえに、無理強いで聞いたりはいしないからな！」

よくもまあ言い切れたと、俺は我に返ってからそう思った。すべてを喋りきったことが我ながら不思議でならなかった。

「でも、でも、おまえがどうしても話したいって言うなら、いつでも聞くからな！」

長い建前の後に付け加えた本心から出た言葉は、思いのほか熱が入りすぎて、それとわかったのだらう。ラエルが、ぷつと吹き出して笑った。

バツが悪い思いで、俺は頭を掻いた。正直、居たたまれなかった。

「ふふ。では、主様？　せつかくですから、わたしにもわかっている『あること』をお話ししようと思います」

「へ？」

驚くべき話の展開に、俺は思わず素っ頓狂な声を上げた。

「い、いいのかよ？」

「別に構いません。というか、大したことがわかっているわけでもないんです」

「だ、だけども……」

俺が思わず口ごもったのには理由があった。そう、いつぞや、大したことじゃないと言って、彼女が俺に秘密を明かしたとき、世にも珍しい輝きを放つ髪色を明かされたのではなかっただろうか。だから、ラエルのいう「大したこと」に信用がならない気がして、俺は気が気ではなかった。

「ほら、わたし、ラエルって、あの日、名乗ったでしょう？」

「……あれ、多分、嘘なんです」  
「なっ　！？」

俺の「やっぱり」と言う驚きの言葉は、言葉に出来ないまま、俺の口の中から消えていった。

（　結構、重大だろうが、それは！？）

けれど、頭の何処かで、ラエルがこんな嘘をつくはずがないと、俺は思った。

以前の夜、証しだと言って見せてくれた髪の話も『俺に伝えたいことの一つだから』と言って、彼女はこんな風に場を設けてきちんと話してくれたのだから。

「　　というか、わたし自身が何者かわからないんですよ。多分というのも、断定できないからであって……。ふふ、嘘も嘘。名無

しのゴンベさんとはよく言ったものですよね？」

ラエルは、続けざまに言う。俺とラエルが出会ったあの瞬間のことを。街の自警団の男たちの前で、名を明かしていたときのこと。ラエルの言葉に、俺も思い出していた。あの子の彼女のこ  
と。

「いつともわからない思い出の中で、わたしは、ある名前で呼ばれていました。恐らく、『ラエル』と、呼ばれていたのです。自警団の方に問われたとき、名前と思いつくもので、唯一わかることがそれだった。そう呼ばれていた記憶があったから、多分、名前だろうと、そう思っただけで。……今はともかく、あの瞬間、それを名前と自覚するまでの間、わたしは、ラエルではなかったのに。でも、何もわからないから、あの子はそう言うしかなくて。おわかりですか？ あの子にしろ今にしろ、わたしは、わたし自身は、自分が何者なのかすら、知らないということなのです……」

ラエルは困ったように小さく微笑んでいる。まるで笑うしかないのだと誤魔化そうとしているかのよう。

でも、俺にはそれが、寂しそうな笑顔にしか見えなかった。

「嘘ばかり、わからないことばかりのわたしは、いつも思うのです。ここについて良いのだろうか」と

言い終えてからもう一度、ラエルが笑う。先ほどとは違う微笑みを、俺に見せようとしている。

でも、その頑張って笑おうとしている彼女のことを、俺にはわかってしまった。

「ラエル……」

偽ってまで、笑顔を見せずともいいのに。

俺は無理に笑ってまで本心を隠そうとするラエルに、一瞬の間、声を掛けるのを迷った。その理由などは無く、ただ単に、どう言葉を掛けて慰めていいものかわからなかった。

そのとき、くると、ラエルは俺に背を向けた。まるで俺の視線から逃げるように背けた少女は、その身を抱くようにして、彼女は彼女自身に呪いの言葉のろいを吐く。

「主様も、そう。レフェルス様も、ルレッセ様も。皆さんが優しくして下さるからと言って、わたしは、甘えてはいけないのに。これ以上、あなた方を巻き込んでしまったら、わたしは……っ」

その言葉を聞いた瞬間、俺ははっとした。激しく後悔するとともに、先ほどまでの自分を責めていた。恥ずかしかった。どうしようもなく。どうして、何故迷ってしまったのだろう。

「ラエル……」

いつも謙虚で、時に皮肉な喋りをするけれど、その根は優しすぎる少女。自分が何者かもわからないなんて、彼女自身が何より不安だろうに、他人を心配しようとするそんな少女。

（ 迷うなんて！ 俺は、どうして、躊躇ためらったっただんだ！ ）

俺は衝動のまま彼女をその背から抱きしめた。

「え、主様……！？ な、何を？」

「おまえはあの約束のこと……一度でも忘れたか？」

ラエルと出会ってから、一年が経ったあの日、誓った約束。ほぼ契約ともいえそうな誓いのことを、俺は口にする。どこか、祈るような思いを込めながら。

「っ！ 忘れるはず……ありませんっ」

ラエルの言葉に、俺はラエルに知られぬようこっそりと息を吐く。

「おまえが覚えているなら話は早い。……でも、俺は、何度でも言うし、何度でも誓う。俺がおまえに主と呼ばれる限り、俺がおまえをラエルと呼ぶ限り 俺たちは、ずっと一緒だ。それがあある限り……これからも、そうだろう？ ほかのことなんて気にするなよ……」

抱きしめた彼女の体が、震えた。伸ばした手を、掴まれる。俺よりも小さな、彼女の手に。

「あなただけは。 主様は、いつもわたしを……ラエルと、そう呼んで下さるのです。 主様だけが」

それから、たった今気付いたと言わんばかりに戸惑った声を上げた彼女は、一度窮屈そうに身じろいでから、器用に俺の腕の中でその体の向きを変えて後、今、晴れ晴れとした顔で俺を見ていた。

たとえ、その声がいささか頼るモノ一つ無いかのように小さく心細い声だったかもしれないけれど、ひとまずとはいえ、俺は彼女がそんな表情を見せてくれたことが嬉しかった。

笑顔を浮かべて微笑むラエルの姿をずっと見ていたいと思うのに、俺はどうしてだか胸がむずむずして直視できず、ふいっとそっぽを向いた。

「っ……あ、当たり前だろ！ おまえは、昔から……たった一人の、ラエルなんだから……」

俺の腕の中でうんうんと頷いて見せる少女が、俺にはどうしようもなく愛しく感じられた。

「行方不明？」 7

怪我人に対して長々と話してしまったバツの悪い思いから、早くに休むように言ってラエルの部屋を出た俺は、自室へと戻ろうとした。

しかし、俺の目の前には、いつの間にやら、父の姿があった。

俺が驚いて声を上げる暇もなく、その父が言う。

「まさかとは思うが。……ラエルに、如何わしいこと、していないだろうな？」

よりも寄って、その話題なのか。

思わず、何度この腕で彼女を抱きしめただろうと回想してしまった。

「変な言いがかりはよせよな、父さん」

内心の思いは別として、俺が精一杯捻くれた声を出すと、父は一層不機嫌そうな顔をして俺を睨みつけてきた。

「ふんっ！ まったく、おまえは何も知らぬくせに。いい気になりおって」

父は、ぶつぶつと呟きながら歩き出した。

俺も、歩き出す。父の背について行くように歩くうちに、父が酒瓶を手にしているのが見えた。

「ラエルが危険に晒されているときでも、迷子になっているんだろうとか、阿呆みたいなことを暢気に考えていたくせにっ！ ラ

エルも何故、わたしより我が息子なんかを頼りにしているのだろうか……」

驚きに息をのみ、凶星を指された俺は、啞然と父を見返した。

「父さん……それ、あのときも言ってたな。一体どういうことなんだ？」

歩きながらの会話は続く。聞き咎める者などいるはずもないのに、自然、その囁き声は小さく小さくなっていた。

「……おまえの前で、ラエルは何回迷子とやらになった？」

「覚えてるだけで、10回以上。……その分だと、もしかしてただの迷子じゃなかったのか？」

「何が迷子なものか。 どうせ、この間の男のような者が、誘拐未遂でも起こしているんだろうよ。ここ最近の、傭兵かぶれの不法撤去率は異常すぎるのだ。侵入者被害も。 先に言っておくが、この街は元城塞都市だ。ただの平野の街ならば、とっくの昔にラエルは連れ去られていただろうな」

「そんな！？ ……それじゃあ、父さん。母さんはともかく、ラエルにまでそれを話さなかったのって……」

父と俺との歩みが、止まる。丁度、俺の部屋がある場所まで辿りついたところだった。

父は、俺の部屋の戸に手を伸ばしつつ、苦笑う。

「それに気付いてこそ、だな。薄暗いその事実をわたしたちに知られたとあらば、頭の言いラエルの行動なんて簡単に想像がつく。よくて家出か、最悪、人知れず街から飛び出して行ってしまふというところだろう。……おまえは、もう、絶対にラエルから眼を離すな

よ。これは一家の父としての命令だからな」  
「……わかった。肝に銘じとく」

昨日と言い今日と言い散々な目に合った。ようやくと俺は心休まる自室へと戻ったというのに、全然安らげそうにも無かった。

カウチに腰掛けてから、俺は知らず知らず顔を俯かせたまま考え込んでいた。

それだけ、心は別のことに捕らわれていた。どうしようもない恐れが、俺の身を襲うかのようにだった。

ラエルという少女の存在から切り離せない、深い謎、得体の知れないその何か。

もしかしたら、俺の想像もつかないようなわけありの人間である可能性も無いとはいえなかった。

（たとえ、そうだとしても、俺が彼女にしてやれることなんて、ただ一つだ）

（たとえ、ラエルが何者であろうとも、何の事情を抱えていようとも）

「ロアーツ」

「え……。あ、何？ 父さん」

考え込んでいた俺を呼ぶ声に俺が顔を上げると、いつの間にか俺の向かいのカウチに腰掛けていた父が、穏やかな微笑を浮かべて俺を見ていた。

「今更ですまない。……無事でよかった。おまえも、ラエルも」

父の劣わるような言葉に、俺は自然頬を緩めようとして、強張った表情をしていたことに気付き、俺はぎこちなくではあるもの笑ってみせた。

「……うん。心配かけて、ごめん」

「だが、子どもだと思っていたおまえが、賊相手に勇敢にも立ち向かうとはな！ よし、おまえも立派な大人の男になったというわけだし、今日は存分に飲もう！」

父は勢いよく言い放ち、酒瓶を机において、立ち上がりざまグラスを取り出している。部屋に運良くグラスが二つもあることを悔いたところで、もう遅かった。

父は、恐ろしいほどまでに酒に強いことで有名だった。

「っげ！？」と、父さんと？ ほどほどで勘弁してくれよー？」「何を言う。酒を前にして怖気付くなど、我が息子ながら情け無い。どれ、今夜はわたしが直々に酒の力を手ほどきしてやってだな……」

なみなみと注がれていく赤い液体を前に、俺はこれみよがしにため息を吐いて見せた。

「大人になっただの、まだまだ子供だの、都合いいこといいやがって……！」

けれど、父の言う親心とやらがわかった気がして、俺は温かな気持ちになったのだった。

## 「十六夜へいざよい」の月」1

酔いつぶれたのは、父の方が早かった。

珍しいなと思ったが、恐らく昨日の誘拐未遂事件の騒ぎで睡眠が足りていなかったのだらうと思ひ直して、父をそのまま寝かせておくことにした。

俺は、そつと自室を抜け出して、まず、とある場所に向かった。見つけださねばならないものがあつた。

しかし、彼女がいつ落としてしまったのかは知らないが、俺がそれを発見してから丸一日が経っている以上、もう無くなつてしまつていてもおかしくはなかつた。

不吉な不安に駆られたものの無事目的のブーツを見つけ出して俺はホツとして帰路に着いたが、自分の部屋に戻るうとはしなかつた。

そう、俺は今、ある事情から、ラエルの部屋に忍び入ろうとしていた。

断じて邪な理由ヒトシマからではない。いっそ、それは寝てしまつている父にも断言できることだつた。

とはいえ、まあ、出来たら父を通したくはなかつたから、父にはばれないようにひっそりと忍ぶことにしたのだけれど。

ラエルに返しそびれていた腕輪を持つて、俺はいつぞや無茶をしたときのように、なんとか天井裏に這い上がつていた。屋根裏部屋の真下にあるラエルの部屋に、向かおうとしているのである。

(なんか、泥棒みたいだな……俺)

ふと思つたが、俺は気にしないことにした。金目のものも『花』も盗まないつもりなのだから、泥棒ではないだらうと高をくくつて。果たして、寝てしまつているだらうラエルにどうやってこの腕輪を渡そうかと考えていると、屋根裏部屋についてしまつた。

天窓から覗く十六夜の月が部屋を照らす中、なんと、そこにはラエルがいた。ラエルも驚いたように俺を見ていた。

「主様？　なんで……」

「これ、渡すのすっかり忘れてたんだ」

言うてから、手に腕輪を乗せて差し出すと、ラエルの眼からぼたりと涙が落ちた。まるで感極まったかのように。

「腕輪……っ！　これを何処で？」

「抜け道に入る前の下町の近くに、落ちてたんだ。だから、おまえの行く先がわかったんだけど、俺、おまえを追っかけていくときにそのまま置きっぱなしにしてたからさ。さっき思い出して、慌てて拾ってきたんだよ」

あまり街の人たちには知られていないが、ラエルの腕輪は、ラエルが街に来たときから身につけている代物である。街に来た当初にしろ、常日頃身につけている学舎の制服風の長衣を着ているときにしろ、見た目にはわからないが、同じ家で生活する者として俺はそれを知っていた。多分、父さんも知っているだろう。

明日になってから返せばいいとは思っていたけれど、涙を流してまで腕輪を抱きしめている様子の彼女を見ると、やっぱり無理をしても渡しに来て正解だったなと俺は思った。

「ありがとう、ありがとうロア様！　この腕輪、わたしの唯一の持ち物で、宝物で。大切なものなんです」

「ああ、もう泣くなって」

つい呼んでしまったのだろうか、俺のあだ名を呼んでくれるラエルの姿を見ていると、俺はたまらなく嬉しくなった。

万が一を恐れていた俺にとっては、目の前に彼女がいると言っただけで幸せだった。一時は死を覚悟したのだからこそ。

「おまえが大事にしてるって知ってたから、道に置き去りにしたくなかったんだけど、あのときはどうしようもなかったんだ。万が一の目印代わりだったし。許してくれよ？」

「あのとき、わたし、何故攫われたのかわからなかったの。でも、これで謎は解けた。腕輪を落としていたからなんですね？ ああ、良かった。本当によかった……」

「え？」

ラエルの意味する言葉の違和感に突っ込む間もなかった。

安堵する彼女が、腕輪を手に取り、いつもの場所、右腕に取り付けようとするその瞬間だった。月光を浴び、美しく銀色に光る細工が、月光ではない輝きを受けて光ったように俺には見えたのだ。

「嘘……、どうして？」

呆然と呟く彼女の声がしたと同時に、俺には何も見えなくなっていた。

カウチの上で横たわっていた俺は、ぱちぱちと瞬きを繰り返していた。

何が起こったのか、わけがわからない。

ただ、胸騒ぎだけが増していく。

「ごめんなさい。わたし、わたしは、従わなければ……」。

空白の思考に、突如ラエルの言葉が蘇ったような気がした。

(何が、だよ。ラエル。おまえはいつも謝ってばかりだから、何のことなのか……)

こっぴどなつてしまった以上、これが、わたしと、あなたのため…  
…きつと、そうなのです。

(だから、何が )

その瞬間、俺は我に返った。

( 今、何時なんだ！ )

はっとして窓を見て、俺は驚愕する。闇夜を照らすのは、ついさつき見たような気がする。十六夜の月だった。

(満月の日が、誘拐未遂事件の日。無事なラエルの姿を確認して、父さんと事件の真相を話した日がその翌日で、その後でラエルの部屋に向かった。つまり、十六夜の月の夜に、俺は腕輪をラエルに返したはず……)

(そう、あの腕輪が、光ってから、俺は ?)

俺は、今、俺の部屋のカウチに横たわっていることに気付いた。  
あるとき、俺は、屋根裏部屋にいたはずなのに。

どうして俺は知らぬ間に移動しているのだろう。  
嫌な予感と胸騒ぎは、止むどころか広がっていく一方だった。

「ラエル!!!」

俺は、邸を飛び出した。姿を消した彼女を取り戻すために。

目にする人全ての人が眠りについていた。深夜と言う時間帯だからではない。不寝番のはずの自警団の連中ですら、道端でばたりと気を失っているようだった。

俺は、必死になって街を駆ける。彼女が迷子になるたびに、俺はこつして街を駆け回って彼女を探してきたけれど、今回ばかりは樂觀できずにいた。

彼女は、自ら、街を出ようとしているのだと、俺は気付いてしまった。父の危惧していたとおりのことが起ころうとしていたのだ。

(どつして　っ)

このまま彼女を逃がすわけには行かなかった。あの約束を無かったことにしようとする彼女に、俺は、直接、文句を言わねば気がすまなかった。

たどり着いた先、街の唯一の出入り口である跳ね橋が見えなかったことに、俺は驚愕した。

いつもならば上げられているべき橋が、下ろされている。街外門と呼ばれる、その門戸により閉ざされているはずの外の世界が、街を囲む城壁の片隅から、ぽっかりと見えている。しかも、跳ね橋を守る詰め所の門すら開いているのがわかった。

近付いていくと、無人であるはずも無い自警団の巣窟にばたばたと倒れている男たちの姿があった。　橋、門、自警団の男たち。その全てが全て、彼女の行く手を阻むためにあるはずなのに。

街の外へとゆっくりと歩いていく一人の少女は、遠目からでもわかるほど、左の腕に輝きを宿らせていた。

俺の記憶が途切れた現象の理屈なんてわからない。けれど、この状況でその原因が何かなんて、わからないはずもなかった。

（クッソ、やっぱりあの腕輪か！）

「ラエル!!!」

声を限りに叫んだとき、少女の歩みが止まった。

ゆっくりと振り返った少女の顔は、俺の記憶が閉ざされる前と同じで、涙に濡れているままだった。

「十六夜へいざよい」の月「1」（後書き）

加筆修正しました。 10・4

## 「十六夜へいざよい」の月」2

「主様……」

追いかける俺は全力だったし、逃げる側のラエルがとぼとぼ歩いてたせいもあって、俺はなんとか彼女が跳ね橋へと歩む前の間一髪で、その腕を掴み取ることが出来た。

けれど、その瞬間、ラエルの悲鳴が上がった。我知らずその腕を掴む手に、力を失いそうになるけれど、何とか思い直して掴み続けた。

ラエルは取り乱してしまっただかのように俺の手を振り払おうとする。華奢な彼女の抵抗なんて何のその、びくともしなかつたけど、俺はわざとよるめいたフリをして彼女を掴む手を離し、そのどさくさ紛れに彼女の体ごと腕で抱きすくめることに成功した。これで、彼女はどうかあっても俺の手からは逃げられないはずだった。

この、俺とラエルとの攻防の合間にも、その腕輪は鈍く光り続けている。彼女を完全に捕らえた今、いつ、先ほどのようなことが起こっても不思議ではなかった。

「ああ……とうとう、知られてしまいましたね」

ラエルが、震えた声で言う。最早彼女は諦めてしまったかのように、俺に抵抗していない。

俺は何と言って良いのか迷ってから、それを認めた。

「そりゃ、たった今身に起こったことくらい、わからなかったらまずいだろ？ 前後不覚になったわけじゃないんだし」

ぎゅっと抱く腕に力を込めて、俺は言った。

「おまえが望むのなら、それを使うのもよし、俺を説得するのもよし。いずれかの手段で、この腕を振りほどけばいい」

「そんな　っ」

ラエルの困惑声を俺は無視した。

「俺は、絶対におまえを逃がさない。　さあ、どうする？」

やがて、大人しく俺の腕に収まっていたラエルは、先ほど大事そうに嵌めた腕輪をおもむろに外してしまった。

「……ひどい人。わたしがあなた相手に使えるはずが無いと、知っていたらっしやるんでしょう？」

記憶の途切れる前、意識が薄れていく合間に耳にしたラエルの声は、いずれも彼女自身が意図してした行為ではなく、何者かの指示に従おうとする彼女の躊躇ためらいがわかったからこそ、俺は、全力で彼女の行く手を阻もうとしたのだ。

俺の背に彼女の腕が回ったと同時に、カランと音がした。軽やかな金属音。見れば、足元にころころと転がる彼女の腕輪があった。

「ラエル、落としてるぞ？」

「落としたんですよ。　あなたがそうさせたんでしょう？」

俺とラエルの会話の合間にも、腕輪は明滅を繰り返していたが、やがて光は途絶えた。

俺は、俺にとっての危機を脱したと判断し、身じろぐ彼女に促されるままに腕を解いた。

ラエルが、俺より少しばかり離れてから、俺を見上げてくる。

「迷いがわたしを躊躇わせ、選択を求めています。あなたをとるか、あの声に従うべきか」

「『あの声』って?」

足元に転がった腕輪を拾ったラエルは、それを手にして呟いた。

「この腕輪は、ある人が下さいました。肌身離さず持っているらと命された理由を知ったのは、初めてわたしが『迷子』になった日のことでした。そして、満月の日。主様、わたし、満月のたびにこの腕輪と『交信』していたんです。その日その時間だけ、腕輪から聞こえてくる声の人と、話をしていたんですよ?」

明かしてくれた腕輪の秘密に、俺は「そうか」と呟いた。

「だから、ずっとそれを持っていたんだな。……旅をしてきたおまえの、唯一の武器か」

そして、いつぞやに語った、月についての話も頷ける。

月を見て、闇夜を照らす唯一の光だと、彼女は言った。

もしかしたら、心細い外の旅の間中、彼女は腕輪から発する声だけを頼りに、道行く道を流離なまじりっていたのだらうっか。

ならばきつと、月は彼女にとっての救いなのだ。だから、月の見えるきれいな場所を邸の中にも求めていて、屋根裏部屋に繋がる俺の部屋を望んだのだ。

「……やっぱり、主様は、わたしの突拍子もない話を信じて下さるんですね?」

ラエルが、声と言葉だけは嬉しそうに、表情は悲しそうにま、言った。

「わたしを……罵ってくればいいのに。胡散臭いやつだと、責められてもおかしくは無いのに……」

手にした腕輪ごと体を震わせて縮こまらせている彼女に、俺は近付いて、その腕輪を取って元通り左の腕につけてやった。

されるがままのラエルが、俺がはめ込んだ腕輪を見つめて、呟いた。

「昨夜の交信はできませんでした。今までに無い初めてのことでした。そして、今日、わたしの手元にこれが戻ったとき、腕輪は突然あなたを眠らせてしまった。そして、街中の人を同じように眠らせてしまった。きっと、そんな無理なことをしたら、いくら魔術に長けた人で全盛期の秘具であるこの腕輪だって無事に済むはずが無いのに。でも、腕輪が言いたいことなんてわたしにはいやとでもわかりました。街を変えろと、住む場所を変えろと言ったのが、わからないはずじゃなかったんです」

でも、わたしは。

囁いたラエルが、また、涙を流した。

「ごめんなさい。わたし、あなたを騙すようなことをしている。……あなたを利用して。でも、わたしには、もう、戻れないの。この街から出て行くことなんて出来ない。たとえば、命の恩人である腕輪の主が何を望もうと、わたしにはあなたがいない日々になんて、もう戻れない」

涙する彼女を安心させてやりたくて、俺は腕を伸ばし、彼女の背

を撫でた。

「もう、そんな風に考えなくていいから……」

静かに涙するラエルを、俺はずっと慰めていた。

## 「満ちる月」 1

あれから一月が経って、次の満月の夜を迎えた。俺は気が気じゃなかったが、何とか平静を保とうと必死になっていた。

あの十六夜の夜、彼女が打ち明けてくれたことが真実ならば、今頃、腕輪は彼女に交信を求めて光り、彼女もその声と言葉を交わすはずだったからだ。

やっぱり、あの屋根裏部屋で話をするのだろうかと思つていたら、ラエルが俺の部屋にやつて来た。その手に、光る腕輪を持つて。

「腕輪が、あなたと話がしたいと言っています」

俺は苦笑してしまった。なんだか、ラエルの言い分がおかしかった。

話が見たいというのは『腕輪の主が』であつて、『腕輪自体が』ではないだろうに。

少し仏頂面な顔をしているあたり、ラエル自身は気が進まないことなのだろうか。

「主様。わたしは席を外しますから、後で屋根裏部屋に来てくださいね？ 話をしたくないのならそれで構いません。わたし、待つてますから」

ラエルはそう言うと、腕輪を置いて行つてしまった。

俺の目の前には、俺の机の上で不気味に明滅を繰り返す腕輪が一つ。

どうしたものかと思つてみると、腕輪が身震いするかのよう地震え始めた。その振動音が机に伝わり、思つていたよりもがたがたと

音がしたので、俺は思いがけず声を上げて驚いてしまった。

「び……びっくりした」

「おまえが、主様しゅさまとやらか」

振動が止む。震えが止んだとともに腕輪から発せられた謎の声は、どうやら男の声のようだった。

やはり腕輪と言う金属を通しているからなのか、少しくぐもったような、反響した後のような声で、人とは思えないほど低い声に聞こえた。

さて、こう言うては変になるが、『声』とは、まるっきり初対面である。なのに、その声の男が、俺を迷い無く『主様』と呼んだ以上、俺について何かしら彼女から聞いていることを意味していた。その、俺のことをある程度以上知っていきそうな男の声が、言う。

「あの者の言葉を思うなら、我が声に応え、名を名乗って欲しい」

まず、何と答えていいものか、と俺は思った。そして、何を聞きたいのだろうとも。

そもそも声の敵かな言い方に何も思わないわけではなかったが、ラエルはこの声のことを命の恩人と称していた。そして、旅に送り出してくれたとも。となると、どう考えても、俺たちの出会いのきっかけを作ってくれたのは、この声の持ち主である腕輪の主に違いなかった。

ラエルの救い手に、俺は、試されているのかもしれない。こんな、見えない相手と言葉を交わすと言う、ありえない現象を用いられてまで。

「俺は、ロアーツ。ロアーツ＝リーグル。歳は十二。一年前、彼女が街にやって来てからずっと、彼女は俺と両親達と一緒に同居して

いる。俺が彼女の主みたいなことになってるけど、あれはただ、彼女が俺を主と呼びたいと言ったから言わせているだけで、俺は俺で彼女のことをラエルと呼んでるんだけど……」

彼女がどう俺のことを話しているのかは知らないが、俺が本心そのままにラエルとの関係を言つと、やがて声が考えるように唸りを上げて、沈黙の後に言った。

「偽りは？」

「いや、まったくくないけど？」

即答すれば、声が笑った。

「そうか、わかった。おまえと、彼女を……『ラエル』を信じよう。待てるときまで、我……いや、わたしは待つ。本音を言えば、一度彼女の身柄が危ういと感じた時点でその街に滞在を許したくは無いが、致し方あるまい。わたしの代わりに、『ラエル』を頼むぞ？」

声がそれを言い終えた途端に、腕輪の光は途絶えてしまった。思っていたよりも、その交信はずっと短かった。

腕輪を手に屋根裏部屋に向かえば、天窓から覗く丸い月を見上げていただろうラエルが、不安そうに俺を見つめ返してきた。

「どうでした？」

「どうでしたも何も短かすぎたよ。俺、名乗っただけだったし」

言いながら、腕輪を渡す。ラエルはそれを受け取って、すぐさま左の腕に取り付けた。

俺はラエルの隣に立って、月を見つつ、気になっていたことを尋ねることにした。

「なあ、腕輪の主は俺のことを知っていたみたいだったけど、一体どう説明してるんだ？」

「え！？ ご、ごめんなさい、主様。そんな、勝手なことは喋っていませんよ？ 聞かれたことに当たり障りない程度に答えたと言うか……」

「いや、俺もそういう意味で聞いたんじゃないけどさ……」

（俺のことを命の恩人様にどう称してくれたかなんて、気になつて仕方ないけど……正直に話してもらうのも、なんか怖いな）

おどおどして、俺を見上げるラエルに、俺はこっそりため息を吐いた。

（まあ、いいや。なんにせよ、その恩人様とやらは、俺に『託す』と言って下さったんだしな）

（でも、あの台詞は……）

「『待てるときまで』ってのは、意味深だよな……」

俺の呟きに、ラエルが不思議そうな顔をして尋ねてきた。

「主様？」

「いや、こつちのことだ。にしても、あの腕輪、本当に何でもありなんだな。さっきのこととはいえ、あの日父さんがぐっすり寝付いちゃったわけもよくわかったよ。『声を届ける』なんて、そん

な、すごい代物があつたんだなあ……」

「魔力を宿した腕輪だそうです。わたしには詳しいことがわからないのですが、ある程度魔力を持つ者、魔術に長ける者なら扱えるらしいのです。声の主曰く声の主は後者で、わたしは両方らしいのですが」

一瞬、聞き間違えたかと思つたが、ラエルは真面目な顔をして俺を見ていた。

俺の反応も当然だと頷いていて、その目が「信じる」と語っているかのようだった。

この世界に、いや、今の時代に、そういった類の『魔のものは現存しないとされているが、その存在が完璧に否定されているわけでもない。

要するに、魔法も、魔術も、魔の力も存在はするらしい。しかし、滅多にお目にかかれないものはずなのだ。

「ラエル、おまえ……頭の良いおまえが魔術なんてものの知識があつたつて不思議じゃないつちゃ不思議じゃないけど……魔力自体もあるのか？ 冗談だろ？」

「わたしに言わせれば、魔力にしる魔術にしる、持っていないに決まっています。……ですが、皮肉なことに、不審者を撃退する程度にはこの腕輪をちゃんと扱えるんです。昔のわたしはすごいでしょう？ たつた一年前なのに、こんな武器一つで、一人で旅していたなんて」

他人事のように過去のことを振り返るラエルに、俺は笑った。

「そのことなら、もう心配しなくてもいいだろ？ もう、旅する必要なんて無いじゃんか」

「　　そうですね。わたしにはロア様がいますもの」  
「へ？」

茶化した言葉なのに、思いがけず早い回答だった。俺は咄嗟に答えられず、ラエルを見た。ラエルも、俺を見ていた。

俺は、半ば混乱していた。ラエルのそんな身の変わりように。何かがおかしい。

「眠いのか？　まさか、俺を待っている間にこっそり酒でも飲んだのか？　連日の騒ぎに体が参っちまったのか？」

「いいえ。別段いつもと変わりませんわ、ロア様」

ラエルは、俺の戸惑いを見て、楽しげに笑っている。

「だって、おまえ、いつもと全然　　」

違和感を感じるのだと言おうとして、俺はそれをラエルに止められた。

「　　っ！」

遮られたんじゃない。少女の手が俺の口元に当てられていて、俺の発言を押し留めたのだ。

## 「満ちる月」 2

「なんだか……ずっと、心がふわふわしているんです。頭巾のことも、名前のことも、腕輪のことも。わたしが故意に隠していた秘密を、ほぼあなたに話すことが出来て、身軽になったと言っか」

微笑を浮かべるラエルが、おどけたように肩を竦めて見せた。

「これでも、さっきまではずっとびくびくしていたんですよ？ 一番秘密にしていたかった腕輪のことを話さなくてはいけなくなってしまうんですから。しかも、突然腕輪の主である『声』までも、あなたと話がしたいと言ってきて……、どうすることもできないわたしは、どんな思いで、あなたに腕輪を渡さなければいけないかっただか……」

そう言ったラエルが、俺に凭れ掛かってきた。

ふわりと漂う匂いがする。ラエルが、俺のすぐそばにいる。

「ど、どうしたんだよ？ ラエル!？」

凭れ掛かってくる体を起こそうとして、彼女の肩を掴む。しなだれかかってくる彼女が、俺の体に手を当てて、緩く頭を持ち上げるように俺を見上げた。

不安げに揺れる目に、俺は釘付けになった。魅入られたように動けなくなってしまう。

「わたしってば、何を心配していたんでしょうね？ あなたは、いつもわたしを受け入れてくれる。こうやってわたしを甘やかして、優しくしてくれて……守ってくれているのに」

俺にしがみついた状態のまま、ラエルは囁いた。

「ねえ、ロア様？ 本当にわたしを一度でも疑ったことは無いのですか？ 利用されていると感じたことは無いのですか？ こんなに身勝手に我侷なわたしを、どうしてそばに？」

「ラエル。だから、そんな風に考えるなって、俺は前にも言っただろう？ それに、おまえがおまえ自身を傷つけるようなことを言うんじゃない」

「いいえ、紛れもない事実です」

頑固な意思を感じた俺は、ため息を吐いてからそれを言った。

「じゃあ、おまえ、『主』である俺の言葉を疑うのか？」

効果はてきめんだった。

あえて主であることを前面に答えれば、ラエルは一瞬呆気にとられてしまったかのようにぽかんと口を開けていたかと思うと、「ですが、でも」と言い募ってくる。

「あの日、誓っただろう？ 『おまえが俺のそばにいる限り、おまえはラエルなんだ』って。……それで、十分だろ？ おまえがラエルでいるために必要なことなんて」

「っ」

厳密に言えば違うけれど、ようは解釈次第で、あの誓いはその意味取することも出来るはずなのだ。

「言っておくが、俺は、おまえが望むままになすがまま約束をしたわけじゃないからな？ ちゃんと、俺にとっての利点<sup>メリット</sup>だってある。」

「じゃないと、不公平だしな？」

俺はラエルに見せ付けるようにして、にやりと笑った。  
すると、ラエルの目が瞬いたように俺には見えた。暗い悲しみに  
堕ちていた眼が、輝きを取り戻すかのように。

「本当？」

「ああ」

「このわたしを受け入れることで、あなたに、利点があるの？」  
「だから、あるって言ってるだろ？」

根気良く諭してやれば、ラエルはふと押し黙った。

「……わたし、あなたこそそばにいたい」

「知ってるよ。もう一年も前に」

出会った日の翌々日に、ラエルはそう言っていたのを、俺は確かに覚えている。

「……………主様じゅさま」

ラエルが俺を呼ぶ呼び名が元に戻ってしまった。けれど、それは常の彼女に戻ることを意味していることだったので、良い傾向であると俺は思った。

満月の光を受けたラエルが、俺を見上げて、言う。

「祝福を」

「へ？」

囁く声が聞こえなかった。

俺が聞き返そうとすると、ラエルが、ゆっくりと囁いた。

「あなたの望む場所に祝福を……」

「はあっ!?!」

(何を言い出すんだ、コイツは!?)

驚くしかない俺に何を思ったのか、ラエルが顔をしかめて、悲しそうに顔をしてみました。

思わず、罪悪感を感じてしまいそうになる。俺は突然すぎる発言に対してただ当然の反応をしただけなのに。

「おまえ……俺を試してるのか?」

苦し紛れの俺の言葉に、てっきり策士めいた顔をするのかと思ったら、ラエルは不思議そうに首を傾げただけだった。

「試す? わたしがですか? しかも、あなたに? ……そんなはず、あるわけないじゃないですか」

依然突拍子もつかないことを言う彼女に、俺の思考は置いてけぼりを食らっているままだった。

とにかく、意図がつかめないのだ。

「どうしてだよ?」

「だって、主様は……あなたは以前、わたしに別の場所をと仰ったでしょう? わたしに望んで下されたでしょう? わたしがあなたの望む場所にしたほうがいいのですか?」

あのときの申し出をしつかりと覚えられていて、俺は思わず頭を

抱えたくなくなった。

（ あー、言ったさ！ 言ったとも！ だから、どうした！ ）

「あときは勢いで言ったただけだ！ だから……」  
「だから？」

潤んだ目をしてラエルが俺を見上げてくる。俺はそれをまともに見てしまった。

体の全感覚が、目の前にいる少女のことを探ろうとする。

縋る柔らかな体、間近に見てしまった彼女の瞳。その全てが、俺を追い詰めていく。

「っお……おまえこそ、どう思ってるんだよ？」

「え？」

「おまえを受け入れている俺のことを、たった今利点と言った俺のことを、どう考えているんだ？ 多大なる感謝があるから なん  
て考えていたら、後悔するぞ」

呟いた声は我ながら低く掠れていた。

俺の問いかけに、間を置いて、ラエルが答えた。

「後悔なんて、しません。あなたが望むのなら……」

### 「満ちる月」 3

後悔しないと云ったラエルの声は決して震えてなんかいなかったから、俺は両手を彼女へと伸ばした。手を細い腰に当て、もう片方の手は後ろ頭へと。

そんな俺の行動の意味するところをわからないはず無いだろうに、ラエルは何も言わず、大した抵抗も拒否行動も取らなかった。

「俺を止めないんだな？」

言葉で確認したら、ラエルの眼が揺れたけれど、結局ラエルは何も言わなかった。俺がおもむろに頭巾の紐をほどいても、それは同じで、ただその体がびくりと震えた。

見ると、ラエルの髪は一月以上前に見たときと違っていた。一月そこらではその長さに変化は無かったようだったが、前よりも、全体的な色合いが薄っすらと茶色に近くなっていたのだ。

髪色が変わってきていると言ったラエルの言葉は本当だったらしい。移ろい行く色の髪は、まるで、その身をもって空の情勢を変化させていく『陽の色』のようだと、俺は思った。

俺はその陽の色に手を伸ばし、ラエルの頭を近くに寄せてから、頭巾に隠されていない晒された耳元にゆっくりと囁いた。

「目を閉じていろ」

そう言うってから、俺は、思うままにラエルに口付けた。

ラエルがどう答えようと、どんな反応をしようと、本当は構わなかった。

後悔すればいいんだと、俺は思ったから。ラエルだって、この俺自身だって。

このままでいたいと願っているくせに、結局、変わってしまう。……変わろうとしてしまう。

何度も何度も重ねて、角度を変えて、追いかけて。

やがて俺は、名残惜しみつつもラエルから離れた。

一応、口付け<sup>キス</sup>だけをした。きわめて安全で、健全なものだけをした。それだけだった。ただ、正確に言うのなら、その祝福<sup>キス</sup>の類が『想い合う男女』のみに許されたものであり、俺たち二人には適切では無かった、というだけだ。

そして、俺はまだ、ラエルの身柄を解放していない。密着していた距離をそのままに、俺はラエルの腰に抱いた腕の力を緩めなかった。

ラエルの頭を俺の肩に預けるようにして、その髪を掬う。さらさらとこぼれる感触が心地よくて、無意識にそれを続けていても、ラエルは何も言わなかった。あまりのことに意識を失くしたわけでもなく、俺の腕の中にも身動き一つせず、静かに呼吸を繰り返している。

俺はラエルが黙っているうちに、言ってしまうことにした。

本当は、話そうとは思っていなかったことを。

たった今まで決めかねていたことを、俺は、決めてしまうことにした。

前へ、進むために。

「さつき、腕輪の主は、俺におまえを託すと言ったんだ。おまえを……ラエルを頼むと言ってくれたよ」

驚いたように僅かに身を震わせたラエルが、呆然と呟いた。

「声が、そんなことを……？」

「口約束とはいえ、託された以上、俺は、俺に出来ることをする。それが、声の思いに応えることだし、不審者に狙われてるおまえのためだし、なにより、俺にとっての利点のためにな」

俺は一度、ラエルと距離をとるように、ラエルの肩を掴んで、その顔を正面から見つめた。

俺が何を言おうとしているのか知らないはずなのに、その目がゆらゆらと揺れて、不安げに俺を見ていた。

決断してしまった俺は、その目に惑わされることも無く、思いを口にしてしまうことができた。

「だから、俺　俺はヴァレンの家に弟子入りしようと思う。リーゲルここを出て、ヴァレンの門下生として一から修行する。学舎にも、もう行かない。……もしかしたら、ここに残るだろっおまえとは、離れ離れになるときもあるかもしれない」

「そんな　っ！」

「可能性の話だよ。ラエル。ヴァレンの修行がどういったものかわからないけど、覚悟はしてろってことだ。今は戦なんて起こってないし、ただたんに一つ屋根の下じゃなくなるって程度くらいだろうから、大丈夫だって。大体、俺、おまえだけの主をやめるつもりは無いからな？」

「でも！　ロア様と離れるなんて……っ」

嬉しいことを言ってくれるものと、俺は、つい笑ってしまった。

「いいのか？ そんなことを言つて。俺は、無断で、おまえに『男女の口付け』をするやつなのに。おまえの無事を考えれば、案外距離を置いた方がいいかもしれない相手なんだぞ？ ……わかつてるのか？」

身に起こらないとも限らない現実を教えようとする俺の言葉に、ラエルは俺を見た。見据えるような目で、俺を見上げてきたのだ。まるで、俺に挑んでくるかのようなようである。

「わたしは、後悔しないと申し上げましたもの」

俺は、笑ってしまった。

それでこそ、俺を頑なに主と呼び続けようとする、ラエルという少女に他ならなかった。

心行くまで笑つてから、俺は、ラエルに言った。

「なあ、ラエル？ 俺は、絶対に今このときを無かったことになんかしないからな？ たとえ、おまえが忘れてしまつても、後悔しようとして、何を思おうとも……」

俺は手を伸ばして、腕輪をつけた小さなラエルの手を取った。

真っ白でたおやかなその手に、俺は顔を寄せる。そして、そのまますの甲に、唇を押し当てた。

指輪も、耳飾りも無い。けれど、この思いをラエルに伝えたかった。うる覚えの知識にかこつけてでも。

「俺は……ロアーツリーグルは、ラエルが好きだ。俺は、俺のため……おまえを守る力が欲しいんだよ」

耳に穴を開けたことを俺は後悔しなかった。けれど、そんな俺に対する反応は様々で散々だった。

開口一番に『馬鹿じゃねえの』と言ったのは、友人たちだったけれど、俺に言わせれば、揃いも揃って俺の思い切りが羨ましいと顔に書いてあった。感心していたようにさえ見えたのだ。

友人の一方である悪友はともかく、もう一方の友人は強敵かと思っていたのに、案外その程度の思いだったらしい。思いがけず知ることが出来て俺は安堵した。

母は『思い切ったことをするものね』とだけ、言った。

俺が何の為に開けたのか、何を思って、誰を思って　なんて、あの母には全てお見通しなのだろう。思い切って打ち明けた俺を、始終穏やかな目をして見つめ返すだけだった。

どこか寂しげに微笑む母とは対照的なのは、無論、父だった。

何やら怒り心頭な父は、ことあるごとに俺の片方だけ開けた左の耳たぶの穴を見ては『見苦しい』と言って、顔をしかめるのだ。

最初、俺を見て、その少女の態度を見るまでの束の間は、どこか戸惑ったような顔をして、どういった態度をとるべきか判断に迷った風情だったくせに。……少しだけ、驚喜にも似た顔をしようとしたくせに。

父は、『父代わり』であることを当のラエルに拒絶されるまでは、絶対にその態度を維持するだろうことが予想できた。

そして、そんな父を納得させるには、まず、ラエルの俺に対する態度をどうにかせねばならなかった。

ヴァレンの稽古事を終えて帰宅が許されると、例えどんな時間であるうとも、ラエルに会いたくて仕方がなかった。

リーグルの家にとり着いた俺は、縋るような思いで邸の上を見る。屋根裏部屋に当たる天窓を祈るような気持ちで見つめれば、その窓が僅かに開けられていることを知って、胸が熱くなった。

すぐさま、その部屋を指す。あのときは難しかった侵入方法も既に身体が覚えてしまっていて、難なく屋根裏を伝い、その部屋へと俺は進む。

部屋には、予想道理、俺の求めて止まない一人の少女がいた。

「お帰りなさいませ」

愛しい少女の声に、俺はため息を吐いた。

「ああ。ただいま。……すっかり夜更かしさせるようになってしまったな。ラエル」

「大丈夫ですよ？ 元々満月の夜は夜更かししていることも多かったですから」

昔からの習慣は消せないのだと言ってから、ラエルは俺を困ったように見上げた。丁度、歩み寄った俺がラエルのそばに腰を下ろしたところだった。

ラエルの目線が俺の顔を見るようにして、左耳を見ているだろうことに気付く。悲しいが、俺には次の言葉が簡単に予想できてしまっていた。

「主様（おかし）？ お願いですから、早くお医者様にお見せして、その耳を治してもらって下さいね？ 悪ふざけは、もう……」

俺の片耳を開ける理由となった少女ラエルは、あくまで俺の行動

を　片耳を開ける理由を、ラエル自身にあるのだとは認めてはくれなかった。

「悪ふざけなんて、人聞きが悪いことを。おまえも街に来て5年目になるんだから、わからないとは言わせないからな？」　『男が名乗りを上げて、女の手に口付けて、その想いを告げる』こと。これは、イライブ地方並びにエルズの街に古くから伝わる、伝統的な『求愛』の「  
「主様っ！」

俺の言葉を強くさえぎった彼女の言葉に、俺は、それ以上をあえて言わなかった。ラエルと俺の意味するところをわかっているのだからこそ、絶妙なタイミングで止めに入っただろうことが、俺にはわかったからだ。

俺がラエルと会ってから、もう5年が経つ。俺は、今も彼女自身のことはわからないが、多分きつと、街にいる誰よりも彼女のことを知っている。それで、俺は、十分だった。かつての俺が決意し、誓い立てたときのように、彼女に無理強いをするつもりなんて、これっぽっちも持っていないのだから。

だから、彼女にあのときの返事がもらえなくたって、どっちでも良かった。

俺はあのととき、伝えたかっただけなのだから。

「仮に女側が了承すれば、男側は指輪と耳飾ピアスりを用意して、自分自身に耳飾りを、女に指輪を贈ることで一生を誓い合う　これが、正式な婚姻の儀の運びだな。そして、女側が了承しない限り、それは男のただの独りよがりの宣言になる。用意したものを破棄して女を諦めるか、もしくは」

俺の独り言に耐え切れなくなったらしいラエルが、とうとう俺から顔を背けてそっぱを向いてしまった。

「……なんだよ、ラエル？　俺が『心を捧げた』って言うのに、不満なのか？」

「不満です。すごく。何度も言っているのに、聞き届けて下さらないんですもの」

「どっちがだよ。あのなあ、誓ってからもう四年が経つんだぞ？　悪ふざけとか気の迷いとかなら、直ぐに耳飾りなんか捨ててるつての。なんでわかってくれないんだかな……」

心を捧げる。

そのときの思いのままであることを現すために、俺は自分勝手に左耳に穴を開けた。

そして、改めて気持ちを変えない覚悟でいることをラエルに告白したら、なんと、ラエルは断固として俺の行動を責め始めたのだ。

誓い立てた当の本人に責められるのは、正直に言えば、主様と呼ばれ始めたときのころ以上の衝撃を受けることとなってしまった。はつきり言って心理的大ダメージだった。

だが、冷静にラエルの言い分を聞いてみれば、なんてことはなかった。俺に想われること事態が嫌だとかいう至上最悪な理由では無いようだったし、『何かの間違いです。わたしなんかのためであるはずが』とか、わけのわからない文句を理由に責められたただだったからだ。

それは、この俺が、一瞬でも思いを捨て去るべきかと考えた時間すら無駄に感じてしまうような、下らない逃げの言葉だった。そんなことで俺の決意が問われるなんて俺には許せなかったし、従う気にもなれなかった。

だから、俺はそんな彼女を無視して、想いを告げた証しとして左耳に穴を開けたままでいる。

この四年もの間、困って戸惑うラエルと決意の固い俺を目にした人は、決まって、ラエルを哀れに思い、俺に同情めいた視線を送るのだった。

「なあ、ラエル？ どうして、こんな時間まで起きてたんだ？」

静かに問えば、ラエルはそっと左腕の腕飾りに触れたようだった。

「申し上げましたでしょう？ わたしは、ただの習慣の名残として、起きていますだけです。今日は満月ではありませんが、いつ腕輪が光るともわかりませんから」

「声はもう俺たちに交信を求めていないだろ。声が』しばらく交信

を止める』って宣言したのを、俺と一緒に聞いたくせに」

ラエルが、長いため息を吐いた。

「主様。だったら、どうだって言うんですか。……わたしがこんな時間にまで起きていたら、そんなに不自然ですか？」

「おまえの言い分的には不自然極まり無いだろ？ 俺の片思いを拒絶してるんだから」

「っ！ きよ、拒絶なんて」

狼狽したようなラエルの様子に、俺は笑った。

「そうだよな。殊勝にもおまえは、なんだかんだ言って俺の帰宅を待っているもんな。父さんにも母さんにもばれないこの場所で」

「今日は……たまたま、この場所にいただけです」

「前に俺が自警団の不寝番役を手伝ったとき、『屋根裏部屋』は長いこと火が灯ってたぞ」

「さあ、いつのことでしょうね？ わたしにはさっぱり……」

「つまり、あくまですつとぼけるんだな？」

「ええ。あなたの言ってることがよくわかりませんもの」

にこりと、ラエルが俺に笑み返す。俺は根負けして、ラエルから視線を逸らすしかなかった。

「……受け入れろとは言わない。けど、なんでそんなに、無視するんだ？」

「わたしと、あなたのためです」

「そうは言っけどさ。それでも、俺、傷ついているのにな、結構」

落ち込んだ風情を見せたら、ラエルが口を噤んでしまった。

思わず、舌打ちしてしまった。

失敗だった。俺は、そんなことが言いたいわけではないのに。

「ごめん、これじゃあ、強要してることに変わりないな」

慌てて謝ったが遅かった。

あのラエルが、気にしないわけが無いのだ。

「いいえ……違いますわ。主様。わたしは、あなたをこれほどまでに利用していることに飽き足らず、傷つけることしか出来ないのですね」

ラエル曰くの、自らの罪悪感にとらわれる台詞を何度聞いただろう。

俺は、何度ラエルにそんなことを言わせてしまっているのだろうか。

俺本人が否定しても、何度説得しても、ラエルは寂しそうに微笑むばかりなのだ。結局、俺の真意からの言葉なんて、彼女には決して届かず、拳句彼女を困らせて、こうして傷つけるだけなのかもしれないなかった。

無力感に、思わず唇を噛み締めると、ラエルが俺に手を伸ばしてきた。俺の頬に触れてきて、唇を噛むのを止めさせたその手は、限りなく優しくかった。

「ねえ、考え直してください。こんな悪女を思うなど」

「俺が誰を思おうと勝手だろ？ おまえ、悪女じゃないし」

「悪女でしょう？ 立派な。今でこそ言えますが、娼婦に身をやつしていてもおかしくは無い身分でしたもの、わたしは」

「ラエルっ！」

反射的に怒鳴った俺の声に、ラエルがびくりと身体を震わせて、口を結んだ。俺に伸ばしていた手も引っ込めて、身を縮こませている。

（ああ、俺は、どれだけラエルを苛めれば気が済むんだろうか）

馬鹿な自分に自嘲しつつ、自己嫌悪するけれど、それで何かが変わるわけでもない。

俺は、ため息を吐いた。

「……俺だって男だ、知ってるだろ？ 軽はずみな言動は止めろっていつつも言ってるのに」

「せめて、あなたが……わたしを違う理由で求めて下さったなら良かったのに」

恨みがましくラエルが俺を見た。娼婦とは口に出るくせに、肝心の行為に繋がる言葉すらを言えない辺り、彼女も初心ついでな女らしかった。

「生憎だな。俺はおまえの心も欲しいんだ。俺は、ワガママだから」

そばに座っている彼女に、今度は俺から手を伸ばして、俺はラエルの手をとった。続けざま、いつかのときのように口付ける。

唇だけを離し、自分とは違う白い手に触れたまま、俺は上目遣いにラエルを見た。目を細めて俺を見るラエルは、今にも泣きそうに見えた。俺は、齒痒い思いで、空いた掌を握り締めた。

「おまえには、片思いすら迷惑なのか？」

「いいえ。決して」

ラエルが、困ったように微笑んだ。

「ですが、自警団の任務を引き受けることもあるあなたなら、ご存知でしょうか？ わたしを狙う謎の追っ手は、昔より増えているのですよ？」

「あんなの、今に始まったことじゃない。それに、おまえがこの街に居ようと居なかつと、そういう存在は無くならないものなんだよ」

「ですが、わたしは……」

「巻き込みたくない？ そんなの、俺がいやだからな？」

掴んでいたままの彼女の体を引き寄せる。抵抗したのかそれすらしていないのか、難なく彼女の体は俺の腕の中に在った。

「わかってくれよ、ラエル。俺だって、もう、おまえ無しじゃいられないんだ。もう戻れないんだよ……」

腕でやんわりと彼女の体を包む。柔らかな温もりがした。

問答無用で取り払った頭巾の下の『陽の色の髪』に口付けると、ラエルが戸惑ったような声を上げた。

「ラエル……」

愛しい少女を抱いていて、何も思わないわけがない。俺は、ある意味開き直って、一杯ラエルを抱きしめて、その名を呼んだ。

決して約束をしたわけではない、時折訪れる夜の密会を、ラエルはどう思っているのだろうか。

そのたびに俺は彼女に口付ける。時折、その頬や額に口付けることもあるけれど、決して、あのとくに触れてしまった唇にだけは触れようとはしなかった。

よく言えばラエルを思うがためだけれど、そんなのただの大義名分で、本当は嫌われたくなかったし、交信を止めて彼女の敵の排除のみに力を残したという腕輪の力を身に受けたくもなかっただけだった。

## 「夜店」 1

「なあ、ラエル。どれがいいと思う？」

街広場の中央に開かれていた通称夜市の店の一つには、ずらりと装飾品が並んでいて、俺は嬉々としてその装飾品たちを物色しつつ、隣にいるラエルに話しかけていた。

目当てのものはもちろん、俺の左耳に身に付けるための耳飾りだった。

自分が身につけるものではあるが、耳穴を空けた理由が理由だけに、自分一人を選んで身に付けるなんて空しすぎるのはゴメンだった。だから、俺はめぼしいものを一つ一つ手にとってラエルに声を掛けていたが、対するラエルの顔はどう見ても仏頂面なままだった。

「出来ることなら、答えたくありません」  
「そう言つなよ」

予想道理つれない様子の彼女に、俺は目ざとく店主の顔を見ながらラエルに囁いた。

「なんなら、誰かさんの名前を彫ってもらっても……」  
「えっ!?!? じゃ、じゃあ出来るだけシンプルなものの方がいいのではないだろうか？」

慌てたようにとってつけたような口振りで言うラエルの様子に俺は内心で笑ったが、それをおくびにも表面に出さないように努力した。

心を捧げた証アカンとして、俺は左耳の耳たぶの穴を開けたままにしているが、決して正式な婚約者がいる者のみが身に付ける『わっか状のリング』を通してはいるわけではない。せいぜい耳から吊るすように垂らす細長い連状のものだったり、丸い鉱石や、異国の産物であるらしい貝殻か何かや、鉄のような何かだったりした。

強引に夜市に連れ出せば、いつもこんな話になって、ラエルが適当にそれを選ぶ。

俺の思惑とラエルの思惑の末は、決まってありふれた耳飾りになるが、俺は気にしなかった。耳飾りをつけていることで、彼女への思いを形として残したかったのだから。

本当は、ラエルに心底拒絶されない限りは、誰に何を思われようとどうでも良かった。それこそ、俺とラエルの二人が誰にも知られずにこっそりお忍びなんて、出来るはずも無かったのだから。

父は、仕事柄商人との付き合いも深い。その父と多分仕事仲間だろう中年の男が、先ほどから、俺たち二人を苦笑して見ている。

「ロア坊も嬢ちゃんも、頑固なんだから。……まあ、止めはしないが」

「おじさんって、父さんの仕事仲間のうちの一人なんだろう？俺相手に売るなって言われてるだろうに、見逃してくれるなんて助かるよ」

見逃しての台詞部分をこれみよがしに強調した俺に、人のよさそうな顔をした店主は大笑いした。

「はっは！あの人レフェルスさんの子供ってだけで苦労するね、ロア坊！あの人の親馬鹿ぶりは相当知れ渡っているもんなあ！だ  
がな、ワシらとて、想い合う二人の邪魔はせんし、黙ってたら黙っ

てたで、こっちは儲けるだけだからな」

「ありがとう、おじさん」

俺が駄賃を払うと、店主は更にニコニコして笑っていた。

夜店を物色しつつ、黄みがかつた丸い石を買った俺は、早速それを身につけていた。

四年も身につけているから、多分外したままでもそう簡単に穴は塞がらないだろうけれど、今となっては何かを付けていないと落ち着かなかった。

「主様？」

ラエルの呼ぶ声に振り返れば、ラエルはやはり恨みがましそうな目をして俺の顔を、耳飾りを見ているようだった。

「夜市のたびに連れ出していただけなのはありがたいのですが……」

謎の追っ手が増えていると自称と言うか自己申告していたラエルは、いまや自ら一人歩きなどしようとするらしいし、保護者である父と母の監視の眼も以前とは比べ物にもならないほど厳しくなっていた。

こんな風に、俺が強引に外へ連れ出さなければ、ずっと、ラエルは家で過ごしているのだ。

「嫌だったか？ 俺、おまえに無理をさせている？」

「そついう意味ではないんですけど……でも」

聞けば、困ったようにラエルが笑う。

「なんだか、わたしのほうが無理をさせているようで……嫌なんです」

「おまえが？ 俺に？ まさか。俺は好きでこつこつことをしているのに？」

安心させてやりたくて笑顔を浮かべて見せても、ラエルの表情は晴れなかった。

思わずため息が出てしまったけれど、俺は内心の思いをそのままに語ることにした。

「……ま、どちらかと言えば俺だって変な感じはするけどな。男の俺が耳飾りなんて装飾品を買い漁ってて、女であるおまえを差し置いて身につけているのも。……けど、今となっては、俺はおまえにあんなに痛い思いさせたくないかな」

開けようとする前は『何故男が？』と不思議に思ってた仕方なかったけれど、開けてみて初めてあの存外にも恐ろしい穴開けの実態に気付いたのだ。

先人の誰かが男側に耳飾りの方を強制したのも、今となっては頷けると言うものだった。

あのときの痛みを思い出してしまって、つい顔をしかめてしまったら、それを見られたらしく、ラエルがふと笑った。

「痛い目にはわたしも合いたくありませんが……。装飾品の類とて、わたしには前に頂いたコレで十分ですよ。ありがとございませうね？」

ようやく嬉しそうに笑ってくれたラエルが、頭巾につけているブローチを手に取った。いつぞやの夜市で俺が購入してラエルに贈った初めての品だった。

「つけてくれてるんだな？」

目に見える位置にそれがあるけれど、あえて尋ねた俺に、ラエルがにこりと頷いてくれた。

釣られて、つい俺も笑顔を浮かべてしまう。

「ありがとう。嬉しいよ」

俺は駆け出しにも近い修行中の身ではあるが、一応仕事をこなして、僅かだけれども給金を貰っている。独立にはまだまだ程遠いけれど、それはそれだ。

俺は、親達から貰ったお小遣いの金ではなく、自分自身で稼いだお金で彼女へ送るための品を買えたこと、それを大事に扱ってくれていることも、すごく嬉しくて誇らしかった。

「ブローチを贈ってから随分経つし、結構金も溜まったし……。その、ラエルさえ良ければ、また何か贈りたいんだけどな……？」

「もう主様ってば。お気持ちだけで十分ですって」

「……そうは言ってもさあ」

金に物を言わせて意味の無いものを贈りたくは無かったから、今のところブローチくらいしかプレゼントできていない。夜市が立つたびにラエルを連れ出している本当の理由は、彼女が心動くような品があったら、それを買ってあげたいという下心も実はあった。

しかし、この作戦は失敗だったらしく、ラエルは立ち並ぶ夜店自体を興味本位に見つめてはいても、商品たち自体には全然興味を示

そうとはしなかったからだ。

それでも俺は、語りつつ、歩みつつ、道なりに続いていく夜店の類を一軒一軒確認していて、良さそうな物が無いかと探すのを止めなかった。

ラエルも、ラエルで、口振りでは『もういいから』と言うけれど、そんな俺に大人しく付いてきてくれたことが、つつい俺の我がままを押し通そうとしてしまおうとする強みにもなっていた。

## 「夜店」 2

「あ」

俺は目に留まったそれを見て、一種の閃きが走るとともに、一瞬迷った。

「どうかしたんですか？」

ラエルの不思議そうな声がして、俺はどう話そうかと迷う。立ち並ぶ夜店のある店先で立ち止まってしまった俺たち二人に、得てして人の良さそうな笑みを浮かべた店主の中年男が揉み手をしつつ様子を窺ってきたのがわかった。

「気になった品があったんですか？」

ひそひそとラエルが俺に囁く。見ようによってはラエル自身が俺に対し『あれが欲しい』と駄々をこねているように見えてもおかしくはなかった。

「……俺のじゃないぞ」

呟けば、ラエルが不思議そうに俺を見返してくる。賢明なのだろうか、それ以上口を開こうとはしない様子だったので、俺はもう一度呟いた。

「俺のはもう買っちゃったから、十分なの。ま、でも、まだ買うと決めたわけじゃないけど」

思わせぶりの俺の言葉に、ラエルは更に押し黙ってしまったが、話を聞いていただろう店主が、とうとう身を乗り出して俺に話しかけてきた。

「坊ちゃん。お目がねにかなうものが？」

珍しいことに、俺の父の顔を知らぬ店主だったらしく、当たり障りの無い『坊ちゃん』という言葉を使って、話を切り出してきた。わざわざ俺のややこしい身の上を話すことも無いので、そのまま会話を続けることにする。

俺の目の前にある首飾りには、銀色の細い糸で編め込まれている鎖の先にきらりと輝く丸いわっかが付いていた。

「店主さん。この首飾りについては、指輪リングのように見えるけど？」

「ええ、まあ。見ようによっては見えるかもしれませんがね」

店主である中年男はにこにこ笑顔を絶やさないでいる。

「首飾りとしてお出ししているものですから、やはり、見栄えのいいものを誂えております。美しく繊細で細やかでいて、主体となる網鎖を引き立てるためのものですが。……ここだけの話、もしかしたら男性では難しいでしょうが、よっぽどの女性でもない限りその手に嵌めることもできるかもしれませんね」

店主の眼が目ざとく俺の耳と彼女の手に走つたのを、俺は見た。内心辟易としながらも、商人と言う立場の人間をそれなりに知っている以上、俺はそれに対しては何も言う気にはなれなかった。

「俺の聞きたいこと、よくわかったんですね」

「恐れ入ります」

「一品しかないようだけれど、人気なの？」

「いえいえ、まさか。わたしもこの地方の生まれですし、やはり坊ちゃんのような方がお嬢様に贈るような指輪やその対となる耳飾りに比べれば、大した需要も無いとわかっていているのですが」

「そうだな。正式なるものとは違うから………歓迎される品じゃないとは思うけど」

指輪のみもしくは耳飾りのみといった片方だけ売られているものは、金や立場や相手等が揃っていない者たちの必要とするもので、こんな風に夜の市とかで買い求めることは出来る。

しかし、正式な贈りに使うものは、それこそ一対のものとして一緒に売られていて、法外な値段がするものが多い。そもそも、こんな夜市のような場所で買い求めるものではないのだ。

「しがない商人の身であるわたくしもそれに憚り、一度の市に一つきりと決めているのです」

「なるほどね」

言いたいことを言い終えたらしい男が『好感触を得たに違いない』と、しきりにもみ手をこすり合わせている。

俺は、思わずため息を吐いた。

（ 道理で、この値段なわけだ ）

今日まで夜の市なり朝の市なりたくさんのお店を見てきたらう俺が、思わず唸り声を上げてしまいそうなほど、ここの商品は割高だった。

「あ、あの、主様？」

俺はもちろん、この地方の物資運送を手掛けているに等しい父とともに過ごしてきたラエルとて、品々の流通に疎い方ではない。気遣わしげに声を掛けてくるあたり、俺が迷っていることに気付いているのだろう。ただ、俺の迷う理由を正しく理解してくれていたら、俺が迷う必要だって無いのだけれど。

迷いに迷いたかったが、時間が無かった。

これが、一度の市に一度きりしか出ない商品であるのなら、巡りあえたのも何かの思し召しだろうと、俺は柄にも無く思った。

「……買った」

「毎度！」

店主が心底嬉しそうににっこりと微笑み、それを店頭から下ろし、包装し始めた。

「ちょっと、主様！」

店主にはばれない様な小声で、ラエルが俺に文句を言ったようだったけれど、俺は聞かなかったふりをした。

「さて、坊ちゃん。代金も頂いたことだし、これの所有権はもうあなた様のもの。ですが、決まり文句をお伝えせねばなりませんまい」「なんですか？」

「わたしは、丸い環の付いた首飾りを販売した。決して指輪をお売りしていない。あなた様も、首飾りだけを購入したとお考え下さい。それが、わたしたち、そして贈られる方のためと存じますゆえ」

それだけを言うと夜店の店主は店の奥へと引っ込んでいった。

「太鼓判を貰って助かったな」

「ですが……それは……」

首飾りを買った店から離れた途端、早速包装された品を取り出し  
ている俺に、ラエルが戸惑ったような声を上げた。

「ほら！ おまえにはまだ首飾りなんて贈ったこと無かったんだか  
ら、もちろん受け取ってくれるだろ？」

務めて明るい声を出して笑いかけたが、ラエルは笑い返してはく  
れなかった。

俺の迷いは現実となった。

「……そんな困った顔するなよ」

鎖は思ったよりも長く、ラエルのような身の丈の低い華奢な少女  
であるのなら、首元で二重になるように身につけても大丈夫なら  
い長さを持っていた。俺は、黙っているまま若干俯いているラエル  
に近寄って、無理やり頭からそれを被せて身につけて見せた。

一歩後退り、似合うだろうかとラエルを見つめる。それこそ、銀  
色と何かの石が光っているだけの首飾りは、可もなく不可もなくラ  
エルの胸元にあった。

（俺の自己満足も、重症だな）

自分自身を嘲ったところで、今更無かったことにはできない。  
ラエルの表情を曇らせたくなかったのに。

「本当に嫌なら俺に返してくれ。別に、俺が持っても大丈夫なほどシンプルみたいだし。それに、肌身離さず持っているなんてこと、言わないから」

「……主様」

「何？」

「首飾りのこと、大変嬉しく思います。ですが、これを受け取る代わりに……質問させては下さいませんか？」

抑揚の無い感情の籠っていない言葉に、俺は知らず唇を噛み締めた。

「どうして、その耳飾りを求めたのです？ どうして、わたしにこのような形になるものを与えようとするのです」

ラエルの悲痛な声が、悲痛な色を浮かべた目が俺に突き刺さる。

「何かがあってからでは、遅いのですよ？」

いつかの父が言った言葉を、ラエルが言った。

「夜店」2（後書き）

加筆修正しました。 10・4

### 「夜店」 3

夜市の夜店の帰り道、俺はラエルを邸へと送り届けるつもりだったが、もやもやとした思いのままヴァレンの邸へと帰るのは気が向かなかったたので、リーグルの邸に俺も帰ることにした。

確か、父は長丁場の仕事先へと向かったはずで、俺自身がそれを街外門の警護の役目としてそれを数日前に見届けていた。つまり、母にさえ上手い顔をしておけば、俺の邪魔者はいないというわけだった。

リーグル邸門前にて立ち止まりかけたラエルを制するように、俺が門に手を伸ばして開くと、ラエルが困ったような顔をした。

「明日もお仕事なんでしょう？ お昼から……」

言葉の意味するところに俺は驚いてラエルを見たが、ラエルは慌てたように俺から視線を背けようとしているところだった。

ラエルは、突然言葉をきったかと思うと口元に手を当てて、うろたえている。

「どうして、知ってる？」

「……夜市がある日は、ヴァレンの人に直談判して半休をもぎ取って来ているのだと、前に言っていました」

「前？ いつだよ、それ。任務には機密事項も関わることがあるのに、そんな事を軽々しく口にしてしまうほど前のことなんだろう？」

ラエルが、押し黙る。

白状しようとしないうラエルの様子に、俺はかまをかけて見せた。

「コーラルと、俺の様子見に来てただろう？」

「えー！」

いつもなら上手く交わして見せるラエルが、うろたえているせいなのか簡単にぼろを出す。

「知ってる。……というか、途中から教えてもらった。仕事仲間におかげで酷くからかわれたけど、こういう日に休みもとりやすくなつたんだよ」

「そうだったんですね」

「普通なら、取れない休みだからな。俺が下っ端って言うのも関係しているけど」

普段の日々でさえ街は自警団を必要としているのだから、こういう催しの日にこそ、不貞な輩、野蛮な盗人は動き出すのだから、警戒する担い手がいればいるほどいいのに、俺は悪いと思いつつも休ませてもらっていた。

ラエルには話してはいないが、ラエルを狙う謎の男の追ってた者の存在を、自警団の連中並びにヴァレン邸の者も気付き始めていてもおかしくは無かったから、そのそばにあえて俺を置こうとする意図もあつたのかもしれないが。

ラエルは、ラエルが考えている以上に、たくさんの方たちに守られている。

俺にしる、両親達にしる、街の人たちにしる。あの腕輪の主でさえ、以前からの腕輪の魔力を酷使し過ぎなことを気にしていたから、必要以上に腕輪のに負荷を与えないようにと、彼女の身の安全を守るためだけに力を使うことに決めたから、彼女との交信を止めたのだろう。

「なあ、さっきの話だけど……何かって、何が起これると思ってるんだ？」

いつかの父と同じ言葉を言ったラエルに、俺は言った。

「まさかとは思いつけど、有無を言わさずおまえが無理やり攫われたりするの？ 父さんや母さんが打つ手も無い事態が起こって、俺が指をくわえてそれを見ていなきゃいけないどころか、瀕死の重傷を負うかもしれないって？ 冗談じゃない。そんなの起こってたまるもんか！ 俺が何のためにヴァレンに通っているのかわからなくなつちまうだろ？」

俺は、ラエルに向かって笑った。

「不測の事態に備えるために決まってるだろ、もちろん。おまえを守るために」

「主様……」

ラエルは悲しそうな顔をしているままだった。

「十分すぎるほど、わたしはあなたに良くして下さいました。これ以上何を望みましょう。これ以上、あなたに何を求めることが出来ますでしょうか。おわかりですか、主様。あなたは既に、わたしを一度救って下さっているのですよ？」

「おまえがどう感じていようと、俺は、俺の望むことをしたい。それだけだ」

ラエルが、悲しそうな目をしたまま無理やりに笑う。

「賢明ではないですね」

「そうか？」

「早く、考え直してください」

「どうして」

俺がそんなつもりなんてないと一笑してみせると、ラエルは顔を俯かせてしまった。

「受け取るべきか迷ったのです、このブローチも。あの夜のことでも、わたしは、後悔しないと申し上げました。事実、後悔はしていません。あなたと出会ったのだから、あなたを主様と呼ぶようになったことも、わたしは自分の決断を誤ったとは、とても思えないですもの」

「じゃあ、別にいいじゃないか」

「良くありません！　じゃあ、せめて、初対面の者に見破られかないその耳飾りをお止め下さい！」

「どうして？」

「……認めたくはありませんが、その耳飾り、わざと同じ色のものを選んでいるのでしょう？」

しびしびと口にしたラエルの口振りには、密やかな確信めいた響きがあった。

「よく気付いたな。　だったら、その思いを汲んでくれないか？

俺におまえを想うことを許してくれたらいいのに」

「主様！　ふざけないで下さい！」

珍しく、ラエルが声を荒げた。

「その色は、わたしの……！　秘めなければならぬ色なんですっ

「!!」

ラエルは一切黄色い服も着ないし、黄色い装飾も持たない。黄色以外にも紅い色も好まなかった。

元々華美な装飾や派手な格好を好かないようだったから、そういう目立つ色合いが嫌いなのだらうと最初は思ったけれど、少しでもそれらの色が入っていたらラエルは嫌がる以上に拒絶するような反応を示すのだ。

「まさかとは思うけど、頭巾の中身か？ 全然違う色じゃないか。考えすぎだろう？ 黄身がかつていたとはいえ、こんなのありふれた色のものだし、決して貴重じゃないんだから」

ラエルはいつの間にか俺を睨みつけるかのように見つめていた。

「……………だとしても、わたしは、その色は嫌なの」

ラエルは、じつと俺の顔を 多分に左の耳に身につけている黄色の耳飾りを一拍ほど睨みつけた後、俺に懇願するような目を向けた。

「お願い、主様。わたしを哀れに思うなら、お願いだからその色は身につけないで。お願いだから……………」

「不吉な噂」 1

夜市に出かけた翌朝、リーグルの邸に泊まった俺はラエルと共に表面上仲良く朝食を取っていた。

母が、嬉しそうに給仕してくれていた束の間、廊下を歩み寄る音に俺は怪訝に思っただけをみると、どこか疲れたような顔をしていた父が立っていた。

「なんだ、来ていたのか。珍しいこともある」

朝食の場に現れた父は、驚いたように俺を見ていたが、俺だつて驚いていた。いないと思っただけは父が、何故なのか邸に戻っていたからだ。

「……も、もう帰ってきてたんだ。父さん。幾らなんでも早過ぎないか？ 確か、一昨日出発したばかりだし、目的地である出先つて街の森の奥を越えたところにあるんだろ？」

「流石、自警団門守役だな。一丁前にわたしの仕事も知っていると」

一瞬朗らかな笑みをした父だったが、すぐさま、その表情は暗い笑みに変わってしまった。

「変な噂が広がっているから、わたしだけ先に帰ったんだよ。仕事仲間たちは多分まだ森の中で四苦八苦しているんだろ？」

父はそう言って、食卓の場、白いテーブルクロスを敷いている長机の前に、ラエルの隣に座った。

対面する形の位置にいる俺は、複雑な思いでそれを見ていた。目の前にいる父が元俺の席に座っているのは、やはり胸に来るものがあった。

リーグルの後を継ぐことを一度も考えたことは無かったし、継ぐうとしても頭が良いわけではないから難しいし、植物学自体には勉強してまで知りたいことなんて無かったから、どちらにせよ俺はリーグルの名を捨てる運命にあった。

けれど、やはり居心地のいい実家を出て、新しい場所を求めた俺に、実家暮らしの頃のような待遇は全てがすべて許されるわけではなかった。部屋が残っているだけありがたいし、昨夜のように突然に訪れても追い返されないだけましだった。

そんな感傷めいている俺のことを父は父で渋い顔をして見ているので、またラエルのことでも何かを言ってくるのだろうかと思構えた俺だったが、どうやらはずれらしかつた。

訝しげた俺を、父が、困った表情で見つめ返したからだ。

「なあ、ロアーツ」

「……何？」

「おまえは知っているのか、あの噂」

「噂って言われてもな」

実を言うと父がそれを口にしたときから気になっていたが、生憎、見当がつかなかった。

ヴァレンの家に弟子入りし修行に通ううち、俺には『素質がある』らしくこの四年の間ほとんど拍子に稽古の師が変わった。俺に稽古をつけてくれる師連中の皆が皆『素質』云々について満足げに語ってはヴァレンタイン当主であるギルバート氏に報告していて、その氏は氏で『君なら大丈夫だから』だと称しては自警団の任務に就かせてくれたから、俺はヴァレン流技三・四年目にして若輩の身ながらも自警団の門守役や不寝番の任にも就くようになっていた。…

…これでも、まだ、十六なのに。

父の仕事の出先を知っていたのも、門守役をやる上で手続きに関わることが多くなったから、ちょっとした方面の情報通にはなっていたのだ。

「どんな噂だよ？ 街の？ 外の？」

街の噂ならば多すぎてわからないが、門守の仕事をする上で耳にした街の外の噂だろうかと思ひ、尋ねたら、父は更に困惑した顔をして俺に言った。

「御仁偽者説だ」

「は？」

二の句が告げなかった。

外は外でも、見当違いもいいところだった。

「御仁って……あの、紫の御仁様ですか？ 監査の？」

黙ったままでいたラエルが、興味を引かれたかのように会話に入ってきた。父に問いかけるように、話の先を促すかのように、その顔を向けている。

「正しくは、王直属の配下であらせられる私兵『審査の儀』担当者だ。本来なら一年毎の儀式であるのに、三年毎にしか来ないのはおかしいと思っていたが……」

「な、なんだって!？」

( あの面倒臭い儀式が、本来は一年毎!?)

俺は思わず、嘘だと悲鳴を上げた。

「ある事情で『イライブには一年毎には来れなくなった』と監査人たちがそう答えるものだから、わたしたちはそれを信じていたんだが、そんな特例、イライブ地方だけではなかったんだよ。何とこの街にしか、三年毎に来ていないらしい。なんだか、笑ってしまうだろうか？ 前のポールドさんの一件は何だったんだろうか……」

「……あの、その御仁が偽者だったと、どうして発覚したんですか？ ちゃんと、監査人らしく、優秀な者を選び王都に導いていたのなら……」

不思議そうに問うたラエルに、父は、困ったように言った。

「本物を名乗る者が、予告しているんだ。今度の春、神聖なる黄金コガネの娘を王都に遣わすとね」

父の言葉に、俺ははっと息を飲んで押し黙った。思わず、ラエルを見る。予想道理、ぶるぶると身を震わしていた。

「こ、黄金って言ったか、父さん？」

「ああ、言ったとも。まったく、これが皆に知れたらどうなると思う？ 王都に行きたいと馬鹿なことを考える娘達が、競って髪を染め始めるぞ。黄金など、どうあっても染め上げることなどできんと言っのに……」

「あの、レフェルス様？」

震える声で、ラエルが言った。

「少し席を外しても宜しいでしょうか。ちょっと、彼に、お話したいことがあるので……」

ラエルが俯いたままの顔を、俺に向ける。父は、見事に勘違いした。

「ああ、あの耳飾りの件か。なんなら、わたしがガツンと言って言い聞かせようか？」

「いいえ、わたしからお願いしてみますから。主様、ちょっと来てくださいますよね？」

「もちろん、俺は意を変えないけどな？」

俺は、ラエルの話しに合わせるように言っつて、席を立った。

部屋を立ち去り際、俺は、父に確認した。

「なあ、父さん。さっきの噂、根も葉もない噂である可能性は？」

「どうだろうな。もしかしたら、そうかもしれんがな。そもそも、わたしたちのように渡り歩く連中以外はまだ知らんと思うが……」

「そっか、ありがとう」

廊下を歩き、父も母も俺たちを見ていないことを確認してから、俺は今にも倒れてしまいそうなほどふらふらしているラエルに手を伸ばし、歩き出した。

「ここじゃまずいだろ？俺の部屋にするか、それともおまえの？」

「わたしの部屋に、行きましょ……」

ラエルは、今にも気絶してしまいそうなほど、真っ青な顔をしていた。

## 「不吉な噂」 2

部屋に着いた途端、ラエルは、先導するように前にいた俺を追い越してしまつて、部屋の中をずんずん進んでいった。

「おい、ラエル！」

走つてはいないが、常よりも歩みの速い彼女はあつという間に、姿見の前に立つた。彼女の横幅よりあるかないかくらいの、長さは俺の背丈以上にもある、大きな縦長の鏡だった。

がくりと膝を付くように、ラエルが床に座り込んでしまった。

「どつして……？」

震える声で呟いたラエルは、両腕で頭を抱え込むように小さくなる。

痛ましいその姿に、俺が思わず駆け寄つて抱きしめようとしたら、それよりも先にラエルが俺に縋つてきた。

中途半端に片膝を付いた俺に凭れ掛かるようにして、ラエルが俺を見上げた。

「ねえ、主様。審査は、再来年のはずでしょう？」

「父さんの話だと、偽者に我が物顔されてたから、その腹いせに今度の春……なのかもな」

「っ、いやっ…！」

怯えるように身を震わせる彼女に、俺は彼女の背を撫でて慰めようとした。

「どうして？ 何故今になって、『わたし』を……？」

聞き違えてしまったかと思うほど、小さなラエルの声がした。

「ラエル、今おまえなんて？」

聞き返そうとしたそのとき、ラエルは俺を突き飛ばした。いや、恐らく突き飛ばそうとしたのだろっけれど、結果的に俺は尻もちもつかなかったし、ちよつと体勢を崩しかけただけだった。俺に腕を突っぱねた形のラエルはと言うと、俺との体格差の反動でそれなりによるめいていただろっに、すぐさま立ち上がった。

「おい、ラエル？」

「はさみ……」

聞こえてしまったか細い声に俺ははっと息をのむ。その呆然とした表情が意味する言葉に、俺はラエルが何をしようとしているのかを悟った。

俺に背を向けて、勉強机だろっ書物の広げられている机に向かおうとする彼女を、俺は彼女の背中側から抱きしめた。身動きを封じるように。

「主様、離して！」

「ラエル、やめろ！ 馬鹿なこと考えるな！ そんなことをしなくても、大丈夫だから！」

「いや、いやなの！ 戻りたくない！」

「俺が、守るから！ ラエル！」

押し問答を繰り返すうち、いつの間にか、部屋に父と母が飛び込んできていた。

「ラエルちゃん！？ どうしたの！」

「母さん、鎮静薬を！ 早く！」

暴れるラエルの姿と取り押さえようとする俺の姿に二人は狼狽したようだったが、すぐさま母は部屋を飛び出していった。

立ち尽くすばかりの父は、俺たち二人を呆然と見ているようだった。

「ラエル……君は……っ！」

父が何かを呟いたようだったが、俺はそれに構っている暇なんて無かった。

「父さん、手伝ってくれ！」

「あ、ああ」

やがて、到着した母の手にしていた薬を使い、しばし、ラエルは眠りについた。

頭巾をしていないままの姿で眠るラエルを、母がそつと撫でていく。

父と俺は、そんな二人を、一歩下がった場所で見つめていた。

「ねえ、ロアーツ。ラエルちゃんは、どうして……？」

「わからない。父さんの話した噂話を聞いた途端 だったから」

「そつ……」

気づいたときには、母は泣いていた。

「この子は、一体何に苦しんでいるんでしょうね。一体、何を恐れ  
て……」

父と俺とが知る迷子騒動のことくらい、いまや母だって知ってしまっている。

けれど、俺のみが知る腕輪の秘密や眠る少女自身の名前のコトだって母は知らないはずなのに、その少女の抱える深い闇を恐れ、母は体を震わせて泣くばかりだった。

「ロアーツ」

父が、今度は俺を呼んだ。

「仕事だろう？」

「うん」

今日は半日休みで、明日の昼過ぎまで不寝晩の見回り任務を引き受けていた。

母が、驚いたように、今度は俺を見据えていた。

「代わりはないの？ あなた、全然休んでいないじゃない」

「本当は、朝食食べた後仮眠を取るつもりだったんだ。だけど、今更寝れるわけないし……、ついでだから、警護の役目やりながら、どうしたらいいか何か考えてみるよ」

「そう……」

母の眼が何かを語っていたが、俺はそれに気付かなかったふりをした。

母の横に並ぶように一歩前に出て、俺は眠るラエルに近付いた。どうしようか迷ったものの、僅かに『陽の色』の髪に触れて、頭を撫でた。起きなければいいと思いつつ、起きて欲しいと思いつつ。俺が触れて、ラエルは少し身じろいだように見えただけで、結局目覚めなかった。

「じゃあ、ラエルを頼むよ」

名残惜しい思いのまま、俺は身支度をするために自室に向かい、支給されていた仕事着に着替えて、家を出た。

「元気ないなー、ロア。どうしたんだよ？」

街の見回り中に出会った悪友の姿に、俺は、なぜか救われるような思いがした。

見覚えのある学舎特有の男子の制服姿を着ている俺の幼馴染の一人は、不思議そうに俺を見ていた。

「コーラル。久しぶり」

「俺は久しぶりでもないけどな。実は、俺、ロアが詰め所前で立ってるの、『たまーに』見にいってるんだぜ？」

こっそり行ってたから知らなかっただろうと笑うコーラルの顔を見ていると、俺は、なんだか体から力が抜けていくような思いだった。

(昔から、コイツは脱力系と言うか。こういうやつだったよな……)

俺は思わず目を細めてコーラルを見てから、せつかくだから思  
って、ラエルのことを当たり障りない程度に喋ってみることにした。

「……実は、ラエルの元気が無いんだ」

「な、なんだって!？」

コーラルは、予想道理飛び上がるかのように驚いて、俺を見返して  
きた。

「ロア! おまえ、酷いことしたんじゃないだろうな?」

「何で俺が酷いことしたって前提なんだよ! ……ちよつと、あつ  
てな。俺も両親達も、慰めようにもどうしたらいいかわかんなくて  
困ってんだよ……」

「慰めるつたつて、簡単じゃねえか」

こともなげに言われると、ついムツとして、俺は人の気も知らな  
いでと、事情を語れない身の上なのに腹が立った。

「簡単じゃねえんだよ!」

「いや、簡単! 彼女を心配する気が俺の『次』にあるロアなら、  
大丈夫だ! な?」

目から鱗とは、まさにこのことを言うのだろうと、俺は思った。

コーラルが、にやりと思わせぶりに俺に笑顔を向けている。

「……もしかして、おまえ……」

「ほら、ロア、おまえもちよつと元気になっただろ? ったく、

警護の見回りの任務の最中のくせに辛気臭い顔しやがって! 仮に  
も、恋敵ライバルの俺が、仕方無しに元気付けてやったんだから、今度、ラ

エルちゃんとデートさせるよな?」

「 考えとく」

「へ？」

俺の返事に驚いただろうコーラルが、素晴らしいほど間抜けな顔をした。

「不吉な噂」 3

ヴァレンティン邸にて屋内武芸の通し稽古中、兄弟子の一人が、  
たった今の間も俺と手合わせの最中だというのに、不思議そうな顔  
をして俺に囁いてきた。

「いつものキレがないな、ロア」

「……ちよつと、悩み事があってね。ルード」

竹刀の攻めをかわしつつ答えると、俺の兄弟子の一人であるルードは、更に訝しげに眉を寄せた。

「単細胞なおまえが、悩み事？ 不吉だな、冗談は止めて欲しいね」  
「柄にも無いってことはわかってるけど、今、不吉って言われるのはちよつと堪えるな……」

「相談に乗るぜ、相棒。　　それが、そんなこと考えられないくらい、滅多打ちにしてやるうか？」

ほんの一瞬の隙を見せた途端、ルードの持っていた竹刀が、俺の額に当てられていた。

両手を挙げて降参をした俺に、ルードが面白そうににやりと笑った。

「おまえの片耳の相手が、落ち込んでる？」

学舎出身のヴァレン流技者ならともかく、生粋のヴァレン門下生や、学舎そのものに関係が無い人物や、俺の家族に接点が無い人間

は、『元旅人の少女』の話を知っていても、ラエル自体を遠巻きにしか知らないことが多い。

ルードも、聞くところによると生粋のヴァレンの門下ではないが、別の流儀の門下だったらしく、『ヴァレン』を紹介されて最近やって来たらしいので、俺の片耳の意味を知ってはいるらしいが、その相手であるラエルの姿自体は知らないらしかった。

「審査の儀が、俺以上に大嫌いらしいんだ」

この間の別れ際を思い出せば痛ましい彼女しか思い描けなくて、俺はやるせないため息を吐いてしまいそうだった。

あの日以来、リーグルの家にはまだ帰れずにいる。俺は自分で選び進み決めた道筋を後悔してはいなかったが、こういうときは少々歯痒い思いでいた。

守るための力を得るために『ヴァレン』に来たとはいえ、そばにいなければ守れるものも守れないのだから、彼女と会えない日々が続くと本末転倒に思えて仕方なかった。

「審査の儀？ それが関係あるのか？ 学生の身で、対象者でもあるまいに」

「まあ、心配性なんだよ。俺の想い人は」

俺は腕立て伏せをしながら、ルードに答えた。

ヴァレンの掟のうちの一つに、『通し稽古の賭け勝負』という項目があり、お互いがそれを理解し了承した場合のみ、その通し稽古の最中での勝負の勝者は、敗者に自分の望む修行をさせることが出来るというものがある。

どう考えても兄弟子と弟弟子の場合勝敗は最初から決まっているが、掟に組み込まれた正式な伝統である以上仕方がなかった。もと

より、弟弟子は強い兄弟子に逆らってはならないとされていて、打ち負かせない兄弟子にはいずれ教えを請わなくてはならず、そうしなければ強くなれないのだから。

十中八九俺もルードも今日の通し稽古の結果がわかっていたから、俺は話がしたいために自分の身が動けばいい自主練の類を希望していて、ルードもそれを了承したからこそ、俺は一人、腕立て伏せなんかをやっているわけだった。

「かくいうおまえの毛嫌いも相当らしいが……。ここの跡取り息子が引つ張られていったときも、相当喚いたんだろう？」

「キリル師範代だろ？ あー、あの人もどうせなら『偽者』に引つ張られていけばよかったのに……。あの人の場合は王都で捕まったから仕方ないんだらうな」

今から四年前、ヴァレンティン当主ギルバート氏が雲隠れさせてまで身を隠させたヴァレンティン家時期跡取り息子であるキリル「ヴァレンも、つい一年ほど前に、ヴァレンティンの家の用事で王都に出向いた際、運悪く生粋の紫の御仁に出くわしてしまったらしく、そのまま王宮に召し上げてしまったのだと、風の噂で聞いた。もしかしたら、国はそのときのことがあったから、この街に来ていた偽者の存在を感知したのだろうか。」

（ あーあ、本物が予告までして、こちらに向かうと宣言しているなんてただごとじゃないよな、まったく……。 ）

内容が内容なだけに、俺はそれ以上のことを言葉にはせずに、軽くため息を付いて、腕立て伏せを続けようとした。

しかし、ルードは、その話に興味を持ってしまったようだった。

「偽者だつて？」

「ああ、そう。エルズの街、三年毎にしか、御仁が来てなかったんだよ。だから、本物の御仁がお怒りらしくってさ？」

「本物も偽者もあるのか、あれに？」

苦々しげに言うルードに、そうだよなと俺は同意して笑った。

「俺も信じちゃいないし、その情報を持ち帰った父さんも信じちゃいなさそうだったけどさ。でも、ラエルはその話を聞いて取り乱しちゃって……」

「取り乱す？ 彼女が何故？」

ルードが驚いて俺を見ていて、俺は話し過ぎてしまったことにたつた今気付いた。

「いや、わかんないけどさあ？ 多分、誰かが連れて行かれるのが怖いんじゃないかな。街に慣れたっていつても、まだまだ人見知りなところあるし……」

「だとしても、取り乱すことはないだろう。何か特別な理由があるんだろ？」

門下生の中には筋肉馬鹿とか武芸馬鹿に近い俺のような者も多いが、決して頭の悪い奴らばかりではなく、ルードはどちらかといえは後者に分類される方と言ってよかった。

ルードの追求の言葉に、俺は鍛錬だけのものではない冷や汗を流していた。

「ま、まあ、それは、家人の秘密と言うことで」

「……そんなに、重要なことなら、無理には聞けないか」

苦し紛れの俺の言葉に、ルードは渋々ながら引いてくれたようだったので、俺はホッとした。

「だが、その噂、レフェルス殿が耳にしたのなら、わたしたちの耳にもいずれ入ってくるのではないか？」

「げ……」

（なら、隠し立てる意味も無いってことなのか？）

ホッとしたのも束の間、俺はルードに話してしまおうか迷ったものの、結局話さなかった。

俺の決意が固いと知るや否や、ルードは不服そうに俺を見下ろして「ノルマ増やそうかな」と呟いて見せたが、俺は脅しの言葉に屈せず、それをやりきって見せたのだった。

「御機嫌伺い」 1

待ち望んでいた休日を得て、俺はコーラルを連れてリーグルの邸へとやって来た。

迎え出てくれた母には「ラエルと会いたい」と言っただけでラエルの様子を窺ってもらおうように頼み、俺たちは玄関のすぐ近くにあるちょっとした庭先の前で待つことにした。

何しろ、約束無しの突然の訪問であるのだから、ラエルに会いたくないと言われてしまったらそれまでだった。

俺の意図を理解し、俺の部屋に行きたいなどと文句を垂れるわけでもなかったコーラルが、言う。

「……しばらくの間が変わったよな」

「は？ 何がだよ？」

「何がって聞かれると漠然としてて答えにくいけど」

呟いたコーラルが、ふと俺に目を向けてくる。いつも見ているような笑顔とかふざけているような顔ではなかった。

「おまえだって変わったよな。ロア。俺と同じように何も考えずに馬鹿やってたはずのおまえが、突然学舎を辞めるわ、この邸を飛び出すわ。何をするかと思ったら、あの『ヴァレン』に入門騒動。難関なはずの正規の試験におまえは運良く合格してるし。しかも、四年もそれを続けてるしさ……」

元悪友であるコーラルの言葉は、意外すぎて、俺を落ち着かせなくした。

コーラルは幼少時代からの、ラエルよりも長い付き合いをしている。それこそ、何をするにも一緒だったし、嬉しいことや悲しいこ

と、叱られたこと、それら全ての時を共有してきた相手なのだ。友人、親友を通り越しての、唯一の悪友と言いきれる人物だろう。そんな相手に、感慨深げに語られて見つめられてなんて、街を騒がすやんちゃ坊主であった『俺たち』らしくなくて仕方なかった。

柄にも無い雰囲気壊したくて、俺は笑った。

「案外、俺には『この道』しかなかったけどな」

悩む日々もあるけれど、後悔はしていない。

思いつつ、自信有りげに言えば、コーラルもぶつと吹き出して笑った。

「やっぱ従兄弟だな！ ケインも言ってたぞ、それ。体力馬鹿の口アらしいよなつて」

「体力馬鹿つて……。確かに、俺のやつてること諸々はカラダを鍛えなきゃ話にならないけど」

「『誘拐事件』のとき、悪党と戦ってほぼ無傷だっただろうが！ あれ、俺たちの中で伝説になってるからな？」

ラエルの『迷子』自体は、街警備の関係者以外には巧妙に隠しきれているものの、あるとき起きてしまった『誘拐事件』のことだけはそうはいかなかった。街を上げての捜索隊が組まれたほどの大騒動だったため、うやむやに済ませることは出来なかった。

結局のところ、現場の第一発見者である俺が悪党を追い払い、攫われかけたラエルを保護した。そんな、根も葉もない噂だけが残った。

（情けねーよな。攫われかけたはずのラエルに助けられてしまったのは、俺の方なのに）

その噂話を認めることも否定することも出来ない俺には、こんなとき苦笑いを浮かべることしか出来ないのだ。

「ロア？」

精一杯苦笑を浮かべていると、母の声が出た。見れば、玄関先にいる母が呆れたように俺たちを見つめていた。

「ロアーツ？ まさか、ずっと外にいたの？ てっきり部屋にいるもの思っていたのに。おかげで探したじゃないの……」

ぶつぶつ文句を言う母の様子に、俺とコーラルはお互いの顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

昔々、こんな風に二人して母に怒られたような気がする。俺の反応もコーラルの反応も正にそのときの再現のようで、俺が思うにコーラルも、母も、その頃のことを思い出しているもおおかしくはないような、共感めいた<sup>シンクロ</sup>空気があった。

「本当にお待たせしました。支度に手間取ってごめんなさい」

母の案内と共にラエルの部屋に入ると、ラエルはカウチに腰掛けしているわけでもなく寝具に身を起こしたばかりの格好のまま俺たちを出迎えてくれた。

「おい、その格好……」

思わず口に出してしまった文句は、最後まで言えなかった。ちらりとコーラルの様子を窺う。コーラルもコーラルで苦笑いを浮かべて

しまっていた。

ラエルは寝巻き姿だった。見覚えのあるというほどその姿を見たことがあるわけではないけれど、ごく普通の基調的なものだったから、多分コーラルだってすぐにそれがわかっただろう。俺とコーラルは、恐らく同時に焦ってしまっていた。

固まった俺たち二人を見たラエルは不思議そうに首を傾げ、母はそんな俺たちに気にも留めなかったかのよように、テーブルにティーセットを並べ始めた。

「ああ、コーラル君は知らないんでしょうけれど、しばらくの間、ずっと臥せていたのよ、ラエルちゃんってば。わたしの言葉なんか全然聞いてくれないし。いいこと、ロアーツ。おまえからもきつくラエルちゃんに言い含めておくのよ」

それじゃあごゆつくりねと、言うだけ言って、母は出て行った。言葉を残されたコーラルも俺も、とりあえず母が用意した茶を飲みつつ、どうしたものかと再び顔を見合わせてしまった。

まず、コーラルが言った。

「深刻そうだな、おい」

どう応えていいものかわからなくて、俺はコーラルに何も言わなかった。

確かに、あの日のラエルははさみを持ち出そうとするほど錯乱していた。

だけど、あれから何日も経っているし、あの日から何も連絡を受けていないし、家に来てラエルに会いたいと母に言ったときも、母は別段いつもと同じ様子だったから、だから、俺は楽観的な思いでいた。心配じゃなかったわけじゃないけれど、悲観的なことを考えるよりかは、元気付けてやりたいとか、笑わせてやりたいとか、

そんなことばかり考えてしまっていたのだ。

でも、まさか、未だに床に臥せっているままとは思っても寄らなかつた。

「お二人ともどうしたんですか？」

思い悩む俺と黙ったままにいるコーラルに、ラエルは不思議そうな顔をした。

ラエルが臥せっていたという事実にはショックを受けて、未だ発言できそうになかった俺よりも先にコーラルが立ち直つたらしく、いつもの脱力感めいた空気を醸し出してラエルに話しかけた。

「ラエルちゃん。ロアから落ち込んでるって聞いたよ？ 大丈夫？」

ラエルの目が見開かれて、その動きが止まった。

「え……ロア様から、聞いたんです？」

コーラルの前だからなのか、ラエルは躊躇うこともなく『俺の名』を呼んだ。

ラエルに主様と呼ばれ始めてから数年が経つたが俺に対する呼び名に関しては、ラエルにとって譲れないこだわりがあるらしかった。

俺と二人、もしくは俺と両親達の四人にいるときは、ラエルは俺を相変わらず主様呼ばわりするのだが。しかし、時と場合とその相手によっては、時たま、ごく僅かな間のみときだけ、俺のことを昔のように『あだ名』呼びするのだ。

とはいえ、この条件に叶う相手は少なく、俺の幼少時代の友人たちの筆頭であるコーラルやケインくらいにしか発動されないが。

ラエルが俺のことを密かに『主様』などと呼んでいるなんて知らないコーラルは、ラエルに笑顔を浮かべたままぞんざいに俺を指差した。

「この間、街の巡回役だっただろうに、ロアってばさ、浮かない顔して落ち込んだまま歩いてたんだ」

「え？」

ラエルが驚いたように顔を上げてコーラルを見つめた。俺もコイツは何を言い出す気だろうと思つて、コーラルを見つめ返した。勿体つけたようにゆっくりと喋るコーラルは、笑顔のままだった。俺にはそれがにやにや笑いにしか見えないのだが。

「辛気臭いから、仕方無しに何かと思つて聞いてみたんだよね。そしたら、ラエルちゃんが落ち込んでるって言うもんだからさ。まあ、俺には直ぐわかったんだけどね。どうせロアがラエルちゃんに酷いこと言つたんだろうって。ね、そうなんですよ？」

「いえ、その……そういうわけじゃ、無いんです」

コーラルの言葉に、ラエルは顔を俯かせてもじもじとしていた。僅かとはいえ、ラエルから言葉を引き出したコーラルがふと息を吐いたのがわかった。よくよく見れば、体に妙な力が入っているのが見て取れた。何気ない会話なはずなのに、コーラルは必要以上に会話運びに集中しているのだ。話の行く先を誘導するために。

「そうなの？　でも、それにしてもラエルちゃんってば、落ち込んでいるままなんじゃない？　もしかして何か、他にも、悪いことでもあった？」

「あの……いいえ……」

俯いたままのラエルは、否定しながらも、やがて押し黙った。恐らく、まだ、あの噂のことを気にしているに違いなかった。

こうなってしまうと、噂のことを知らず、話すわけにもいかない相手であるコーラルには、為す術は無いように思えた。実際、コーラル自身それ以上を聞くことを躊躇っているようで、沈黙が広がっているままだった。

明言を避けるラエルの理由もわかるだけに、どうすべきか俺はこの場においても迷っていた。

(俺が馬鹿みたいに謝り倒すより、話の上手いコーラルにこの場を任せたほうがいいに決まってる。でも……)

認めたくない思いが、俺を惑わす。

俺にだって適材適所とか、役割りとか、得意不得意の意味だってわかるけども。

「埒が明かない。これまでだよ、ロア」

笑顔を絶やさずにいたコーラルが、ふと表情を消して言った。

やんわりとうらかな会話が続いていた人間とは思えない口振りに、名を呼ばれた俺ばかりか、ラエルまで驚いた表情で、コーラルを見ているようだった。

俺とラエルの視線を受けても全然物怖じしないコーラルは、俺にきっぱりと宣言した。

「ラエルちゃんには突然ですまないんだけど……この間の約束を、今、ここで守ってもらおう。というわけで、ロア、出て行け」

コーラルの今までに無い弁舌を前に、俺は為す術も無く、ラエルの部屋から一人追い出された。



「御機嫌伺い」2

認めたくは無理があった。

俺にだって、思い当たる節くらいあった。

漠然とではあるものの、彼女が落ち込んでいるだろう原因が全て、あの噂だけでは無いんだろう、と。

だから、俺はコーラルを呼んだ。ケインにも頼むべきか考えに考えた挙句、コーラルだけを家に呼んだのだ。

（ けど。だからって、やっぱり納得いかねえ…… ）

先ほどのやり取りを、俺は苦々しい思いで振り返っていた。

コーラルの突然の宣言に、俺とラエルが同時に固まったのをいいことに、コーラルは俺をラエルの部屋のドアから、その目の前の廊下へと俺の体を押し出した。

わけもわからないまま、不甲斐なく尻餅をついた衝動で、俺は我にかえった。

「お、おい。よりもよって、何で今」

慌てて立ち上がった俺の行く手を防ぐかのように、コーラルはラエルの部屋のドアの真正面にいて、その腕を伸ばしドアノブを手に握っていた。直ぐにでも閉めようとしているかのように。

「ロア、君、ラエルちゃんとデートさせてくれるって言ったよね？」

「 っい、言ったけどさ！ でも、そんなことラエルには……っ」

「大丈夫。わかってるって！」

一体何をわかっているのか、コーラルは訳知り顔でにやりと笑顔を浮かべるばかり。コーラルにだって、当の本人の意思も無いままにあんな口約束が成立するとは思ってないだろうに。

「ロア。僕は、二人きりにさえなればいいんだよ。つまり、この部屋でも、たった今からでも問題ないわけ。そう、君さえ出て行ってくればね。病み上がりのラエルちゃんに対して何時間もお邪魔するわけじゃないから。ただ、二人で、おしゃべりさせて欲しいだけ。ね、いいでしょう？」

にこにこ笑顔でまくし立てるコーラルは、拒否されるなんて思ってもいない顔をしている。俺がいくら反対しようと聞く耳も持たないに違いなかった。

言質を取られているのが、何より、辛い。

「ドアは閉めさせてもらうけど、心配ならドアに這いつくばって変な物音が聞こえないかヤキモキしていたら？」

俺が思わずものすごい形相をして睨みつけてしまっても、コーラルは何処吹く風といわんばかりに笑顔を浮かべているままだった。

こうなってしまうえば、ラエル自身に断ってもらうしかない。つい、祈るようにラエルを見てしまうが、あの俺にはべらぼうに弁舌の強いはずのラエルは押されているようだった。いつもならひらりと身をかかせていたはずのコーラルの物言いが、余りにも強く押せ押せ過ぎでラエル自身戸惑っているようにも見えた。

このままでは、何時間になるかすらわからないのに、コーラルとラエルを二人きりにさせざるを得ない。

歯痒い思いで打開策を考えていた時、ふと、ラエルが俺を見つめてきた。

何を思って俺を見ているのだろうか。勝手にデートさせるだのさせないだの考えた俺に勝手なことをと腹を立てられていてもおかしくは無かった。

「二人とも本当に仲がいいんだから。ほんのちょっと喋るだけだから、ね？」

そう言ったコーラルは、とうとうラエルの了承を得てしまった。

大満足と言う顔で俺を見たコーラルは、再び俺に近付いてラエルには聞こえないだろう音量で囁いてきた。

「辛抱しろよ、ロア。そしたらいいことが待ってるかもよ？」

「なんだよ、それ」

不機嫌そのままに承えると、コーラルはにやりと笑みを深くした。

「ラエルちゃんと俺の恋仲成就、とか？」

「うるさい！ 下らないこと言うのと仕出かすのだけは禁止だからな！」

退出せざるを得ないこの状況で、そんな台詞を言うのは嫌だったが、何も言わないよりかはましだった。

先ほどまでのことをつらつらと考えつつ、俺は少しだけ廊下を歩き、ラエルの部屋のドアが見えるぎりぎりの場所まで来てから、その場に立ったまま壁にもたれた。

最初はアイツの言うとおりでラエルの部屋の真ん前で待っていてやるうかとも考えたが、言われたままのとおりでは癩に障ったし、部屋の防音性に優れているのは邸の住人として知らないわけじゃなかったたので、いても意味が無いと判断したからだった。

こうなることはわかっていた、再三そう自分自身に言い聞かせても納得がいかないのは何故なんだろうか。

俺は思わずため息を吐いてしまった。

コーラルを連れて来たのは、アイツの言っていた約束を望むままかなえてやるわけではなかった。単にこの間俺が勇気付けられたように、アイツが話し上手だったことを思い出したから、アイツと話せばラエルも元気が出るんじゃないかとそう思ったただけだった。

そもそも、俺や両親以外の人間でラエルが喜んで話したいような知り合いなんて、そうはいないだろうから、俺の従兄弟であるケインも連れて来ようか迷ったのだが……。

(あーあ。やっぱり、誘っておくべきだったか)

(もしかしたら、ケインとラエルとが頭の良い会話をして二人だけの世界を作っちゃうかもって思って、それは嫌だなと思ってケインには声を掛けなかったけど、こんな風にコーラルに追い出されてしまつくらいなら、やっぱりケインも必要だったな……)

そこまで考えて、俺は、また長いため息を吐いた。

「おまえの場合、幸せが逃げるといふよりかは、幸せに逃げられるとといったところだろうな」

「……母さんに聞いたの？ 父さん」

気配を消したわけではないんだろうが、まるでふと現れたかのように父が背後に立っていた。俺が驚かなかったことにつまらなかつたらしい父は、俺が振り返って父の顔を見るまでの間、不満そうな

顔をしていた。

表情を改めた父が、言う。

「ついさつき帰って来たんだが、おまえとコーラル君が来ていると聞いたからな。コーラル君には宜しく言うておいてくれ。彼の父さんは良い仕事相手だ。彼の人の馬の働きにはいつも助かっているよ」

にっこりとした表情をする父に、俺は眉を寄せた。

父の仕事は荷物運搬が主。

でも、決して、一人で行っているわけじゃない。

「父さんってば、コーラルの親父さんといつも一緒に出先に向かっているんじゃないのか？ 当人に直接言えばいいじゃん」

「もちろん、言っているさ。大切な相棒のジャックとトーマスにはな。けども、そいつらの世話主に対して言うには、どうも……気に食わんからな」

肩を竦める父の姿を見るに、俺たち子世代も、父たち親世代の方も似たり寄ったりな付き合いをしているのかもしれないな。

「父さんは聞かないんだな、俺が一人でこんな場所にいる理由」

「おまえが何らかの理由でラエルに追い出されていたのなら、わたしはおまえに決闘を申し込んでいるがな」

相変わらず、この父はラエルの父親代わり気分らしい。熱血方面よりの。

「俺もラエルもコーラルも、三人とも和解の上で、だよ」

「ほう。いやに落ち着いているな」

「どうしようもないからな」

「逃げられるより取られる方が余計に取り返しがつかんぞ？」

思わず、父をまじまじと見返してしまった。

「父さん？ 今の今まで、俺にラエルに手を出さなって態度で示しておきながら、今更そんなこと言うの？」

「それとこれとは話が別だ。第一、おまえはわたしの態度による威嚇なんて気にもしていなかっただろうが」

「父さんの威嚇に気をかける暇なんて無かったからね」

にやりと笑って見せれば、父も俺に釣られたかのように笑みを浮かべていた。

「実を言うと、おまえが廊下にいるような気はしていたのだ。母さんがそう言っていたからな。さあ、その母さんが首を長くして居間で待っているぞ。時期にラエルたちも降りてくるだろうし、先に行っていよう」

気にならないといえは嘘になるが、俺はしぶしぶ父とともに居間へと向かうことにした。

## 「母の思惑」

「ところで、ロア。おまえはラエルちゃんのこと、どう思ってるのかしら？」

快くも昔の頃のように俺の馴染みの席に晩飯を用意してくれた母は、よりにもよってその最中、何の前触れも無く爆弾発言をしてくれた。おかげで、せつかくの晩飯を嘔き出しかけてしまった。

未遂で済んだものの、咳き込むハメになった俺は母を睨んだ。多少恨みがましく。

「母さんまでラエルの母親気取りかよ」

「あら。今だから聞くのよ？ 元々おまえはラエルちゃんにべつたりだったし、他の子に目もくれないばかりか、誓い立てまでしているようだったしね。……でも、その思いは本物なのかしら？」

「それ……どういう意味だよ、母さん」

母はにっこりと微笑んだ。その笑みは父が良く浮かべているような表情にも見えた。思わず母から目を逸らして父の様子を窺えば、俺たちの会話には参加していない当の父は、母の隣に座っていて匙を動かす手も止めぬままもくもくと食を進めているようだった。

ちらりと父に向けていた視線を母に戻したところで、母が、俺に言い聞かせるような口調で言った。

「あの子を引き取ると決めたとき、わたしは彼女の親代わり以上の親になれるようにと心に決めたとわ。もちろん時に甘く、時に厳しくね。……仮にも身元が知れないのだから、何かがあったとき、対処しなければいけないのは『わたし達』であり、彼女の『家族』として当然のことだったから。でも、何処かの息子のほうが酷いく

らいで、彼女に厳しくする必要なんて無かったのだけれど」

可笑しそうに笑う母が俺を見る。思い当たる節はあったけれど、俺は素知らぬ顔をして母の視線を無視した。

「そう、あの子はいいい子なのよ。……とても、ね。おまけに気立ても良くて、頭も良くて。ここ数年は、わたしの仕事ですら手伝ってくれるほど。もう助手と言ってしまっても過言ではないくらい、申し分ない働きをしてくれているの」

ラエルを褒めちぎった母が、一旦言葉を切ってから俺を見た。母の眼がうつすらと細くなる。困ったように眉根を寄せて。

「ロア。おまえには悪いけれど……これだけの条件が揃っていて、そして、誰もが賛成してくれるのなら……わたしはラエルちゃんに

「ルレッツ様！」

母の言葉を遮るような声がした。

「そのお話はもうお止め下さい。わたしには荷が重過ぎると申し上げたではありませんか」

居間の入口に現れたラエルは母の方へと歩み寄り、困ったように言う。対する母は至極残念そうにため息を吐いた。

「もちろん、あなたの意思を一番に優先すべきなんだけど。少しは考えてみてくれたっていいじゃない？」

「ですが……！」

緊迫した空気が二人の間には流れているようだったが、取り残された俺にはさっぱりわけのわからない展開だった。

（あのラエルとあの母が、何らかの意見が食い違い、口論しているだなんて……）

俺は母の隣にいる父にこっそりと尋ねた。

「父さん、一体、どういうこと？」

食事を終えて茶を啜っていた父は、隣へと移動してきた俺をちらりと見て、言い交わしている二人を見てから、ぼそりと呟いた。

何故かいつもの父の声らしくもなく、ぼそぼそと小さな声だった。

「恐らく……後継者にしたいのだろう。この邸の<sup>リーゲル</sup>」

「はあっ！？ 後継者だって!？」

驚く俺に、父は「しっ」と小声を鋭くして人差し指を立てた。が、母もラエルも俺には気を向けなかったようだった。

父はそれを確認してから、俺へと顔を向ける。母の思惑を知っているらしい父は「あくまでルレッセがこの邸の当主だから、わたしは静観するつもりだ」と前置きをした。

説明を求める俺に、父が言う。

「……母さんがおまえにラエルのことを聞いたのは、何故だと思う？ 今のおまえが幾らヴァレンタイン邸の世話になっているからと言っても、おまえ自身が成人でもない限り、おまえはリーゲルの家の者だ。だから、今彼女をこの邸の跡取りと認めるとき、彼女はリーゲルの家を継ぐ者としてわたし達と同じようにリーゲルの名を名乗ることとなる」

父の言葉の意味深さに、俺の頭は一瞬で真っ白になった。

「次期当主候補、ラエル＝リーグル。どう見てもおまえより幼く見えるから、おまえの妹としてこの家に入ることになるのかもしれない、ということだ」

「マジかよ……」

それは、俺の望んだ未来を一撃で破壊してしまえる威力があった。

「仮の話だ。母さんが一番の乗り気だが、肝心のラエルがああも頑なに意思表示しているし、有りえんとは思うが……」

父の慰めのような言葉が聞こえてくる。それがわかるのに、事態に着いていけないでいる頭が麻痺してしまっていて、何も言葉が出てこない。

（有りえない、のか？ ……本当に？）

考えを巡らせようとしたとき、直ぐそばにいる父とは違う別の人物に俺は肩を叩かれた。

「けどさ、ロア？ 仮にそうなったとしても、おまえの片耳の相手はラエルちゃんだったことを街の皆の大半は知ってるから、別の意味でも勘違いされる可能性だってあるぜ？ めちゃくちゃ小さな可能性の一つだけだね」

「って、コーラルいつの間に!？」

訳知り顔で俺に語りかけてきた悪友は、俺と父との視線を受けても平気そうににこにこ笑っている。

「あ、リーグルさん、いつもお世話になってます！ さつきラエルちゃんと一緒に部屋から降りてきて、晩御飯頂きに参りました！」

ちゃっかりしているコーラルらしかった。母が念のためにと用意していた五人目の晩飯をいつの間にか平らげてしまっている。

父はコーラルに笑顔を向けているが、仕事面っばい笑顔を浮かべたようだった。

「どうも、コーラル君。ラエルのことだが、この愚息のこと世話になってすまないね。しかも、このような騒ぎに巻き込んでしまつて……」

「いいえ、そんなお気になさらず。僕はラエルちゃんのことが大・大好きなんで！ 彼女の力になれるのなら本望ですよ！」

「あっ！ てめえ、コーラル！！ どさくさ紛れに何言つてやる！」

父の前で恐ろしい発言をしたコーラルに、俺は先ほどのヤツの攻撃の仕返しを仕掛けたが、軽くかわされてしまった。

「そんなことより、ロア。おまえ、どうするのさ？」

「ど、どうするって言つたつて……」

コーラルの鮮やかな切り返しに、俺は口ごもった。

「片耳開けたのだから、秘密の首飾りと指輪を渡していたのだから、そもそもおまえが一人で勝手に片思いしていただけだからだろ？ このまま手をこまねいていたら、ラエルちゃん、おまえの妹になつちゃうかもしれないんだろ？」

我が耳を疑った俺は、思わずコーラルを見返した。

「おまえなんで首飾りのこと知って　っ！」

瞬間、隣にいる父が冷気を発しているような気がしたが、俺はそれを無視した。

俺だってそれ所ではない。

俺の前ではたった一度も身につけてくれたことは無かった首飾りはもちろんのこと、その先に付属している指輪のことまで、どうしてコーラルなんか知っている。俺なんかよりも、コーラルの方がラエルに会えている数は少ないだろうに、どうして。

「……さあ、何故でしょう？」

幾ら睨みつけてみたところで、含み笑いを浮かべるコーラルは俺に話す気なんて毛頭なさそうだった。

「いいだろう、その件はまたの話にしよう。それで、ロアーツ。このままでいいのか？ おまえはこの事態、どうするつもりなんだ？」

父までもが、コーラルの爆弾発言を何処かへと追いやって、俺をけしか嚇けている。

俺は、なんだか、かっと頭に血が上った気がした。

（俺は……確かに、一人で、勝手に、思っただけだったけどっ！）

無理強いして嫌われたら嫌だから　なんて、問題を棚上げにしていただけのただの言い訳でしかない。

( 嗚呼、なんとかしなくちゃ！ このままじゃ、何のためにラエルに誓ったのか、ワケわかんないままにされちまう！ )

俺は勢いそのままに大きく息を吸い込んだ。

「ラエル！」

俺の大声に、母とラエルとの口論が止み、この場にいる皆が皆俺のことを見つめているような気がした。

「秘めていたもの」1

問答無用で居間からラエルのみを連れ出すことに成功した俺は、引つ張つてきた彼女の腕を解放してから、向き直った。

「ラエル。大事な話がある」

「わたしもあります」

俺が強引に連れ出したにもかかわらず、ラエルは大人しく俺についてきてくれたのだが、ラエルにはラエルなりの思惑があったらしい。

「おまえのから聞くよ。何の話だ？」

「先ほど、ルレッツ様にも言いましたが……、わたしはリーグルの家を継ぐ気はありません」

潔いほどキツパリした宣言だった。

「本当に？」

それは俺にとって願っても無い言葉だったが、ちゃんとした理由みたいなものが聞きたくて、ついつい尋ねてしまっていた。

「本当です。邸宅の当主の身分なんて……。このことがルレッツ様のご好意によるものだとしても、色々な意味でわたしの存在が周知されかねませんので、そのようなことはつきり言って望んでいません」

「……けど、以前から母さんの打診はあったんだろ？ 今のおまえはあくまで居候と言う形だから、後ろ盾としてリーグルの名を名乗

れることは」

「それは、それです。身元のことなんて今更」

俺の言葉を遮ったラエルが、不安そうな顔をして俺に尋ねてきた。

「主様。主様の大事なお話ってなんです……?」

ラエルに促された俺は何と切り出そうか一瞬迷ってしまったものの、意を決し、真っ直ぐにラエルを見つめた。

「コーラルが首飾りのことを知ってた。それどころか、指輪のことすら知ってるらしいんだけど、どういうこと?」

ラエルが、はっと息をのんで俯いた。そしてそのまま黙ってしまった。ラエルは、俺への返答をしないつもりだった。

「それは……あの」

必死に何か言い訳を考えているようだった。

いつもならこうなってしまう場合見逃してやるけれど、今回はそんなつもりなかった。俺はラエルに近付いて、直ぐそばまで歩み寄る。俺の動きに気付いたラエルが慌てて後ずさったようだったけれど、俺の方が早い。これ以上距離を取られないようにとその腕を掴み、掴んだまま俺は別の手でラエルの首元に手を伸ばした。

探れば、服の下に硬い触感があった。その硬い何かが彼女の首から提げられているのが、俺にはわかった。

「っ  
!」

ラエルが身を震わせている。

「あ、あの　っ!？」

どもるラエルが、怯えたように俺を見上げてくる。あえてそのままの体勢で俺は囁いた。

「これ、何をつけてるんだ？」

すぐさま、彼女の視線が下に落ちてうろつろつと彷徨った。どう答えようか必死に考えているようだった。

「素直に言えよ。　じゃなきゃ、俺、直接接触って確認するぞ」

「　ろ、ロア様っ!？　そんなことするんですか!？」

慌てた声が、俺の名を呼んでしまっている。

まんまとひっかかってくれたらしい。

(　　そんなことって、一体何考えてるんだか……)

ものは試しにと、さっき首元を探った手を彼女の体の下の方へ、体に添って鎖骨辺りにまで下ろしてみる。いかにも、ゆったりとした動きでだ。

「あっ　　!」

びくりと震えたラエルが、俺の前で目をぎゅっと閉じてしまう。思わずほくそ笑んでしまった俺は、本当に邪な思いに支配されてしまう前に、今度こそ目的のブツへと狙いを定めた。

彼女の腕を掴んでいた手を離すと、俺は両手で彼女の服の首元を留めるボタンを外し、はだけさせる。首にある見覚えのあるような

鎖を見つけ、それを引っ張ればあっという間にそれは顔を出す。

ラエルが慌てたように鎖を押さえてももう遅い。

俺は、もうそれを目にしてしまっていた。嬉しさにいつの間にか笑ってしまっている。体中がこの歓喜に打ち震えている。

そう、俺の目の前には、あの日贈った首飾りに繋がれた指輪があったのだ。

「にしても、見事に引っかかりやがって。馬鹿だなあ、ラエル」

顔を真っ赤にしたラエルが「ずるい」とか「ひどい」とか小さな声でボソボソと文句を言っているのが聞こえたような気がしたが、取り合わないで俺は聞き流してやった。

鎖を手にし、もう片方の手で指輪を手に取り弄くりつつ、俺はラエルの耳元に顔を寄せてこれ見よがしに囁いてみせた。

「首飾りのこと、嫌がってたくせに」

笑い混じりに囁き、彼女の顔が見れる位置まで少しだけ離れれば、頬を薄桃色に染めて恥ずかしそうに縮こまっていたラエルの様子が一転し、俺を強い眼で睨みつけてきた。

離れたとはいえ、彼女の首に提げられている指飾りをもてあそんでいる俺と彼女との距離は近く、正に至近距離だった。だから、お互いがお互いの眼を間近で見るハメになった。

「だ、だって！ あなたが、わたしに……お、贈ってくれたから！

だから　っ

「だから？」

ひるまないようにと腹を据え、俺はラエルを見返した。  
かわさる視線。

間があつてから、ラエルが耐えかねたといわんばかりに、また顔を背けてしまった。

「っ！ もう、いいですー!!」

体中に満たされた満足感に俺の気が緩んでしまっていたのか、それとも常の彼女ならば有りえないほどの馬鹿力が発揮されてしまったのか、ラエルは俺の首飾りに伸ばしていたそれぞれの手の拘束から逃れ、俺から距離をとるように数歩離れ背を向けるように在らぬ方を向いてしまった。

どうやら、拗ねてしまつたらしい。

「ラエル？」

手元から離れてしまった彼女の存在が寂しくなつて手を伸ばすけれど、ラエルは俺の気配を察したのか更に距離を開けられてしまった。

「もう、知りません！」

後ろ背を向いたままラエルが文句を言った。

距離を開けられて今や背中しか見えない状態だったが、ラエルの耳が真つ赤なのがわかった。多分、さつきよりも色味がついているのだろうか。両手で顔を押しさえて隠しているつもりらしいがまったく持って意味を成さないでいる。

（ ああ ）

そんなラエルを見て、俺はむしろ泣きたくなつた。いや、笑い出したくなつたというべきか。叫びたいという気持ちもある。

（ ああ、参った ）

思わず天を仰ぎ、顔を手で抑えるけれど、どうしようもないんだろつと俺は諦めた。

ラエルだつて隠しきれていないのだから、俺だつてにやけきつた口元を隠せないに違いない。

「 あつー！ 」

距離をとられたからつて、近づけないわけは無かつた。俺は無防備に背を晒しているラエルを後ろから抱きしめた。俺と頭一つ分くらい背丈が違うラエルの体は小さくて、逃れようとする動きを抑えるのは容易くて。そのすべてが、どうしようもなく愛<sup>いと</sup>おしい。

「 ラエル 」

彼女にだけ聞こえるような声音で囁けば、ぴたりとその動きは止まつた。

「 ラエル……好きだ。四年前も、今も、変わらずにラエルを好きなんだ 」

そのままの体勢で彼女を呼び続ければ、観念したのか、腕の中にある体の力が抜けていくのが俺の腕に伝わってきた。

## 「秘めていたもの」2

首飾りを手にしたそのときから衣服の下にこっそりと身につけていたのだと、ラエルは恥ずかしそうに白状してくれた。

「じゃあ、なんでコーラルが知ってるんだよ？」

部屋のカウチに座った俺が疑わしい目をしたままラエルを見れば、俺の隣ではなく俺とは斜め向かいに位置するそれに座ったラエルは肩を竦めて見せた。丁度、俺が肌蹴させた服の襟元を直したばかりだったからなのか、胸元を守るかのようにぎゅっと身を縮込ませている。

「言っておきますが、わたしからは見せた覚えも無いですし、主様と違って触れられた覚えも見られなかった覚えもありませんから！」

じとりと恨みがましい目をしているラエルは相当腹に据えかねているらしいが、そんなことを言われても、俺には皮肉にすら思えず只単にこの俺を安堵させるものでしかない。

しかし、それならば余計に疑問だけが残るのだった。

（何故アイツは知っていたんだろう。何故、わざわざそれを俺に伝えてきた……？）

「ラエルはわかるのか？ その……コーラルにいつばれたのか、とか……？」

俺の言葉にラエルは体勢を戻し、視線を遠くへ投げてから再び話し始めた。

「主様が学舎を出てから、学舎への道の行き帰りを付き添って  
くれているコーラルは、あるときより、妙に生き生きしているらしいわ  
たしに気付いたそうです。学舎の授業とかではなく、何ら特別なこ  
となど無いはずの通学途中に。……でも、直ぐにわかってしまった  
とコーラルは言いました。この邸と学舎の行き帰りには、絶対に街  
外門を通らなければいけないのですから。だから、その道を通ると  
きのわたしの様子に確信を持ったらしいのです。やがて、コーラル  
は気を回してくれたのか、わたしたち二人が辿る道すじも変わって  
いて、不自然なほど遠回りをしてヴァレンタイン邸まで通るように  
なっていました。……わたしは、そんなこと全然気付かなかったん  
ですけど」

ラエルの語るそれは、まるで俺の質問の答えとはとても思えない  
昔話のような話だった。

「おい、ラエル？」

目で言いたいことを問いかければ、まだ続きがあるからと苦笑で  
返されて。

「わたしは、見ていただけでよかったです」

話を続けたラエルは、何がと言わなかった。

「ただ見る事が出来たなら、その姿が見れさえすればわたしには  
それで良かったはずだった。なのに、いざその姿を見かけてし  
まえば、ずっと見ていたくて姿を目で追いかけるうちに立ち止まっ  
てしまっていて」

一向に『何』に対する話を名言しないラエルだったが、黙って聞いているとそもそも話の趣旨のことなんて頭から抜け落ち、想像に夢を膨らませて俺はこそばゆい気持ちになった。落ち着かなくなつて、口元に手を当てたり、後ろ頭を搔いてみたりしたが、一向にそれは収まってはくれなくて。自惚れもイトコロだったけれど、俺には思い当たる節が　兄弟子達の冷やかしか、知られていた仕事内容のこととか　もしかしてと思う心が、暴走してしまいそうになる。

「人知れず、わたしは　身につけた『それ』を握り締めるようになっていました。誰にもわからないだろうからと、わたしは安心してきました。だって、服の下に入れてるんですよ？　ばれるはずないと思っただんです。仮に誰かが、胸元を握り締めていた格好のわたしを見たとしても、『具合が悪い』程度にしか思わないだろうとそう思っていたのに……」

ラエルが、ぎゅっと胸元の服を掴む。

見れば、そこに何かがあると知らなければ、確かに体調が悪いのかと疑ってしまうのも無理は無いだろうと俺は思った。そしてよく思い返してみれば、以前にもそんな仕草を取っていたような気さえしてくるから不思議だった。

「主様。　やっぱり、順序だててお話します。さきほど、コーラルと話をしていたときのことなんです……」

ラエルが一層強い力でそれを握ったのだろうか、衣服に走る皺の深さで俺には見て取れた。

「ついさっき……コーラルは告白して下さいました。わたしのことを好いて下さっているようなんです」

「なっ　！」

俺は一瞬、息が止まったような気がした。  
多分、思考も体も。

が、次の瞬間、すべてが大慌てで瞬く間に動き出していく。

（　　）　　やっぱりアイツ、色々と仕出かしてくれてるんじゃないかっ  
（　　）

俺はすぐさま身を乗り出してラエルの肩を掴んで揺すぶってしまった。  
った。

「ラ、ラエル？　なんて答えたんだよっ！？」

焦る俺の内心を知らぬだろうラエルは、俺の取り乱しようも気にすることなく一度微笑んだが、伏せ目がちにして俺の視線を避けたように見えた。

はっとして、俺の頭に絶望の類の二文字が浮かんだが、ラエルはゆるゆると横に頭を振った。

「思いを告げてくれたコーラルに何と言えば良いのかわたしはわからなくて、わたし、黙ってしまったんです。コーラルは笑っていたけど、悲しそうでした。やがて何も言えないままにいると『何故何も言っはくれないの？』と言われてしまっ……。それが『当然の反応』だということに、わたしは目が覚めるような思いがしました。思い当たったその瞬間、わたしの頭に過ぎったのは、目の前にいたはずのコーラルではなく……あなたでした、主様。わたしのことを何も聞かないでくれていて、わたしが話したせる日が来ればと待っていて下さっているあなたのことを。　　気付いたら、またわたしは首飾りを握り締めていました」

俺は彼女の肩を掴んでいた手を離した。

たまたま今回ラエルに言い寄ったらしい男が友人で悪友なコーラルだったが、ラエル自身は何度かはこんな機会があっただろう。なのに今までのラエルがこんな表情をして告白されたのだと語ることもなんて、無かったことだった。

そう、唐突に俺は思ってしまったのだ。俺はどうしてこんな話を平然と聞いているのだろうか。

(ラエルが『それ』を身につけていると知らなかったら、俺は……  
一体今……)

俺は無意識に拳を握りしめていた。

「そのとき、初めてコーラルの笑顔が無くなって、無表情になって今思うと少し、その変化に驚いてしまったんです。いつも笑顔しか見たことが無かったんですから。けれど、すぐさまコーラルは元のような笑顔になって『それ、大事なものなんですよ？』って言ったんです。わたしは無意識にこの仕草をしてしまっているらしく『隠していたんだろうけど知っていたよ』って、コーラルは微笑んでくれたけど……」

ラエルは服越しに首飾りを触るのを止めて、今度は俺に手を伸ばしてきた。膝の上で拳を作っていた俺の両手を一まとめにして掴んでくる。もちろん、彼女の手の方が小さいのでまとめきれないし掴みきれないかったが。

冷たいラエルの手がぎゅっと俺の手を握った。

「あれが、初めてだったんです。あんな暗い表情をしたコーラルを見たのは。ごめんなさいって何度言っても、コーラルは頭を振るだ

けで、困ったように微笑もつとすただけで……」  
「そっか……」

まるで自分が泣いてしまっているかのように顔を俯かせ、沈んだ声でラエルが言う。

俺は合間合間で頷くだけに留める。とつとつと話をしてくれるラエルの言葉を全部受け止めてやりたかった。

「『謝ってほしくない。受け止めてくれないのなら、ちゃんと振ってくれないと困るのに。欲しいと願っても僕を拒絶するその言葉すら君はくれないんだね』って……。わたしは必死になって考えました。コーラルに言うべき言葉を、コーラルが望んでいる言葉を」

ラエルが一層、手を強く握ってきた。

「でも、結局、わたしはコーラルに何も言えなかったんです。『あなたに伝えなければいけない言葉を言う前に、わたしも伝えなければいけない相手がいるから、待つて欲しい』。そう言ったら、コーラルはやつといつもと同じ笑顔で笑ってくれました。『それで、十分だから』と。そして、話を終えたわたしたちは部屋を出て共に食卓場へと行きました。……まさか、既に済んでいたと思っていた話を掘り起こされていて、よもやルレッセ様が主様をわたしに対する説得要員目当てに働きかけていたのには驚きましたけれど……」

ラエルは、俯かせていた顔を上げて俺を見上げた。

「どうか、お願いします。主様。先ほどのお話とはまた別ですが……、思いを告げてくれたコーラルのためにも、わたしはあなたに話さなければいけないことが、お伝えしたいことがあるんです」

コーラルとのやり取りを語り終えたラエルの目は今にも涙が溢れそうになっている。

「わたし、あなたにこそ伝えたいんです。主様。名も知らず、身元もわからず、追われ身の上でしかないわたしを、ラエルと呼んでくれるあなたに。わたしにラエルという名前をくれた主であるべきあなたに……」

告げてくれているそばから、とうとう一滴、涙が零れ落ちた。

次から次へと、後を追うように。

「わたしの存在が判明して。あなたに害を成す存在でなければ。法を犯した罪人で無かったなら。もしも、ただの人であれば。わたしは、頂いた指輪を嵌めてもいいですか？ あなたのそばに……いてもいいですか？」

### 「秘めていたもの」3

握られていた手を払い、俺はその手を引っ張った。俺の座るカウチの方までくつついて来た体を加減もせず力任せに抱きしめたときには、ラエルは身を震わせてしゃくり上げるほど泣き始めていた。服が濡れる冷たさを感じたが、そんなことすぐに気にならなくなつた。

俺の背や胸辺りに回つたりする何かの存在は他でもない俺のものとは違う手の平で、その感触があつた。服が掴まれて、縋ってくるような指先の動き。触れ合つてゼロになった距離の中、漏れる吐息は直接響くようで耳に心地よく、お互いの体は熱を持ったように熱かつた。

夢見るような心地でひとしきり抱きしめてから、俺は背に回していた両腕の片方を解き、その手でラエルの顎をそつと持ち上げる。

「未練たらしくおまえを思い続けている俺の答えなんて、一つに決まってるだろ？」

馬鹿だなと呟けば、ほろりとまたラエルの眼から涙が零れ落ちた。流れていくその軌跡が美しく、泣き笑う彼女の表情がそれ以上に綺麗で俺は吸い寄せられるように近付いて、その涙を掬う。舐めれば、僅かに塩気がした。

頬の下に落としたり唇をそのまま涙の跡を追うように口付けていく。柔らかな頬に、つぶらな目を覆う脛に、涙の跡が残るこめかみに飽きるほどそれを繰り返して、最後に額に優しく口付けてから、俺はすっかり泣き止んだ様子のラエルに笑いかけた。

「おまえがどんな存在でも関係ない。俺がおまえの主である限り、おまえは俺のラエルなんだから」

「主様……」

調子が戻ってきたらしく、またその呼び名で俺を呼ぶ。

つい出鼻をくじかれたように思えてしまい、それを誤魔化したかった俺は苦笑にも似た笑いを浮かべてしまった。

「俺が言ったことだけどさ。今は、それ、言うなって」

顎元に伸ばしていた手でラエルの唇に触れれば、ぴたりとラエルの動きが止まり、頬を紅く染めてくれた。俺が何をしようと思っっているのか感付いたのかもしれない。

腕の中の体が僅かに身じろいだような気がしたが、なんてことはなく俺の片腕の力に及ぶほどではないもので、やがて身動きを止めたらエルは困ったような目で俺を見上げてくる。先ほどまで泣いていたその眼は魅惑的に潤んでいて、背筋を走る何かを感じて俺は体が奮い立つかのようだった。

ごくりと息を飲む音がしたかと思うと、それを皮切りにラエルがゆっくりと目を閉じた。

「ん……」

触れれば、彼女の吐息が甘く響く。

四年前の告白のとき以来の口付けは、俺のものとは違う柔らかさが変わらずにあった。閉じていた目を薄く開け、ラエルが大人しく目を閉じてじっとしているのを目で確認した俺は、彼女の頬に置いていた手をずらして頭巾を外すと、現れた柔らかな髪を撫でた。前に見たときよりもまた赤みを増した茶色になっているような気がした。

息継ぎの間に角度を変えて、また触れ合う。口付けを楽しみ、彼女の髪の滑らかさや指どおりすら楽しんでいると、口付けたままの

ラエルが笑っている気配がした。

「な、なんだよ？」

気になって口付けを止めれば、思いっきりクスクスと笑われてしまった。

「もう。ぼさぼさになっちゃったら、ロア様のせいですよ？」

ラエルは文句を言う割りにはおかしそうに笑っているようだった。そんな表情をしているラエルと口付けていたときそのままの距離でいるのはとても新鮮な思いがしたが、一度目はあのときの告白のときで、今が二度目なのだから、慣れたような感覚では逆におかしいことに気付いた。

額と額を寄せ合えば、ラエルの微笑みが変わる。苦笑から、恥ずかしそうな笑みになり、やがては困ったような微笑みへと。

何に対して困っているのかは知らないが、困ったように眉根を寄せて微笑んでいるその表情が俺は好きだった。もっと困らせてやりたいと、常々思っていたのだから。

触れ合わせていた額を離して、にっこりと満面の笑みを浮かべてから、俺は再び彼女に近付いて 迫る。ラエルは何の躊躇いもなく俺を受け入れてくれた。俺の思惑はだまし討ちといえるような気もしたが、言質に近い言葉を耳にしていた俺に恐れはなかった。

再開した口付けの合間、俺はおもむろに舌で彼女の唇をぺろりと舐める。閉ざされていたはずの唇は僅かに力を失い、俺の進入を簡単に許してしまった。

暖かい口内に、俺は我を忘れた。そろりと入り、確かめるように辺りを探ったくせに、いざ彼女のそれを見つけてしまえば、すぐさまに追いかけて逃げ場など無い彼女を追い詰めてしまった。

何度も言うが俺は彼女と口付けたのは二度しかない。何度もした

のだった。今が初めてだし、どうすれば良いのかわからない……とは言わないが知識だけがあるだけで、他にしたい相手もいなかったし、興味本位で女を買いに行くような真似はしたくなかった。ラエルという恋う人がいる俺に必要とは思わなかったし、それをラエルに知られてしまえば気まずい以上の思いをするとわかりきっていた。だから、今まで男女の口付けくちつけをしたくても出来ないわけだったのだ。今初めてラエルにそれを行っていいのに、不思議と俺は取り乱していない。それ以上に無我夢中なせいだろうか。それとも、やっぱり本能がそれを知っているのだろうか。

俺はさっきまで髪を撫でていた手をラエルの後ろ頭に回して、もう片方の手はそのままラエルの細い腰を抱えるように抱きしめている。いつの間にかラエルを逃がさないようにしていたようで、俺の本能は恐ろしくしたたかだった。

俺もラエルも、いつの間にか呼吸がままならなくなって肩で息をしていた。繰り返す呼吸は限りなく熱を持ったもので、口付けの合間に漏れ出るラエルの声は常とは明らかに違っていた。力を失っていくラエルのまるで眠たそうにとろんとした目は、俺に女という異性を意識させるものだった。

変わり行くラエルの姿と行為の音と相まって、気が急いでしまいそうになる。体の一部がまずいことになっていることは既にわかっていたが、とてもじゃないが口付けをやめようと言う思いにはなれなかった。

俺はその先を考えないようにして目を閉じた。意思を持って彼女との口付けを存分に味わった。

( どうか、このままで…… )

離れたくなかった。憎からず思ってくれているのだとわかっただけに、今までの想いが爆発しそうだった。……けど、そんな言葉自体『物は言いよう』なだけで単にやめられないだけだった。ずっと、

こうしていたかった　　したかっただけだ。

ラエルが泣きそうな声になっている。いや、泣いているのかもしれない。俺は今どう考えても自分よりも無力な相手に襲い掛かっている。自分よりも強力な相手に身動きを封じられた彼女は、さぞかし怖かるう。恐ろしいだろう。

（俺は、嫌われたくなんてないのに　　）

その瞬間、突如放たれた衝撃　　激しい波のような熱が痺れを伴わない俺を襲った。

「　　うあっちいいいいいい！！？」

「　　痛っ！？」

俺はすぐさまラエルの体から離れると一番痺れている手を確かめた。両手だけではない、体全身が火傷したかのような熱ととても巨大な静電気が身に走ったかのようなだった。耳をすまさなくてもぱりぱりだのびりびりだの、未だ体内に残っているような音がする。

熱を逃そうとして手をブンブン振り回しつつ、俺はラエルの左腕を見つめてやはりと唇を噛んだ。ラエルの着ている衣服の袖の下、銀の細工が美しい彼女の腕飾りらしきものが淡く光を発していたのだ。

と、そこで、俺は情けなくも悲鳴を上げてしまった一瞬のとき、当のラエルの声を聞いたことを思い出した。

「ラエル！？」

「　　っっ」

見れば、カウチに横たわり痛みを耐えるように眉根を寄せてラエ

ルは息を殺している。慌てて駆け寄ったものの、何故ラエルまでそんな表情をしているのかわからなくて、俺は焦った。

「どうしておまえが、腕輪の？」

「そのほうが、効果的だと思ったままでのこと……久しいな二人とも」

部屋に響いた声は、以前聞いたものとは寸分変わらない人の声とはとても似つかない人外のような声色。突如放たれた電撃の原因は、ここしばらく交信を控えると宣言していた腕輪の主直々のものだったのだ。

「放たれた光」

「腕輪……何故……ロア様にこんなことを？」

呆然と呟くラエルは、何を思ったのかぎゅっと右の手のひらでそれを覆った。

「効果的って、どういう意味ですかっ！」

ラエルは先ほどの状況を忘れているのだろうか、若干怒っているようにも見えた。……きっと、俺の勘違いなんだろうが。

現に俺は何故こんな攻撃が俺自身に放たれたのかは猛烈に理解している。だから、なんとも言えない思いのまま、ただ黙っていた。話の矛先が俺に振られるのもある意味当然だった。

「おまえに伝わらずとも相手に伝わればいいと、そう思ったまで。

わかるだろう、ロアーツ殿？」

俺は腕輪に何と言って良いのかは未だ考え付かぬまま、ラエルにだけ向き直った。

「いきなり、ごめん。……俺、無理やりだった。俺のせいで痛くなかったか？俺は自業自得なのに、まさかいくらなんでもラエルまで……」

「でも、あなたはわたしを付け狙う追っ手の類ではないのに！」

ラエルが俺を庇ってそういうことを言ってくれるのはありがたかったが、俺はそうしてもらえばそうしてもらおうほどこの場に居たたまれなくなった。

( いや、ある意味そんな奴らよりもよっぽど身の危険を感じるようなことをやらしかけたんだけどな、俺…… )

「 成る程。よほど、おまえは好いているらしいな。ロアーツ殿のことを」

腕輪の声の主自身の声だろう声が、若干低くなる。実際に合間見えでもしたら凄まじれているんじゃないかと勘違いしてしまいそうに成る程の声だった。

「 なっ それは……」

「 ラエルはラエル自身の身元がわかるまで俺に想いを伝える気は無かった。そんなの、俺に言わせたら『 想いを伝えてくれた』も同然にしか思えないんだけど……」

ラエルは口を噤んでしまったので仕方なく俺が腕輪に答えたら、腕輪の声が笑った。

「 つぶ。何とわたしは……残酷なのだろうな？ 後悔しても、もう遅いと言うのに」

そのとき、意味深な腕輪の声に聞き返す間もなく、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「 何、なんなの！ 今の声は!？」

俺とラエルとだけがいた部屋に母と父とコーラルが入ってきた。結構な叫び声を上げてしまっていただけに事態を聞きつけたらしかった。

3人とも不思議そうな顔をして、まずラエルを見て、俺を見て、そして一様に首を傾げた。

「おかしいな？ ラエルちゃんが悲鳴を上げるんだっいたらまだわかるんだけど、何で男のおまえが馬鹿みたいに悲鳴なんか上げちまってるんだ??」

「コーラル！ おまえ今なんて言った!？」

「ロアーツ、答えなさい！ 一体何をしたの！ 何があったの!？」

コーラル並びに母は、俺がてつきりラエルに如何わしいことをして懲らしめられたように思ったらしく、彼女を救うという名目の下喜々として笑い飛ばしに来たかのようでした。

(本当は否定すらできないにしても、酷いよなあ。……皆考えるのは同じってか?)

(だから俺は、腕輪の声に制裁を受けるハメになったってことか……)

「ラエル。一体何があった？」

一人落ち込んでいると父は俺相手ではなくラエルに尋ね、彼女だけを見つめている。いつになく低い声で怖い目をしている父から一歩後ずさるラエルが、腕輪に手をやり隠すような動作をしているままだにすることに俺は遅れて気付いた。

ラエルの手の下にあるはずの腕輪は、その隙間からも光を発しているのがわかるほど明々としている。腕輪は、未だ光を放ち続けているのだ。

「あ、あの父さん！ これには深いわけが っ」

答えられないに違いないラエルを庇おうと、父の視線を遮る様にして俺がラエルの前に立つ。

父の眼が、訝しげに細くなった。

(やば、まずった……っ！)

父は何かを確信したような目で俺を睨みつけてくる。緊張に冷や汗が流れ始めようとしたとき、ラエルが悲鳴を上げた。

「やつ、だめ　！」

はっとして振り返ったとき、見覚えのあるような真白い光が、ラエルの腕輪から放たれた。

(あのときの、光　！？)

我知らず、その光を浴びないようにと目を閉じて顔を守るように腕を伸ばすけれど、瞼の裏に焼きついた白い光ははつきりと残ってしまっていた。

残像が消え去るのを待ってから祈るような気持ちで目を開ける。まず、場の状況を確認しようとして俺は異変を調べた。腕輪を抱え込むような体勢で震えているラエルの姿を確認して、一息。俺と目が合うと気が抜けてしまったかのようにその場にくず折れてしまったので、慌ててそばによって身を起こしてやる。

気を失っているわけではないらしくラエルの体を支えるようにしてやると、その瞬間、腕輪の音が僅かに聞こえた気がした。何かを呟いている。その声は小声だったがそのせいで判別がつかないわけではなく、俺にはわからない言葉を読み上げているようだった。

そう思ったとき、腕輪の声の呟きが一転して明瞭なものに変わる。

老人でもない子供でもない大人の男の囁き声が、俺の頭に語りかけられたかのように発せられた。

催眠を掛けた。話を聞かせてもいいやつだけを残せ。残せぬものにだけ名を呼びかけよ。

腕輪の声に驚いて息を飲んだのは、俺だけではなくラエルもだった。触れていた体越しにラエルが体を震わせている。「そんな」と、非難するような呟く声があった。

催眠。      なんて、穏やかではない言葉の響き。

過去に俺はラエルの不可思議な腕輪の力を身に受けたことがある。そして、そんな有りえないことが起きてしまうことを知ってはいる。

しかし、だからといって、こんな風に人が人の意思を操ろうとしているなんて、目の当たりにしていたとしても普通ではないおかしなことであり、余りにも現実味が無い気がして頭がおかしくなってしまうそうだった。

見れば、母と父とコーラルは、突っ立ったまま呆けたような顔をしている。腕輪の声を信じるのなら、あの光を介して腕輪の主が彼らに何かを働きかけたとも言えるのだろうか。

「……コーラル」

ラエルが俺の悪友である友人の名を呼ぶと、また腕輪が光った。コーラルはその光に眩しそうに目を瞬かせたかと思うと、ふらふらと歩行し、部屋を出てしまった。

「おい、コーラル!？」

慌てて俺が後を追いかければ、コーラルは部屋を出た直ぐの場所に横たわり目を閉じていた。思わず呼吸を確認すると静かではあったが息をしている。規則正しく上下する胸辺りを見るに摩訶不思議ではあるがただ安らかに眠っているかのようだった。

『他の者は良いのか？ 二度手間はしたくない。早くしろ』

語りかけてくる腕輪の声に釈然としないまま俺はラエルのそばに戻ると、ラエルは意識を失っているような状態の母と父を部屋のカウチに座らせているところだった。

「主様。お二人を起こします。いいですよね？」  
「俺はおまえさえ良けりゃいいよ。腕輪はおまえの話をするらしいしな」

戸惑いを浮かべるラエルに向かって俺が軽口を立ててもラエルは曖昧に微笑んだだけだった。

あの満月の夜の夜、俺に腕輪を託したとき以上に浮かない顔をしている。無理も無いと思った。目の前で起こったこととはいえ、俺だって俄かには信じられなかったし、今から腕輪が行おうとしていることを母も父も信じるかは俺にだってわからない。ラエルが不安に思うのは当然だった。

カウチに座るラエルのそばに腰を下ろした俺は、華奢な体を引き寄せた。凭れ掛かってくる体をそのままに、丁度すぐそばにあった左の腕の手を握ってやれば、ラエルも俺の手に縋るように握り返される。怯える彼女を元氣付けてやりたくて、俺は手に力を込めた。

「大丈夫だ。俺がついてる」  
「……ありがとう。主様」

俺の思いが通じたのか、ラエルがホッと息を吐いた。

「では、いきます」

掛け声とともにラエルは両手を上げて　ぱんと、一度拍手した。

「明かされる理由」 1

二人が、目覚めた。父と母に何が起こったのかは正確にはわからないが、一瞬気を失ったようなものだったのだろう。ぱちぱちと瞬きを繰り返している間二人は無言だったが、俺とラエルとが二人の向かいのカウチに隣り合うように座り手を握っているのを見、そしてラエルと繋いでいる手の腕の光に気付くと、母は怪訝そうに小首を傾げ、父は眉根を寄せた。

「二人とも大丈夫か？ 変な感じとかは無いんだよな？」

確認すれば、父も母もこくりと頷いた。

「わたしは特に。それより、見たところコーラルがいなくなっているようだが……？」

「部外者と思える人物にはご退出願ったのだよ」

俺とラエルとではない声があったことに、二人は不思議そうな顔をした。発生源を探そうとして部屋をきよろきよろと見回すが、当然何もあるはずも無い。

「い、今のは？」

訝しい声で言う母に応えるかのように、ラエルの左腕の光が増した。

「突然のこと、驚かせてすまない。わたしは……」  
「待って下さい！」

ラエルの腕輪が明々と光り、明滅し、あまつさえ声を発したことに父と母は驚いてそれを凝視していたが、その謎の声を遮るようなラエルの大声に目を白黒とさせた。

「おい。ラエル、何を……？」

「ら、ラエルちゃん？」

俺と両親とが驚いているうちに、俺の手を振りほどくようにしてラエルが立ち上がった。

「わたしから……話をします」

ラエルは勢いよく頭を下げた。

「申し訳ありません。レフェルス様、ルレッセ様！ わたし、追っ手から逃れるため、ある方より頂いた腕輪を……腕輪に宿る不思議な力を、ある方を介して使用していました。たった今、あなた方に起こった不可思議な現象はわたしの……わたし達のせいなんです。本当に、申し訳ありません　っ！」

父と母は顔を見合わせたが、母は頭を抱えてしまったようだった。

「ロアーツ、おまえは……知っていたんだな？」

「……ラエルの身を守るために、腕輪に魔術が封じ込められているらしいんだ」

「ほう？ ……それを証明する手立ては？」

父の問いかけに俺は答えることができず口を嚙みかけたとき、腕輪が俺の名を呼んだ。

「ロアーツ殿。彼女の腕輪を取ってみる。そして、頭巾を取れ」

父と母が再び驚いたように固まったが、俺は気付かないフリをして腕輪との会話を選んだ。

「それをしたら証しになるのか？ …… しかも、今は交信中なのにいいのよ？」

「交信自体にはさほど影響は無いはずだ。いいから、わたしの言ったとおりに」

腕輪に促されるまま俺はラエルを見るが、どう見てもその目がそれを嫌がっていた。

どうしたものかと俺が躊躇うと、後押しするように腕輪の聲がせかしてきた。

「気が進まないだろうが、我慢しろ。逐一それが人目に触れないよう命じていたのには、明確な理由があったからだと言っただろう？」

語り聞かせるような声が、ラエルを諭す。

「それを隠しだてる術は無い。だからこそ、おまえが付け狙われる原因になったのだと」

腕輪の声に、ラエルは観念したかのようにうなだれた。

ラエルの頭巾は既に俺が取り外していたも同然だったから、ラエルは残りの腕輪をつけた左腕をまるで差し出すかのように俺に向ける。

俺は彼女の腕輪を手を取った。

そして。

「なっ　！」

腕輪を預かった俺は、信じられないような思いでラエルを見つめた。その腕から腕輪を外した途端、ラエルの身に変化が起こったのだ。白金から薄茶色に移ろいを見せていたラエルの髪が、まるで日光のような黄金こがねの色へと染め変わっていく。あまりのことに、俺は呆気に取られた。

父は無言でそれを見つめ、母は頭を抱えてしまった。

「そんなことって……」

母のうめくような声に、俺たちの誰もが何も言えずにいると、ラエルが俺から奪うように腕輪を取ってそれを身につける。

瞬く間に髪色が元に戻り、間を置かず、腕輪の声が再び交信を始めた。

「奥方殿は彼女の髪質は類稀なるものだとお気付きだったらしいが、それは彼女ゆえの特質のものと言える。その髪の一筋一筋に宿る『魔力』が、本来の髪色から『黄金色』へと変えてしまうのだ」

ラエルが身につけている腕輪は腕輪の主自身が術式を念じ込めた特別な物で、本来の彼女の髪色に見せるために念じたおかげで、それを身につけている間ラエルの髪色は黄金には見えなくなっている仕組みらしい。腕輪の役割りはラエルの身を守る為だけの武器ではなかったのだ。

「珍しい事例ではあるが、宿した魔力が体質として現れてしまう者たちはことごとく『その色』を身に持つとされる。特に、彼女の場合は一目瞭然。それが、元凶。魔術の使い手にとって喉から手が出るほど欲しい『器』として狙われるはめになったのだ」

「な、なんですって……?!」

腕輪の声に俺たちは当然驚いたが、それ以上に信じられないと言わんばかりに悲鳴を上げたのは件のラエルだった。

「黄金に染まるのは、知っていました。ですが、それ以外のことは初耳です! この髪が、魔力のアカシ!? ……腕輪、本当なのですか!」

「わたしとて、本来これを伝えるつもりは無かった。無論、奴らの目的の正確なところはわからん以上……」

「だつたら!」

「新たに来る御仁の話はもう知っているのだろう? まさかおまえほどの者が既に難を逃れたなどと本気で思っていたのか?」

問い詰める形の腕輪の声にラエルは反論できないようだった。

「おい、一体何の話をしているんだ!」

両親はもちろん、俺ですら二人の話に置いてけぼりで、溜まらず口を挟んでしまった。話がさっぱり見えてこない。

「腕輪は……一体ラエルに何が言いたいんだよ?」

「ああ、ロアーツ。おまえに言いたかったことをすっかり忘れていたな」

さも思い出したといわんばかりの口調の聲が、一転、明るい声になった。

「先ほどのことはともかく、わたしはおまえに礼を言いたかった。我が『妹』を守ってくれてありがとう。出来ることならもう少し

守ってあげて欲しい、と。……わたしは、本当にそのつもりだった。この街に来てから、しばらくの間名乗りもせず第三者としておまえたち二人を見守ったが、おまえにならその妹を託す人物に相応しいとそう思ったんだ。同じ『偽りの名』を持つものとして……」

「な……？！ 妹！？ それに、偽りって？」

俺がその発言に疑問を挟む間もなく、声が冷徹な響きへと変わる。

「だが、もう遅いんだよ。ロア。おまえの緩やかな成長を待つ暇はなくなってしまった。『御仁』とやらに『黄金の娘』の話の流れすように手配しただろうわたしの主人は来てしまう……」

腕輪の言葉に一番に反応したのは、ラエルだった。

「 どういう……ことですか？」

「これが、最後の交信と心得よ。ラエル。……時は、来てしまったのだ。最悪な形で。以前の警告は、本当に何の意味にもならなかったな……」

ラエルは震えおののき、両手で耳をふさいだ。

「 いやっ！ いやです！」

「 忘れたのか！ わたしは初めに言ったぞ、その可能性もあると！ 名を捨て、居場所を捨て、その時さえ耐え抜けば自由になれるはずだった。だから、どうか逃げきつてくれと言った。誰にでも心を開くとは言わんが、心を奪われるなどあればと言ったのに、おまえはそれも聞かなかった。……せめて、居場所を変えてくれさえすれば。おまえはひとつところに留まり過ぎたのだ！」

「 だけど、こんなことって……」

腕輪の主は、ラエルを守る守り手のはずだった。けれど、その当人から宣告されるその言葉は、それを放棄するものだった。

「俺自身が望まぬとも、恐らく俺は、俺に『偽りの名』を与えた憎き仇に使役される存在としておまえを捕らえねばならんだ」

## 「明かされる理由」2

「なんでだよ!? どうしてそうなるんだよっ!?!」

腕輪の語る『宣言』を、俺は理解できなかった。

左腕に嵌めた腕輪を何よりの宝なのだと語り、美しい月を見ては闇を照らす唯一の光と語ったラエルを思い出す。声しか知らぬというその謎の導き手を命の恩人なのだと敬い、頼ることの出来た唯一の人物だったはずなのに。

「なんでアンタがラエルをとって……そういう話になるんだ!

やるなよ! 断ればいいだろ!? しなきゃいいじゃないか! 何故ラエルを助けてきたはずのアンタが、ラエルを追い詰めるんだよ!」

「ロアーツ、ちょっと黙って!」

母の鋭い声が俺を制した。

「母さん、でも!」

「腕輪の声の方。あなたが言った偽りの名は……それは、言霊の力ね?」

母の言葉は確信めいた口調だった。

「……言霊、か。我らが信じるものとは別のものだが、確かにその信仰の方がそちらには馴染み深いのだろうな」

「ええ。その類の本なら、わたしの実家シュバルツの家にもあるから、見たことがあるもの」

腕輪がそれを認めたことに、母は納得したかのようにうんうんと頷いている。

「なるほどね。だから、ラエルちゃんはロアを主と呼ぶのね？ その名前を名乗ることになったきつかけとしてロアが関わったことに間違いは無いのだから。そして、普段は極力その名前を呼ぼうとしないのも、ラエルちゃんに名を与えた形となったロア自身の名が知られるのはまずいから、なのかしら？」

「まずいって、どういうことだよ？」

「馬鹿ね。考えても見なさいな。おまえの所有物はおまえのものだけど、おまえ自身をわたしの所有物にしてしまえば、おまえの所有物は当然わたしのもになるでしょう？ ……そういう理屈よ」

「 どういう理屈だよ！ ありえないだろ、そんなの！！ 」

至極当然と言わんばかりな母の論理に、俺は納得がいかなかった。

「名を縛られることの無いだろう者には、この苦痛がどうにもわからぬのだろうな……」

腕輪が、呻くように呟いた。

「我ら魔の力や術に関わる者にとっては今でも強く名残が残っている。真名というものがある。古くは、創世記の神々が『全ての物事に名を与え、それを使役し、全てを支配した』と言う迷信。しかし、我らの世界では少なくとも迷信などではない。真名を知る者、知られてしまった者……真名を持つとされるそれら全てのモノに深い影響を与えるのだ。仮に意思を持つ人であったとしても、その名を奪われ、奪った者からの偽りの名を与えられることは、最悪の場合、思うまま使役される『操り人』と成り経てしまうのだ」

「 操り人って……そんなの、冗談だろ！？ その真名なんても

の、知らなければいい話じゃないか！」

「抗いたくとも、強大な力を持つ者にはいずれ知られてしまうのだ  
っ！」

腕輪が声を荒げ、激昂する。その声は腕輪の主自身本意ではない  
という思いを現しているようだった。

「なあ、ロアーツ。きつと、おまえだつて同じ気持ちだろ？ 救う  
手立てがその方法しかなかったから、俺は俺だけにしか彼女の居場  
所がわから無いように呪いまじないを掛けた。俺の全ての力を込めた術……  
『真名』を用いて行う秘術の一つだ。だから、俺さえへまをしなけ  
れば、彼女は自由になれる。そう思っていた。まさか、こんな  
にも早く『名』を奪われて使役されるとは思ってたなかった。俺が名  
を奪われる頃には、アイツも力を失うだろうし、彼女の力も底をつ  
くだろうと思っていたのに……」

苦々しげに呟く腕輪の声が言い終えるのを待っていたかのように、  
父が「お尋ねしたいのだが」と言った。

「狙いがわからないと仰るわりに、彼女の力が有限のものらしいこ  
とをご存知なのは何故でしょう？」

「恐らくとしかいえないのだが……純粋な魔力は、成人前の子供し  
か持たないとされているからだ。普通ならばとうに失われるはずの  
力を特殊な術を使って消失を食い止めることで、多くの者が魔術使  
いを名乗っている。加齢とともに力は衰えて失われるのが自然の摂  
理なのだが、それを認めたくないものに限って、力をも権力をも求  
めるからな……」

「ラエルちゃんの魔力が原因だと仮定できるなら、彼女に負担が無  
いように失くしてしまうことはできないのかしら？」

「魔の力を多量に使用する魔術を乱用すれば、無くなるかもしれん。

だが……」

腕輪は、無理だろうなと呟いた。

「成人する以外ないってことなのかよ？ 何か手立ては……！」

「……無理やりにオトナにするとどう方法も、あるにはあるがな」

「っ！ 方法があるのか？」

藁にも縊るような思いでそれを聞き出そうとすれば、腕輪はためらうような口調になった。

「……あるにはある、という程度だ。目くらましでしか無いが、魔力はそのままだ、黄金の色だけを失くしてしまうことは出来る」

「オトナにする、って……」

母はまさかねと一人ごちて、ラエルを見やる。

釣られて俺もラエルを見ていたのだが、ラエルは泣いているようだった。

「……だから、わたしに『三人の男の子』と出会わせたんですね？  
彼らに出会い、彼らと共に過ごすように。初めから、全て……っ  
「！」

涙交じりに声を荒げるラエルに、腕輪は、それを認めた。

「おまえのためだ。だから……」

「っ、嘘つき！」

ラエルは叫んだが途端、腕輪を外して、床に叩き付けた。  
そして、部屋の外へと一目散に駆け出してしまった。

「お、おい、ラエル!？」

ころころと床に転がる腕輪の有様に俺は仰天したものの、直ぐに体は動いてくれて、ラエルの後を追おうとする。父も母もあまりのことに驚いて動けないでいるのか、立ち尽くしているようで、俺が二人を置いて行こうとしたとき、今にも消えそうなほど小さい声が俺を呼び止めた。

「　　ロアーツ」

思わず舌打ちしてしまいそうになったが、腕輪の交信が声と声を伝えるものだと思い当たって、俺は頭をかいた。

「あー、そうか、おまえ見えてないからわかんねえのか!　今、ラエル外に出ちまったんだ!　腕輪、話ならまた聞くから、今はラエルを追わせてくれ!!」

「ああ……彼女を、頼む。ロアーツ。おまえなら、もしかしたら……抗えるかもしれん。だから……」

「ラエルのことは心配するなよ?　俺が、絶対守るから!」

弱弱しく光る腕輪に、俺は宣言するようにそれを言って、部屋を飛び出した。

### 「明かされる理由」3

ラエルが腕輪に言った嘘つきと言っ言葉が、俺には気になって仕方なかった。

もしかしたら、俺の知らない、腕輪とラエルとが密かに言い交わしていた計画でもあったのだろうか。

たとえば、近い将来腕輪がラエルを引き取るうとしていたとか。

それとも、単純に、敵の手に落ちてしまった絶大な味方の喪失に怯えて、あんなことを言ってしまっただけなのだろうか。

そんな風に取り留めもなく考えながら、俺は俺にとっては懐かしい場所である街の裏手の丘へとたどり着いた。

「よくもまあ、こんなところまで駆け抜けてきたもんだな……。おまえ、確か、病み上がりだったはずなのに……」

逃げるのを止めたのかはたまた疲れ果ててしまったのか、街を見下ろせる丘の上でちょこんと座っているラエルの隣に俺も腰を下ろした。ラエルはチラとでも俺に視線を移さず、真っ直ぐに街の眺めだけを見ている。思わず、俺はふうとため息を吐いた。

俺の実家であるリーグルの邸宅は街の入口近くである街東南部に位置していて、そこから中央広場の噴水の大通りを北上して学舎の建物に隠れきった裏手の道を昇りきった場所にこの丘はある。最奥と言ってもいいのではないかと言っくらい街の奥深くの場所であり、俺の家とこの場所はそれくらい極端に離れた場所にあるのだ。

一応日々体を鍛えている俺ですら息が上がっているのだから、俺よりも体力が無さそうなラエルの疲れ具合も相当のはずだった。

「何故腕輪を放り出したんだ」

問いかけても、ラエルは答えなかった。

「あれはおまえを守るためのものだろう？ あれを付けていても酷い目にあつてきたっていうのに、武器も無しに外を歩くななんて……！」

無鉄砲な真似をしたことを本当は叱り付けてしまいたかったけど、怒るに怒れなくなってしまった。

ちゃんとその危険を理解してもらわなければ、ラエルを狙う恐ろしい敵にみすみす彼女を奪われるような事態になってしまう。でもそれは、何度も誘拐されかけて、何度も腕輪の力に守られてきただろラエルが一番わかっているはずであり、だからなのか、彼女は気落ちして沈んだ様子でいるから。いつもよりも小さく見えた。

「ねえ、主様？」

何も言えなくなってしまった俺に、ラエルが囁いた。

視線は相変わらず俺を見ないまま、街を見下ろしている。

「わたしたちが初めて出会ったときのこと、覚えていますか？」  
「……五年前、だな」

思わず、この場所で交わした遠い日の約束のことを思い出してしまった俺は、思い出がごちゃごちゃにまとまっていることに気付いた。

出会った場所は、街の門前。俺が、学舎の授業を嫌々に終えて、ケインとコーラルと馬鹿騒ぎをしながら帰っていた矢先のこと。

その翌々日、この場所で 街の裏手の丘の上で、初めて彼女の名前を聞きだして、自己紹介をして……、そして俺は『ロア』と呼ばれたのだ。

「五年前のあの日、わたしはシルベニアの森を脱出し、やっとのとたどり着いたこの街で、あと一息と言うところで街門の自警団の方に詰め寄られてしまったんです。そして、その最中、三人の男の子に出会いました。主様と、コーラルと、ケイン。覚えておられますか？」

「ああ。　　つておまえ、シルベニアの森を通ったのか！？　あそこには猛獣が出るって　　！！」

シルベニアの森とは、この街の北から東の部分を覆う外郭の直ぐそばにある深い森のことで、街の皆々には猛獣が住む森だと言い伝えられる禁忌の森のことだ。

この地方が辺鄙な場所となつてしまった理由の一つともされていて、その森を越えるのは武装した大人たちにも容易ではないとされているから、俺の父が他の大人たちと手を組んで商いとしている物資運送が主の取引の価値は計り知れないものとなっているのだ。

「もちろん、なんとかしましたよ？　わたしにはあの腕輪がありますから。でも、人以上には効かないことが多かったので……協力者に手伝つていただきましたが」

「協力者つて、そんなのいるのかよ！？　森の住人かなんかかよ！？」

そんなのいるわけが無いと思つたのに、ラエルは「そんなものです」と言つて、あっさり俺の疑問を流してしまった。

「それより、あのときのこと、おかしいと思いませんでした？　何故、自警団の方々はわたしを街に入れてしまつていたのか。普通ならば、門前払いするはずなのにと、門番役の命を受けたこともある今の主様ならばそう思つてしょう？」

「それは……」

考えないようにしていたことだった。

本来、この街には旅芸人なんてものも滅多に來ない。僻地で辺境だからなんていう理由は、今となっては苦しい理由としか思えないほど、余所者を寄せ付けず排除しようとする。紹介状とか、身元がしっかりしたものでないと、街は入出を許可しない仕組みになっているのだ。

俺はそれを、ラエルのような人攫いに合う者を守るために部外者の入出を強化していった結果だろうとそう思っていた。そう思おうとして、深くは考えようとしなかったのだ。部外者であるはずのラエルだけを、すんなりと受け入れてしまった過去を忘れて。

「俺たち三人が邪魔したからってことか？」

「邪魔と言うか……結局のところ、そういう仕組みを行わざるを得なくなつたんでしょね。主様たちはともかく、わたし自身、大人たちと腕輪の言うことを聞かなかつたことに変わりはないのですから」

「じゃあ、おまえが來たから、そんな仕組みが生まれたとでも言うのか？」

ラエルは一瞬口を噤んでしまったかのように見えたが、何かを思い直したかのように口を開き、とつとつと語りだした。

「主様。わたしは、……今まで思い違いをしていたんです。腕輪の主がわたしをこの街に導いたそもその理由を。三人の男の子に出会つた意味を。随分裕福な家庭の子ばかりを寄越したみたいだといわたしにもわかつたのに……それだけじゃ無かつたみたいなんですよ」

「どつという意味だよ？」

「今、考えたら不思議なんです。いいですか？　もしも、わたしが腕輪の主ならば、追っ手から完全に身を隠すために一番相応しい場所は、主様の通われているヴァレンタイン邸以外には選びません。屈強な男たちが屯し、その腕を日々磨たむろいているのですから。そこに幽閉しておけば、当主一族の眼も届きませんし、これ以上に安全な場所は無いでしょう。けれど、わたしはヴァレンタイン邸に引き取られなかった。そうですね、主様？」

ラエルは至極冷静に、当時の俺の言葉を忠実に再現してみせた。

「『ヴァレンの家になんか行ったら、おまえ、追放されちまう！それでもいいのか？』って。当時のわたしは、シルベニアの森の旅路を終えたばかりで心底疲れ果てていました。安寧の場所が欲しかったのです。だから、あなたの言葉を聞いただけで怖くなつて、逃げ出したくなりました。そして、助け出そうとしてくれたあなたの手を取ることに、何の抵抗も躊躇いも無かつたんです」

そう言えばそうだったと、俺は懐かしい思いが胸に満ちた気がした。

「……そういや、疲れ果てていたわりには、おまえよく俺についてこれたよな。俺、追ってくる自警団の男連中と盛大な鬼ごっこを始めちゃったのに」

「あなたの手を離せば、お終いだと思っていたんですよ？　きっと、恐ろしい場所に連れて行かれてしまうのだと、必死でしたっけ……」

話が反れた。ラエルは小さく咳払いした。

「とにかく、当時の腕輪の主とヴァレンタイン当主には繋がりがあつたはずだとわたしは思っています。都合のいいことに、わたしが

街に入ってから後、ヴァレンティン邸が取り仕切る自警団の方々はこの街にやって来る余所者の悉くを排除しようとしたのですから。

ね、いいですか、主様？ 今の出会いの話でわたしは嘘をついていませんし、事実も捻じ曲げていませんよね？」

「え？ あ、ああ……」

ラエルの笑顔に釣られて、俺は曖昧に返事を返した。

何しろ、五年前の出会いの話だった。聞いていても「そうだった？」と思える箇所が多々あるような気がして、俺はラエルが何故そんな昔話を始めたかすら、余り理解できないでいた。

けれども、話が出会いの場面にまで関わっているのだとすれば、俺はどうしても確かめておきたいことがあった。

「あのときの俺はもちろん、ケインもコーラルもおまえを受け入れようとしていたよな。俺たちはほぼ同時に、おまえに手を伸ばし、ラエルは俺の手を取った。俺はそれを俺たち三人の中で一番に名乗りを上げたからだと思っていただけ……」

俺の言葉に、ラエルはようやく俺の方へと振り返り、一つ頷いて見せた。

彼女が言葉では何も返答してくれなかったことに、俺はひっそりと息を吐いた。

（ ああ、やっぱり…… ）

「お察しのとおり。わたしは、そのような理由であなたの手を取ったわけではありません」

「どんな理由だよ？」

この問いかけには再びラエルは街の方へと視線を向けて、ぼそぼ

そと呟いて見せた。

「名乗ってくれたとき、主様の声に反応して腕輪が光ったんです。

それが、理由。幼いわたしは、あなたが腕輪の主であるはずも無いことはわかっていたはずなのに、腕輪の主同様にわたしを守ってくれる人だと信じて疑わなかったから」

「……つまり、当時のラエルは俺のことをあの腕輪の主のような救い手として見てくれたってことか？」

「はい」

「そっか……」

こちらを向かないままラエルは胸中を語ってくれたようだったが、俺にはそれが面白くなかった。その仕草が、一体何を意味しているか、ずっとそばにいた俺にわからないはずは無いのに。

（　　目も合わさないし、齒切れも悪い。……ってことは、俺に嘘ついてるんだよな、ラエル？）

それを言葉には出来ないままラエルを見やれば、困ったように顔を俯かせた。俺が勘付いていることにすら、彼女とて気付いているのだろう。なのに、撤回しようとしない。言いたくないことを大抵拒否か黙秘かをして逃れるラエルが嘘をつく意味があるのだろうか、考えに考えるけれど、中々見えてこない。思いつけない。そもそも、材料が足りないような気がしてならなかった。

ならば、追求するしかないだろうと、俺は挑むような気持ちでラエルを見た。

「明かされる理由」4

何故、腕輪を放り出したのか。

何故、腕輪の主を嘘つきと言ったのか。

もちろん、無理強いはしたくない。けれど、どうしても俺は

知りたいと思つてしまったのだ。

「ラエル。俺は出来るなら誤魔化して欲しくないんだ」

「……そうですよね」

悲しそうな声で、ラエルは呟いた。

「俺が聞きたいこともわかるだろう？ 話して欲しい。駄目か？」

ラエルはため息を吐いた。

「腕輪に言つたわたしの『嘘つき』という言葉……ですよね？」

「ああ」

ラエルは困つたように眉根を寄せた。

「単に、わたしが思い違いをしていただけなんですよ？」

「おまえが動転して腕輪を放り出すくらいだからな。……嫌なら、いいんだぞ？」

本心をぐつと押さえ込んでそれを言えば、ラエルはふと微笑んだ。

「嘘がお上手ですね？」

「見破るのは得意じゃない。聞き出すのもな。だから、俺には待つ

「ことしか出来ない」

はっと目を見開いたラエルが、耐えかねたように一つ涙を落とした。

「ごめんなさい、主様。いつもいつも……あなたにはかり迷惑をおかけして」

「迷惑じゃない。……泣くなよ」

近付いて涙を拭ってやろうとしたら、ラエルは俺から距離をとるように少し後ずさった。

「……当初より、腕輪の主には『信用できる唯一の相手』が必要であると言われていました。こちらに導かれる前はもちろん、四年前のあの日まで、交信の度に常に命じられてきたことです。腕輪の主曰く『主』を求めろ、と」

「っ！ 『なんとなく』なんかじゃ無かつたんだな」

思わず突っ込んでみたら、ラエルは困ったように笑った。

「わたしは、あのとき、その理由を知りませんでしたもの。なんとなくとしか言いようが無いじゃないですか」

「はいはい。主様ってのは、やっぱり、光栄なお役目だったわけだ」

先ほどラエルが明かしてくれた『唯一の相手』と言う言葉の響きに、俺は満足してやることにした。

「出会ったときのこと、主を求めると言った言葉、持たされていた腕輪のこと、腕輪がわたしに命じてきた言葉の数々……。もしかし

たら、腕輪は、ヴァレンタイン邸の監視下に置けなかったことを受けて、最悪の事態を想定して動いていたのかもしれませんが」

「……最悪の事態って？」

「彼の人の名が奪われたときのために、ということですよ」

「一応確認しておくけど、ラエルには、腕輪の主の思惑がわかったってことなんだよな？」

ラエルは動揺したように慌てて俺からの視線を避けた。

「いえ、もしかしたら、ですよ？　だって、そんなこと、わたしにわかるはずが……」

ラエルが何かを言いかけたように見えたそのとき、ふと顔色を変えて目を細めた。無表情と言うよりかは、諦めを感じさせるそれだった。

「……それでも、矛盾しているように思うんですけどね。腕輪の主が命じてきた言葉の全てに関係があるような無いような」

肝心なことをはっきり口にしないラエルに、俺は焦らされているような気がして、少しいらいらした。

「そんなの、腕輪の主人以外には答えなんて知りようは無いんだから、いいだろ。隠すなよ」

「では、人知れず生きろと言う言葉の意味を、主様はどう考えますか」

「ああ、他人に気を許すなって意味じゃないのか？」

答えたら、ラエルは気まずそうに口を閉じた。

「違うのか？」

「……多分、腕輪は、わたしの身を守るためにありましたから」  
「え？」

何かが閃いた気がしたけれど、俺にはまだそれが意味することがわからなかった。

「あの腕輪は、おまえを攫おうとする輩を追い払うために持たされてたんじゃないのか」

「恐らく、それだけじゃ無いってことなんでしょうね」

「いや、あの腕輪からの攻撃は無差別ではなかったはずだ。おまえに危害を加えようとした者限定で、じゃなきゃ、おまえ、今頃俺たちとこんな風に生活できていたかどうかすら……」

言いかけたそのとき、俺は何か思い当たったような気がした。

（あれ、待てよ？）

（本当に危害を加えようとした者だけだったか？）

ラエルを狙いに街にやって来た男たち。返り討ちに合ったのか、それとも彼女に近づく前に見つかったのか、自警団でも報告されている不審者の数々。そのどいつもが、誘拐犯のように武器をかざしてラエルを攫おうとしたのだろうか。

いや、むしろ、誘拐犯の手口的には、とにもかくにもラエルに近付いて、彼女の隙と油断をあわよくば見付け出そうとするはずなのに。

（ それに、誘拐犯とか不審者以外にも、攻撃を受けた者がいるじゃないか……！ 絶対にラエルに危害なんて加えないと自負している人間が……！ ）

俺はその人物に思い当たるからこそ、思いっきり自嘲した。胸に手を当てなくてもわかるものがある。 暗い闇のような心の底から、沸きあがった思いは常にあるのだから。

「……………待ってくれよ……………」

呟いたそのとき、目の前のラエルがはっと目を見開いたように見えた。俺にはその表情が読めなかったが、大体、わかった。わかつてしまった。

「俺、少なくとも、おまえに……………危害を加えようとはしていないかったもんな……………そういうことかよ」

ほぼ棒読みで呟いた言葉は、ラエルに届いたのだろうか。ラエルは、目に涙を一杯に貯めている。

体中に冷や汗が流れ、俺は考え無しの行動にようやく後悔していた。

（俺の考えたとおりなら、ラエルがその答えをはっきりと口にしないわけもわかる。わかるけど……………っ！）

余りにもそれは、と俺は思った。俺はそのままの体勢で頭を抱えた。むしゃくしゃした衝動を紛らわそうとして、髪を掻き毟る。

しかし、発散できるものなど何も無い。むしろ、鬱憤は溜まって行くような気がした。

（そっか。俺みたいな男に、襲われるなっことか）

腕輪の気苦勞に笑ってしまいそうになるが、決して表には出せない

い笑いだった。

「三人の少年と、一人の女の子。少なくとも、少年達は皆揃ってその女の子に恋をしたさ。……見事にな。おまえたちの思惑どおりに」

呟いたら最後、その言葉は元には戻らない。

ラエルの顔色が変わって、言葉も無しに頭を振った。違うのだと目が語っているように俺は思ったが、その目から一つ涙が落ちていった。

（まさかとは思うけど、ラエルだって、そんなことを直接的に腕輪に語られていたわけではないだろう。いや、もしかしたら腕輪一人が企てたことなのかもしれない。そうだ、きっと……）

一瞬そんな思い付きがあったけれど、すぐさま掻き消えた。そんなはず無いと俺は思い直した。

だって、ラエルは、腕輪の主に厳命されていた。心許すのはともかく、心を奪われるな、と。

（ラエルが腕輪の言葉を忠実に守っているのだとしたら、俺は……格好のカモだったと言うわけだっ！）

「絶好のカモ」

「悪いな、ラエル。俺、どうしようもない……」

ラエルが強い目で俺を見た。

「何を謝っていらっしやるんですか!」

「俺だって謝りたくない!」

反射的に大声で返してしまったら、ラエルが驚いたようにビクついて俺から逃げるように顔を背けてしまった。  
傷つけたくなんて無かったのに。

「俺は、ラエルが好きだ。……好きだけなんだよ! だから、ラエルに無理やり『あんなこと』だってしてかそうとして、腕輪から攻撃を受けて罰が当たったさ! でも、これって……仕組まれていたことなんだろう?」

その言葉を勢いそのままに言おうとしたのに、情けないことに声が震えてしまった。

ラエルは振り返って俺を見たが何も言わない。

俺はなんてことない風を装ってさらに言葉を重ねた。ラエルがうんと頷いてしまえばいいように、わかりやすいように。

「三人の少年の中で一番都合よくて俺が騙しやすかったんだろ? 頭悪いしな、俺。本当のおまえは俺に調子を合わせるだけ合わせておいて、この四年間、腕輪が寄越すだろっ迎えだけを心待ちにしていたんだろ?」

何も言わないでいるラエルは、そのとき、自らが開けていた距離を縮めてきた。俺のそばに立ち、何をするのかと思いきや　ラエルは手を伸ばして俺の首もとを掴み、勢いよく引き寄せてきたのだ。突然のことに前のめりに体勢を崩しかけた俺を、ラエルが受け止める形になった。

「主様……わたしを疑っていらっしやるんですね？」

強引に合わせられた視線の先、ラエルの目はゆらゆらと揺れていた。でもそれは今にも溢れそうになった涙が原因なだけで、視線自体は二の句が告げない俺を、ひたと見据えている。

「確かに、わたしは一目惚れとかでああなたの手を取ったわけじゃありません。でも、腕輪に命じられたわけでも無いんです。たまたま、あなたの前で腕輪が光ったのだって、いわば切欠の一つにしか過ぎません。　そう、それももしかしたら、腕輪が当時のわたしの置かれている事実が遅れて気付いて慌てて力を発動しようとしていただけだったのかもしれませんが。　ほら、わたし、物騒な男の人たちに囲まれていましたから」

あつと俺は声を上げてしまった。ラエルの言葉に、自分自身が理由で反論出来ないことに気付いてしまったからだ。

自警団の男連中は門守役の際武器を携帯する。当時の俺はそれを知らずそんな一見物騒な男達に囲まれている見知らぬ少女を見て、慌てて助け出そうとしてしまったのだ。だから、その点では我先に勘違いしてしまった俺が言えることではないし、逆に門守役として警備に立つようになった俺とてそういう格好をして警備をするのだから、それに対しては反論できないのだ。

「だけど、それとこれとは」

「そうですね、それとこれとは別の話です。もう、本当に馬鹿で愚かな方！ 嘘つきな方！ 考えてやるって言って下さったからわたしも正直に話したのに、どうして早合点してしまわれるんですか！ 腕輪であなたの意識を奪い、街中の人を眠らせた後、わたしが何を選んだのか忘れてしまったんですか!？」

「っ!？」

今度こそ何も言えなかった。

俺はバツが悪い思いで、口元を押さえる。言葉は取り消せない。一度でもラエルを疑った自分が恥ずかしかった。

「っ、ごめん。俺、どうかして……」

言いかけたとき、更にまたラエルに引き寄せられた。

俺は思わず目を睜った。眼下で、すぐそばで、ラエルが目を閉じている。俺に、口付けてくれている。

あまりのことにどうすることも出来ず、俺は固まってしまっしかなかった。

「……信じて下さいますか？」

ものの数秒だったのだろうか、口付けを止めたラエルが俺を見上げていた。俺の反応を窺うかのように。

俺は、正直に言って、すごく嬉しかった。

(でも)

誤解が解けたかもしれない。そう思えたのは一瞬だった。すぐさま、暗い思いが俺を支配する。

( でも、これが、またこの場しのぎの単なる誤魔化しの一つだったら?)

俺は素直に頷くのを、ためらってしまった。  
動じない俺に、ラエルが、声を震わせた。

「 つ、どうすれば信じて下さいます? 主様は……ロア様は……  
わたしを、嫌いになってしまわれました?」  
「 違う! でも!」

「 以前にも申し上げたとおり、わたしはどれほど疑われてもおかし  
くは無いです。それをわかっていたつもりでした。でも、こ  
んなにも辛いだなんて思わなかった」

ラエルは涙ぐんだままの眼を拭おうともしないまま、その手で、  
ぎゅっと自らの服の胸元を掴んでいた。

「 返しませんよ」

「 へ?」

「 主様から頂いたモノを、わたしは返しません。……わたしのもの  
です!」

「 ……ああ」

その手の下に握られているものの正体すらすっかり忘れていた俺  
は、確かに頷いて見せた。

「 俺も返して欲しくない。 ラエル。おまえが何をどう思おうと、  
それは四年前に誓った俺の想いの証しだ」

ラエルがはつと息をのんで涙を流す。

「主様っ！」

「……うわっ!？」

ラエルに名を呼ばれたその瞬間、俺にとって有りえない事件が起きてしまった。

感極まったラエルが、泣き出すのはわかる。顔を紅くしているのも、何回かは見たことはある。けれど、俺に向かって飛びついて抱きついてきて、勢い余ってこの俺が押し倒されてしまうことなんて、今までにあるはずも無かった。

それでも鍛えているのか弱そうな華奢な女の子に押し倒されるなんてと、現実逃避している場合ではなかった。

「……ラエル？」

俺の上にいるラエルの様子を窺おうとしたら、ラエルも我に返ったのか、その顔が真っ赤になった。そして 俺の肩に顔を埋めた。俺の予想は見事に外れてしまった。

「ラエル？」

もう一度その名を呼ぶが、俺の予想する行動を彼女は取るうとなかった。

飛びついてきたラエルを無我夢中で受け止めてその勢いのまま後ろから地面に激突したとき、頭を打ったのかもしれない。俺は深く考えることを避けた。

(きつと、都合のいい夢なんだろうな)

(祝福されるわ、抱きつかれるわ。一生分の運を使い晴らしちゃったのかもな……俺……)

考えすぎないようにと念じつつ、俺は身を起こすことにした。  
それでも、ちゃっかりラエルの体を支えているままだから、未だ  
ラエルは俺の体の上にあった。

「主様……」

泣いていたラエルが俺を呼ぶ。

俺の立てた両膝の間に納まってしまつかのような位置にいるラエルは、寄せていた頭を上げて俺の眼を見るように視線を合わせてきた。

見慣れた上目遣いの眼が、俺に何かを訴えていた。

「お願いがあります、主様。　わたしと、契約をして頂けませんか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2765n/>

---

「その者の名は」

2012年1月10日23時47分発行